

---

# **とある科学の原点帰還(アトミックルーツ)**

翔泳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
アトミッククルーズ  
とある科学の原点帰還

【Zコード】  
Z3215Z

【作者名】  
翔泳

【あらすじ】

/ 第1章 学園戦争編 完結いたしました。 第2章 現実殺し編

スタートです。 /

/ 9月10日色々修正中です。前半の8話は少し内容が変わっています。全体の内容に変更はありません／

/ これはとある魔術の禁書目録の世界で繰り広げられる1・5次創作物語です。人口230万人、その8割が学生で能力者の集まる学園都市。その学園都市で勃発する学園戦争。そしてそこで起きた小さな事件。しかしそれは後の大きな事件の始まりに過ぎなかつた。

オリジナルキャラ、原点帰還の能力を持つ神岡史貴を主人公に能力者達の物語が始まる。 /

/ 完全オリジナルなのでストーリーやキャラクターは原作と違います。ただ、舞台や学校名などはそのまま使用させてもらっている部分がほとんどです。ご了承下さい。 /

/ 最初の方は自信ないんで一度一通り読んで頂けると嬉しいです /

/ サブタイトル少し変わりました /

/ 今後、更新スピードが落ちます； /

## 設定変更のお知らせ

とある科学の原点帰還アトミックルーツを読んで頂きありがとうございます。

9月2日以前から読まれて下さっている方に設定の変更のお知らせがございます。それ以降に読み始めて頂いた方には支障はございません。

このたび主人公の能力の詳細を変更させて頂きました。

能力名は原点帰還そのままです。

触れたモノを原子分解 觸れたモノを帰還させる

簡単に説明いたしますと、例えば発火能力者の放った炎を触れた瞬間に能力の干渉を受ける前に帰還させ、消してしまつ。と言った感じの能力です。

ただしこれは何かしらの異能の影響を受けているモノに限ります。

実は本来これが原点帰還の能力でした。

その為各話の会話内容や戦闘シーンも若干変わっています。

特に第5話、vs四天柱?は後半の戦闘シーンが変わっております。

物語の内容に変更はありません。

勝手な変更を「」で承ぐださ。

おかしな点がございましたら教えて頂けるとありがたいです  
こんなことがありましたが、それでも読んで頂けるなら嬉しい限  
りです。

## 第1章 学園戦争編 無茶苦茶（前書き）

とある魔術の禁書目録の世界を舞台に繰り広げられる1・5次創作物語です。全てオリジナルのキャラクター、オリジナルの能力ですが名前が違うだけで中身は似ている所があるかもしれません。その辺りは「ご了承下さい」。

新米ですが、少しでも多くの方に楽しんでいただけたらと思っています。

最初だけでなく一通り読んで頂けるとありがたいです。

それではよろしくお願いします。

## 第1章 学園戦争編 無茶苦茶

「いい加減にしてくれえええ」

既に30分、この夜の学園都市内を走り続けている。  
もちろん夜間トレーニングの真っ最中と言つ訳ではない。  
トレーニングであれば音楽を聞きながら気持ちよく走れるのだが  
……

「イヤよー・アンタこそいに加減にしなさいー！」

夕方コンビニに急に飲みたくなつた炭酸ジュースを買いに行つた  
のが何かの縁なのであらう。

普段飲まないモノを買いに行つたりするからこいつなるのだ。

夜間のトレーニングなら喜んでやつてもいい。  
鬼ごっこだつてこの年になつてもやろうと思えば出来る。  
ただ、これはそう言つたモノではない。捕まればはい鬼交代と言  
つた可愛いモノではない。

「もう今日は十分だろーーー？」

かみおか しき  
**神岡史貴**は顔だけを相手に向けて叫ぶ。

走るのを止める訳にはいかない。ここはまだ街のど真ん中だ、周  
りには建物が多すぎるし夜の時間を楽しく過ごしているカップルの  
姿も見える。

相手が諦めてくれれば速い話なのだが……

「いいから止まつなさい…」

そんな様子は微塵もない。

学園都市でも5本の指に入るエリート校、常盤台中学の制服を纏つた彼女は追いかけることを止めようとはしない。

お嬢様学校の可愛らしげに制服を纏っているにも関わらず、その姿は獲物を追いかける猛獸をようである。

そんな猛獸に追いかけられながらさうに5分ほど逃走を続け、都市の端にある公園に辿りついた所で漸く史貴は足を止めた。

やっと撒けたかな、なんて後ろを振り向いたが

「やつと止まつたわね」

そんな期待も空しく史貴が振り向いた先には、燃え上がるような赤い髪を靡かせて今にも飛びかかって来そうな女の子の姿があった。

最早ため息すら出ない。

「なあ、今日はまういいだらう?」

「ダメよー。私はまだ納得してないんだからー」

轟！　と彼女は燃える様に赤かった。いや、寧ろ燃えていた。

実を言うとこう言つたことはこれが初めてではない。初めてがいつだつたかさえ思い出せないほどこんなことを繰り返しているのだ。会つたびにこんな事をされていてはこちらの体力が持ちそうにない。一刻も早くこの場を何とかしなければならない。

田の前の猛獸と言つたのお嬢様を宥めようとする

「学園都市に7人しかいないレベル5の1人、常盤台中学の灼熱炎コロナリ  
帝の上坂茜オノカミサカアカネさんがそんなにムキにならなくても」

が……

「う・る・さあああい！…」

お嬢様には効果がないようだ。

言葉と同時に巨大な火球が神岡史貴に向かつて飛んで来た。  
その火球は神岡史貴に近づくにつれて酸素を取り込み形を大きく  
しながら向かつて来ている。

一般人に向けてそれを放つてしまつたら間違いなく一瞬で丸焦げ、  
いや最早形も残らないかもしない。

しかし神岡史貴はそんな炎を目の前にしても慌てずに両手を前に  
出し火球を受け止める。

その瞬間、その火球は風船が破裂するように跡形もなく消えてし  
まった。

「あんただつてその中の1人じゃないのよ！…」

上坂茜は怒鳴るように吐き捨てる。

レベル5。

学園都市に住む230万人もの学生は能力開発とされる時間割り  
(カリキュラム)によって何かしらの能力を持つ。全ての学生はレ

ベル0からレベル5の6段階に分けられ、その6割がレベル0である。その中でも最高位のレベル5は7名しかおらず、32万8571分の1の才能の持ち主と言つても良いかもしない。

そう。神岡史貴も学園都市に7人しかいないレベル5の1人だ。

「原点帰還、神岡史樹。私は発火能力者頂点の灼熱炎帝バイロキネシスとしてアンタに勝たなきやならないの！」

「こんな所で火の玉投げても木にでも引火しらうすんだよ！？勝つって言つたつて一体何度もやれば気が済むんだよ！ て言つかもそもそも何でそこまで勝ちにこだわるだ！」

周りにある建物は最新の技術で建てられている為、そう簡単には燃えないだろう。学園都市の端と言う事と夜と言つこともあります。人もいない。しかしこの公園にある木に灼熱炎帝コロナリオンの炎が引火すれば忽ちここは火の海になってしまふだろう。

「な、何でつて言われたつて……そんなの関係無いでしょ！ アンタは大人しく私と勝負すればいいの！」

(無茶苦茶だ……)

「そんな無茶苦茶言つた！ な、十分やつたから今日も引き分けでいいだろ？」

「そう。今日も、だ  
決着など着いた事がない。

「そんなのダメよ」

辺り一面が炎に飲み込まれていく。

「今日こそアンタに勝つてやるんだから！」

確かに牛は赤いモノを見ると突進していく。

この子の前世はきっと牛に違いない。いや待てよ、自分が炎で真っ赤なだけで赤いモノを見ている訳でもないか。ああ自分の発した炎を見ているのか

そんなくだらない思考をしている間にも上坂茜が翳した両手には渦を巻く様に炎が集まって行く。

周りの事なんか知らない、と言わんばかりのその巨大な炎は既に周りのいくつかの木に引火してしまい、炎は徐々に公園全体へと広がっていた。

「だからお前はこの公園を失くす気か……」

しかしそんな言葉も上坂茜の耳には届かなかつたらしく彼女の頭上には10メートルを超す炎の塊が完成していた。

近くにある噴水の水は最早蒸発してしまっている。

そんな事もお構いなしに彼女はニヤつと笑うとその炎を何の躊躇もなく叩きつけた。

## 第1章 学園戦争編 無茶苦茶（後書き）

まあ始まつはこんな感じです……  
これからどうぞよろしくお願ひします。

## 尊の話（前書き）

### 簡単な登場人物紹介

名前・**神岡史貴**

かみおか  
しき

能力・レベル5第3位、

原点帰還。

アトミックルーツ

名前・**上坂茜**

かみさか  
あかね

能力・レベル5第5位、

灼熱炎帝。

コロナリオン  
バイロキネシス

## 尊の話

「ああああ、こんなにしちまいやがつて」

朝になり公園の様子を窺いに行つたのだが、そこは最早公園とは呼べる代物では無くなつていた。

辺りの木々は焼け、公園の真ん中に設置されてあつた噴水は無残にも融け落ち、原形すら分からぬ状態である。

既に数名の風紀委員ジャッジメントが公園の周りをうろついており、集まつた野次馬に目撃情報を聞きまわつているようだ。

昨日、上坂茜が放つた超巨大火球。もしもそのままの状態であれば被害はこの程度では済まなかつたであつ。

これでもその火球は直接公園には当たつていないのだ。

この能力を使って火球を消したのだ。

改めて発火能力者の頂点の力を思い知らされる光景である。

「神岡さん」

そんな声と同時に一瞬にして史貴の前に砂埃が舞う。

「ゴホッ、こんな近くで能力を使わなくてもゴホッ、数メートルじやないか」

「こやああ、神岡さんの姿が見えたんでつい調子に乗ってしまひて」

未だに「ビロビロ」と体に静電気を浴びながら、彼は笑顔でそう答えた。

彼、風祭竜は上条学院所属のレベル4発電系の能力者。自称、原点帰還の舎弟を血の名乗り、ジャッジメントも務める。  
また彼自身もレベル4でありながら疾風迅雷の異名を持つている。

（ちなみに、今回の事件も例のやつですか？）

風祭竜は手を口に近づけて小声で忠貴に囁ねてくる。

（ああ、それが例のやつだ……）

例のやつ、と並ぶのはもちろん上坂茜の「」である。

「相変わらずモテモテみたいですね」

モテモテとは異性から非常に人気があると言ふ事なのだが、あれはどうに見ても人気があると言ふモノではない。

ホントに何か因縁でもあるのではないか？ と疑いたくなるような行動である。

「一応、いつもある程度処理しますんで、気にせんじでござりやつたり下さる」

「バカやつだ。毎度毎度そんないとやつてたらその内、学園都市全

部燃やしかねないぞ」

そんな冗談を言つてみるが、彼女なら本当にやつやつである。

イメージ、自分を追いかけながら炎をまき散らす上坂茜の姿を何ともリアルに想像することができた。

(有りそつな絵だ……)

「やうやくええば

」

と、何かを思い出したように風祭竜は呟いた。

「神岡さん、明日つけて予定ありますか？」

唐突な質問ではあったが、夏休みに入った事でどこかに行きたいのだろうと神岡史貴は悟る。

「いや、特にないけど。何かあんのか？」

「はい、ちょっとした事が」

と風祭竜の顔が何か企んでいるようなそんな雰囲気であったが、何かしらの暇つぶしになるだろうと特に追求もせずに

「……まあ良いけど」

予定を組んでしまった。

「じゃあまた連絡しますね！」

と風祭竜は疾風の如く去つて行く。

さすがは疾風迅雷シーケーティングスターと感心したい所だが、腕の時計を見てハツとする。

「ヤバい、早いいかないと」

と言いながらも特に慌てる様子も無く神岡史貴は街へと消えて行つた。

~~~~~

上条学院。

第7学区にある至つて普通の高校。同じ第7学区にあるHリート校の常盤台中学の様にレベル3以上でないと入学が出来ないとそんな事は何もない。

特に有名でも何でもなかつたのだが、この数年で大きく変わつた。

Hリート校でも無かつた高校に2人のレベル5が入学したのだ。何故こんな高校に入つて来たのかは不明であるが、そのおかげで今となつては常盤台中学に劣らないほどの知名度を誇つている。

その中の一人である原点帰還アトミックループの神岡史貴は上条学院の屋上を曰指して歩いていた。

いくつもの階段を上り見えて来た屋上のトビラを開けると、そこには夏の太陽が燐々と降り注いでいた。時々吹き抜ける風は涼しく

はなかつたが無いよりは増しである。

しかしそこには誰もいない。誰も見えないのだが

「会長ー」ここののは分かってるんですよー。」

神岡史貴は誰も見えないハズの屋上で辺りを見渡しながら叫ぶ。すると視界に入るある一点が歪み始め、次第に人の形を現していく。

「そこにいたんですか、会長」

現れたその姿は、まさに会長と呼ぶにふさわしく、きつちりと着こなされた制服にメガネ、綺麗に寝かされた純粋な黒髪に冷静沈着を思わせるオーラを放っている。

「すまない。1人になる時間がほしくてね」

会長と呼ばれる男はゆっくじと神岡史貴に近づいていく。

「話してるのは何ですか?」

うん。と会長は少し真剣な表情で質問した。

「学園戦争と言つのを知っているかい?」

学園戦争。

何でも自分の強さを証明するために学園都市全部を巻き込む戦争を引き起こそうとしている能力者がいるとのネット上の噂だ。

「それがどうかされたんですか？」

それがだね、と腕を組み片方を顎の下に持つていき親指で顎を触る、と言つて会長お決まりのポーズで話をする。

「じゃあ本当に起きるかもしれないんだよ」

会長の言葉に耳を疑う。

学園戦争？

そんなモノを始めて一体何の意味があるのか？

ここは学園都市、能力に溺れて事件を起こす能力者は後を絶たないが学園都市全体を巻き込むなんて事は一度も無かつた。

「もし、それが起きてしまつたら低能力者達はどうなるんですか？」

全能力者の6割はレベル〇である。つまり学園都市全体と言つたら戦争なんてモノに全くの無関係な学生が多く巻き込まれる事になる。

「上位能力者が何とかするしかないだろうね」

「 そうですね、もしもの時は俺達レベル5がどうにかしないといけませんね」

そう、もしもそんな事が本当に起きるとするならば自分たちが何とかしないといけない。

その為のレベル5だ。

「何かあつたらまた連絡をしよう

そう言つと会長は屋上を後にする。

ただ1人残つた神岡史貴に夏の暖かい風が吹きつけた。

## 尊の話（後書き）

### 簡単な登場人物紹介

名前・風祭竜

かざまつり りょう

エレクトロマスター

能力・発電能力レベル4。

疾風迅雷の異名を持つ。

シュー

ティ

ングスター

の異名を持つ。

磁力を操る事を得意とし、磁力浮上により高速移動が可能。

名前・会長（本名はまだ不明）

能力・不明

## お嬢様？（前書き）

割り込み投稿したものです。  
あまりにも戦闘シーンばかりでしたので少しあは日常もつて事で書いてみました。

お嬢様？

「ホント熱いわね」

エリート校常盤台中学の制服を身に纏い、赤い髪を靡かせた少女はそう呟く。

町の建物の間から降り注ぐ太陽の光がその暑さの原因だといいのだが

「上坂さんが熱いと言つのは間違つてます」

もう一人の常盤台中学の制服に身を包んだ少女は言つ。

「どうしてよ？」

「それはあなたの機嫌が悪い時は周囲の気温が2度は上昇するからです」

上坂茜は発火能力者の頂点、レベル5の灼熱炎帝。  
バイロキネシス  
コロナリオン

炎を操るスペシャリストな訳だが、感情によつて日常時でも周囲に影響を及ぼしてしまう。

今日の彼女は機嫌が悪い。だから周囲に熱を発しているのだ。つまり上坂茜が感じているのは太陽光の暑さだけに対してもう一人の彼女は上坂茜が放つ熱によつて通常よりも2度ほど高い温度を体感しているのだ。

「……また例の方ですか？」

「まあ、そんなんこine。アイツまた逃げたのよー。こつもこつも最後のいい所であしらわれるのよ。次こそ見てなさいー。」

グッと袖をまくつ上げ力瘤を作る姿はびり見てもお嬢様校の生徒には見えない。

ただその表情はどことなくうれしそうにも見えなくは無かつた。

「なんかその話をしてこる時の上坂さんはもううれしそうですね」

「はあ！？ 私がうれしそう！？ なんで？」

勢いよく振り向いた上坂茜は全力否定していた。

「週に4回はその話をするじゃないですか？」

「や、それはたまたまアイツと会つことが多いからよ、別に好きで会つてるんじゃないんだから」

照れ隠しをしていつも上坂茜の態度にもう一人の彼女はこいやかにほほ笑んで見せる。

「でも内の学校も変わってるわよねえ、夏休みになつてまでびりて週に一度はこいつって学校に行かないといけないのかしら？」

「良いじゃないですか。学校を綺麗にする事はとても良い事ですよ？」

常盤台中学は夏休み中週に一度は学校に出向いて校内掃除を行つのだ。

「そんなこと掃除口ボットにでもやらせとナガニイの」「

素通りで床に落ちているガムを剥がすほど威力を持つたドラム缶口ボ。学園都市の有りと有らゆる場所に配備されている掃除口ボット。

2人の横をその掃除口ボットと警備口ボットが通過して行く。

警備口ボットもドラム缶仕様である。作られた当初は大型ロボットを改良したモノだったそうだが、子供が集まって進路の妨害になると言つ理由から何の変哲もないドラム缶型に変更された。

「学校は自分たちで掃除するモノですよ？ それに自分たちの力で綺麗にすることで普段から綺麗に使おつって気持ちが湧いて出て来るものなんですよ」

「やつ言つものなのかなあ」

頭の後ろに手を回し少し上向き加減でそう呟いた。

「それにしても」

と上坂茜辺りを見回す。辺りには普段では見ない他校の男女の生徒がパンフレットを片手にもの珍しそうに辺りを散策している。

「学舎の園の開放なんて良く考えたわよね」

学舎の園。第7学区にある洋風の小さな街で隣接する5つのお嬢様学校がそれぞれの敷地を共用し合つ形になつてゐる。基本的に女性しかおらず、学生寮や商店街、研究・実験施設などが存在する。普段は他校の生徒及び男子生徒の入園は禁じられており、女子生

徒であつたとしても招待を受けなければ入る事が出来なかつたのだが、今年から学舎の園の開放と言う形で夏休みに限り一般開放しているのだ。その為夏休みにも関わらず学舎の園を一目見よつと園内では他校の生徒で賑わつてゐる。

「他校の生徒からすれば学舎の園は憧れの場所みたいですから、こう言つた機会が設けられる事は良い事だと思いますよ」

もちろん入園の際には警備門でのチェックが必要となる。とは言つモノの実際の所は制服を着ていれば何の問題も無く入る事が出来る。

そんな話をしながらしばらく歩くと、ふと彼女の足が止まる。

「上坂さん、ここ寄つて行かないですか？」

パシティイッチリア・マニカーニ。

厳選された素材をイタリア本国と寸分違わぬレシピで焼き上げたチーズケーキはまさに絶品であり、この学舎の園にしか出店しないと言つ事で、人気の店の一つである。

「ええっと何々、本日のオススメは苺のクロスターとキーロワイヤルか」

「どうですか？」

と質問されるものの、どうしても入りたい、と訴えてくるその日を見せられては断るにも断れない。

ストレス解消には甘いモノが1番? と云つので上坂茜は付き合うことにする。

彼女はキールロワイヤルを注文し上坂茜はチラリータを注文。テーブルに着き、幸せそうにケーキを食べる彼女に上坂茜は笑みをこぼす。

「上坂さん食べないんですか？」

ああ、とケーキと一口運んだ瞬間

「んん！？」

上坂茜は窓の外を指さした。

慌ててケーキを飲み込み言葉を発する。

「居た～！！」

上坂茜の指さす方向には他校の制服を来た男子生徒が2人。1人は黒い短髪の男。そしてもう1人は

「あのシンシンなんでこんな所にいるのよー。」

勢いよく椅子から立ち上がる上坂茜。

「と言つことはあの方が」「

「アイツが神岡史貴よー。」

残りのケーキを一気にのどに流し込む。最早味わうなんて言葉は

上坂茜の頭の中には無かつた。

「「コメン、ちよつと私行つて来るー。」

と上坂茜は急いでドアへと向かひ。

「か、上坂さん！？」

名前を呼ぶがそんなモノは上坂茜には聞こえていなかつた。  
神風の如く勢いよくドアを開け店の外へと飛び出す上坂茜。

そんな上坂茜を見て、もう、とため息混じりに呟く彼女であつた  
がその後発した言葉はだれにも聞こえていなかつたであらう

「あれが神岡……史貴さん」

~~~~~

「いやあ、さすがお嬢様つて感じですね」

パンフレットを片手に興味津津でキヨロキヨロと辺りを見回す。  
周りから見れば不審者に見られてもおかしくないほどの行動であるが、初めてここに来た者は皆そうなりてしまうのかかもしれない。  
まして男子生徒からすればそこは禁断の聖地とも呼べる場所であったのだ。

「こんな所に来たいなんてお前も変わつてゐるよな」

呆れた表情で風祭竜を見る神岡史貴の手にも一応パンフレットと呼ばれる本が握られている。もちろん用意したのは風祭竜である。

「神岡さんには男のロマンと言つモノが分からんですか？？お嬢様だけが入る事の許されるこの学舎の園に自分たち男子が入れるようになつたんですよー。これほど革命的なことはないです。そもそも」

風祭竜の力説が続いているが軽く耳に入れながらも神岡史貴は辺りをぶらりと見回す。

思った以上に男子生徒の数が多くて少々驚いている。まあ風祭竜の様な学生が沢山いる事を証明してしまっているのだが、

『一ロッパを思わせる様なその町通り、店の数々、正直本当にお嬢様しか入れないと言つ事を実感させられつづつあつた

「アンタこんな所で何してんのよー！」

のだが、

振り向いた先に見えるのは、エリート校の常盤台中学の制服を来た本来ならばお嬢様と読べるハズの女の子。

しかしそれをお嬢様と呼んで良いかは神岡史貴には『？』だった。

「竜、お前の言つお嬢様がここにいらっしゃるんだ

ホントですか！？ と風祭竜は振り返るが彼女が目に入った瞬間風祭竜にもそれをお嬢様と呼んでいいのか分からなかつた。

「で、どうしたんだメラメラ中学生」

「メラメラ言つなあ！」

轟！－と彼女の周りを炎が覆う。

「ああ分かつた分かつた！ 悪かつたからこんな所で炎ぶつ放さないでくれ！」

神岡史貴はどいつもか彼女を宥めようと謝る。上坂茜もこじが学舎の園の大通りのど真ん中である事を思い出したりしく、その炎を抑えていった。

「で、アンタはこんな所で何してんのよ」

落ち着きを取り戻した彼女は最初の質問を再度投げかけた。

「ああ、こいつがどうしても学舎の園の見学がしたいって言つから着いて来ただけだ」

と竜を指す。

「お前はどうしてこんな所にいるんだ？」

「わ、私はたまたまケーキ屋でお茶してたらアンタが見えたから、その……ええい勝負しなさい！」

「はあ！？」

「勝負よ勝負！ アンタ前回も逃げたでしょ！？ 今日こそ決着をつけろのよ！」

両手をピュンピュン振りまわす上坂茜。その彼女に道行く人たちが目を向ける。こんな大通りのど真ん中で常盤台中学の制服を纏つていれば嫌でも目立つのは当たり前だ。

「いいのかジャッジメントさん？ こんな所で暴れる宣言してる人がいますけど」

「それはいけませんねえ。管轄外ですけどさすがに目の前で建物燃やされてはどうにも出来ませんからね」

と風祭竜はジャッジメントの腕章を見せる。

「ひ、卑怯よ！ また逃げるつもり！？」

はあ、と神岡史貴はため息交じりに答える。

「こんな道のど真ん中でそれもジャッジメントの目の前でお前は何をするつもりだ？ 徒でさえ常盤台中学の制服で目立つてんだから今日は大人しくしてろ」

まるで小さい子に言い聞かせるようにポンッと神岡史貴は上坂茜の頭上に手を乗せる。

その行動に徐々に顔を赤らめて

「なめてんのかこりあ……」

暴つと炎を発する。

「バカ！ こんな所でそんな炎を出す奴があるか！？」

「神岡さん！」は回避です！」

その言葉と同時に2人は勢いよく走りだす。

「じゃあな上坂！」

「な、何をつてちょっとー！」

名前を呼ばれた事に一瞬動きが止まってしまった上坂茜は走つて行く2人を見つめる事しか出来なかつた。

ただ、その後ようやく気が付いた。周りの視線が自分に向かれている。

あれだけ大声を上げ、拳銃の果てに炎まで出して、常盤台中学の制服。これだけの要素を持つて注目されない訳がない。

かああつと再び顔を赤らめると早足でその場を立ち去つた。

7月の終わり、既に歯車は回り始めていた。

**お嬢様？（後書き）**

あくまでオリジナルですので、色々とあるかもしませんがよろしくお願いします。

## 戦いの幕開け

8月1日

今日の日差しも、まるで人に恨みでもあるかの様に降り注いで来る。

そんな中、アイス屋の椅子に座る2人の学生の姿がある。

「いやー、やっぱり暑い日にはアイスに限りますね～神岡さん」

両手に3段積みのアイスを抱え、天国にいるかのように幸せな顔でアイスを食べる風祭竜。

「よくそんなに食つて腹を壊さないな」

そんな姿を呆れた表情で見つめている神岡史貴。  
なぜ2人がこんな所にいるかと言つと

「それに会長の話しつて何ですかね？」

会長との待ち合わせの為にここにいるのだ。

「それは会長が来れば分かる事だ。それにあの人のことだ、もうすでに近くまで来ているかもしないしな」

「ありますね。急に後ろから現れて、ワッ、なんて脅かして来るかもしませんね。だからその前にこのアイスを食べて

」

風祭竜がアイスを口にしようとした瞬間

瞬！と突然の突風が吹きつける。

そして次の瞬間

ボロボロつとアイスは無残にも切り刻まれて床へと落ちて行った。

「ああああ俺のアイスがああ！！」

そのアイスの哀れな最後を見て、風祭竜は天国から地獄へと落とされたように頭を抱え叫んでいた。

「男がアイス」ときで喚くんじゃない

その声に2人は振り向いた。

そこには2人の女の子の姿があつた。

1人は長髪で腰に扇をぶら提げ、もう1人は短めのポニーテールを揺らしながら飴をペロペロなめている。

2人が着ている制服に眼をやると

「お前ら、霧ヶ丘女学院の生徒だな」

「俺のアイスどづしてくれんだああ」

風祭竜はまだ叫んでいる。

「レベル5が1人、上条学院の原点帰還、神岡史貴だな？」  
アトミックルーツ

「ああ、やうだが

「俺のアイスビーチしてくれんだああ

「わ～い、こんなに早く見つかるなんて今日は運がいいね。それからその隣のやつよ!」

「やうだな、こきなり上条のトップに会えるなんてラッキーだ」

18学区にある霧ヶ丘女学院からわざわざわざこの学区に来ると言つ事はそれなりの目的があるはずだが。

「何か用でもあるのか?」

神岡史貴は訊ねてみる。

返つて来そつた答えはある程度は予想出来ていたが、確認する必要がある。

「学園戦争は知つているだらう?」

予想は的中した。

学園戦争。自分が最強である事を証明するために学園都市全部を巻き込んで戦争を引き起しあうとしている能力者がいる。とこり噂であった。

「霧ヶ丘女学院にその主犯がいるといつ」とか

「いや、私たちは便乗したに過ぎん。あのお方も我々霧ヶ丘女学院の力を証明したいそつなのでな」

「学園戦争？？ そんな情報ジャッジメントには何も回つて」

風祭竜の携帯機器の着信が鳴り響く。

第18学区ジャッジメント、負傷者不明、全支部壊滅

「へ、今いの回つて来やがつた……」

「なうんだ、あんたもジャッジメントだつたんだね」

「ジャッジメントはもっと大能力者を集めた方がいい。異能力者や低能力者ばかりでは話にならないぞ」

風祭竜は歯を食いしばる。

ジャッジメントには超能力者はいないものの大能力者は数名いる。ただほとんどがレベル3以下の学生である。能力者の学生たちによる学園都市の治安維持機関と言う事もありジャッジメントになるためには能力のレベルは問われず「9枚の契約書にサイン」「13種類の適正試験」「4か月に及ぶ研修」これらをクリアすれば誰でもジャッジメントになることができる。

確かにジャッジメントが強いとは限らないがそれまでの皆の努力をバ力にされた様で風祭竜は拳を握りしめる。

彼女は扇を取り出す。

「既に後の2人が霧ヶ丘女学院の強さを証明するためにこの第7学区にある学校をいくつか落としているだろう。だが、レベル5の7人の内4人がこの第7学区にいる。レベル5がいる限りその学校を

落とす事は難しい

その扇を開き一振りするといいくつもの風の刃が走り、さつきまで座っていた椅子を粉々にしてしまった。

「だからまずは貴様からだ！原点帰還！」  
アトミックルーツ

もう一振り扇を振るう。

今度の風の刃は脅しやそう言つたモノではなく、確実に神岡史貴を狙つて放たれたモノであった。

が、次の瞬間、神岡史貴の周りに大量の砂塵が舞い、その砂塵に阻まれて彼女の放つた刃が届く事はなかつた。

「簡単に神岡さんの相手が出来ると思つなよ」

風祭竜は高速で移動することによって辺り一面の砂を上空へと舞いあがらせて壁を作つたのだ。

「ほう、貴様があの疾風迅雷か」  
ショーティングスター

「神岡さんとやるのは俺に勝つてからにしな、お前にはアイスの恨みもある」

彼女はニヤッと笑うと

「いいだろう、貴様の相手は私がしてやる。樹里、原点帰還はお前がやれ」  
アトミックルーツ

「分かつたよ～ 真琴」

そして互いに2人は向き合い間合いと取っている。

「へえ、お前らそんな名前だつたんだな」

「そう言えばまだ名乗つていなかつたな。せつかくだから教えてやろう。私は霧ヶ丘女学院の四天柱<sup>ニコース</sup>が1人、桐裂真琴<sup>きりさきまこと</sup>。能力名は北風<sup>ソーライ</sup>抜刀<sup>クノーム</sup>だ！」

大きなつむじ風と同時に複数の風の刃が風祭竜に襲い掛かる。

風祭竜は得意の磁力浮上を使い高速移動で刃をよけながら、神岡史貴から離れるために逆方向に移動していく。

「どうした！？逃げてばかりでは話にならんぞ！」

絶え間なく続く刃の嵐を交わしながら風祭竜はある程度距離を取つた事を確認すると一旦停止する。

「ここからが本番だ！」

一方、神岡史貴側では。

「じゃあ私も自己紹介しこうかな？私はね、霧ヶ丘女学院の四天柱<sup>ニコース</sup>の1人、安藤樹里<sup>あんどうじゅり</sup>。能力名は東風掌握<sup>ソーライエクスパンド</sup>！」

## 戦いの幕開け（後書き）

### 新しい登場人物紹介

名前・桐裂真琴  
きりさきまこと

能力・風力使い（エアロマスター）レベル4。能力名は北風抜刀  
ニユース

霧ヶ丘女学院の四天柱の1人

名前・安藤樹里  
あんどうじゅり

能力・風力使い（エアロマスター）レベル4。能力名は東風掌握  
ソーラクエクスパンド

霧ヶ丘女学院の四天柱の1人

▼ s 四天柱（ニュース） ?（前書き）

文章表現が下手です。特にバトルシーンはうまく書けません。読んで頂いている皆さんには本当に申し訳ないです。  
うまく書けるように頑張りたいと思います。  
アドバイスなんか頂けるとありがたいです。

## ▼ s 四天柱（ノーラス） ?

田に見えない何か。

その大きな何かを神岡史貴は手で受け止め、それをかき消す。

「さあがレベル5<sup>アーダックルース</sup>原点帰還だね」

安藤樹里は上から見下ろしながら関心していよいよいつだつた。

「褒めてくれてありがとうございます」

神岡史貴は上を見上げながらそつと答える。

やつ、上を見ながら答えたのだ。

「じゃあもう一回行くよ~」

エアーダックリン  
空気圧迫ーー！

安藤樹里は両手を上に翳し何かを掘むと、それを下田掛けて投げつけて始めた。

神岡史貴は再び両手を挙げてそれを防御する。

激しい音と共に神岡史貴の周りの地面は凹み、大きな砂埃をあげた。

「やつぱり駄目か~」

安藤樹里はポーテールを揺らし、頭の後ろに手を組み残念そうにしてくる。

「 空氣か

舞いあがる埃を掃いながら神岡史貴は上を見上げた。

「 そうだよ。私はね、空氣に触る事ができるの。だからいつもって空中歩行なんて事も出来ちゃうの」

先ほど神岡史貴が防いだのは空氣の塊。

安藤樹里は自分の頭上にある空氣を掴んで投げつけてきたのだ。

「じゃあ次はもっと凄いの見せてあげる」

安藤樹里は両手を胸の前に持つて来ると手の平を合わせて集中し始める。

すると次第に両手は何かに押されるようにゆっくりと開いて行く。

やがて、その手の中には肉眼でもハッキリと見えるほどの圧縮された空気が見えてきた。

「これ結構時間が掛かっちゃうの。だからあまり使わないんだけど、ほら君向も出来ないでしょ？」

そう言つと彼女はその圧縮された空氣を頭上に掲げよつと多くの空気を圧縮し始める。

神岡史貴は空中に浮かぶ彼女に近づく事が出来ず、その完成を待つているしかなかった。

「で～きた」

彼女の頭上には2メートルはあるであらう圧縮された空気の塊が完成していた。

神岡史貴は両手を前に出し、それに備える。

「いっけえええ！」

ソニックバンド  
濃縮砲弾！！

神岡史貴までの空気を全て飲み込むよりそれは向かって来る。

「ハア！」

それを両手で受け止めるものの圧縮された空気は予想以上に重く、その勢いに後ろへと押されていぐ。

20メートルほど押された所でようやく勢いは無くなり、それと同時に圧縮された空気をかき消した。

「あ～あ、なんかいけると思つたんだけどな～」

安藤樹里は神岡史貴を見降ろしながらそつ笑く。

実際に濃縮砲弾ソニックバンドと呼ばれる技をレベル4の能力者に放つたとすれ

ば、相手の能力次第では一撃で終わってしまうほどの威力を持つている。

そんな技を傷一つ付けずに防いでしまうのは神岡史貴がレベル5であり、原点帰還の能力を持っているからだ。

「仕様がないな」

彼女は何かを悟ったようにゆっくりと地上に降りて来た。

「君にこれ以上能力を使っても意味無いみたいだしね」

彼女は指をポキポキと鳴らし

「肉弾戦あるのみだね」

勢いよく神岡史樹へ向かって走り出した。

そして振り上げた拳を神岡史樹へと振り下ろす。

( かわせる )

そう思った矢先、その拳は急に加速し神岡史樹の頬に突き刺りそのまま後ろに数メートル飛ばされてしまった。

「わ~い、引っかかった~」

神岡史樹は口々口々と立ち上がり血の混じった唾を吐く。

「圧縮した空気を肘に仕掛けて解放したんだよ~」

「そんなこべらべら喋つて後悔するや」

神岡史貴は足元がふりつきながらも構えを取る。

「さつきは腕だけだつたけど

「

彼女は再び拳を振り上げ

「今度は全身に仕掛けるよ~」

そして勢いよく神岡史樹へと加速して行つた。

しかし神岡史樹はふりつきながらも落ち着いていた。

確かに彼女は速い。

でも見えない訳ではない。

「これで終わりだよ~!」

彼女はそのまま拳を振り下ろした。

ベキベキっと音が聞こえた。

拳は深々と突き刺さつていた。

しかしそれは神岡史樹にではなく

「そんな……どうしてなの……」

荒井樹里はその場に崩れ落ちた。

突き刺さっていたのは荒井樹里の腹部にだつた。

「ただ単にお前の拳に合わせてカウンターを入れただけだよ、まあ一か八かだつたけどな」

神岡史貴は服をパンパンと掃うと周りを見渡す。

辺りは安藤樹里が放つた空気圧迫<sup>エアーダブリン</sup>や濃縮砲弾<sup>ソニックバンド</sup>によって木は倒れ、道路は凹み、この一角だけ異様な光景になつてしまつていた。

「また、派手にやつちまつたな。まあアイツの時よりは増しだがもちろんアイツとは公園一つを丸焼きにしてしまつたアイツである。

「とりあえず、竜の様子を見に行かないと」

女の子を一人こんな所に置いて行くのも気が引けたが、それよりも風祭竜が心配であつたためにやむを得ずそのままにしておく事にする。

そして神岡史貴は風祭竜が走つていった方向を確認すると、そつちの方角へと走つて行つた。

✓ s 四天柱（ニュース） ?（後書き）

技に名前をつける予定はなかったのですが、つけてみました。

▼ s 四天柱（一コース） ?

「 ハアハア 」

白櫻のヘアースタイルはボロボロに崩れ、所々切り裂かれた制服は最早新学期には使い物にならないであろう。

「 ……ツ！」

飛び交う無数の刃の1つが風祭竜の頬を掠める。そして切れた頬からは僅かに赤い血が流れ、それを裾で拭う。

「 さっきまでの威勢はどうした？」

風祭竜の見つめる先には、長い髪を揺らし涼しそうな顔でゆっくりと近づいて来る桐裂真琴の姿が見えた。

「逃げてばかりでは話にならんぞ」

さつきも聞いた言葉だ。

風祭竜は苦戦していた。

周りの木と言つ木は無残にも切り刻まれ、建物のコンクリートの壁をも切り裂く刃。それと同時に襲い掛かる衝撃波とも言える突風。

（近づけねえ）

彼女から吹きつける風に近づく事さえ出来ない状態だった。

「そんなんだからいつまで経ってもレベル5になれるのだ」

「お前もレベル4だらうが！」

フフ

彼女は静かに笑つて見せる。

「確かにお前も私もレベル4だ。しかし、同じレベル4でも私とお前では大きな違いがある。分かるか？」

「何だよ違ひって」

「私たち風力使い（エアロマスター）には既に頂点と言われる方がいる。つまりその方を超えない限り私たち風力使い（エアロマスター）はレベル5にはなれん。それに比べ、お前たち発電能力者にはレベル5がいない」

そこまで聞いた時点で風祭竜は漸く理解し始めた。

「じゃあ何だ？お前は上にレベル5がいるから仕方が無くレベル4で、俺は上がいないのにレベル4。そういうたいんだな？」

「その通りだ」

要するに、同じレベル4でもお前の方が弱い。

その事を遠回しに言われたようで風祭竜は頭に来ていた。

「じゃあ、お前はなんでそのレベル5を超えるつと思わねえんだ！？それこそ腑抜けじゃねえか！」

フフ

彼女はまた静かに笑う。

「私はあの方を超えようとは思っていない。なぜなら」

瞬！と彼女は扇を再び広げる。

「私はあの方に仕える4つの風、四天柱ニヨウスが1人、北風抜刀桐裂真琴ソーッククブーム

だからだ！」

拔刀風！  
カマイタチ

轟！と音と共に無数の刃が風祭竜を目掛けて襲い掛かって来る。

「ちっ、くそ」

磁気浮上を使いそれをかわし相手に詰めかけようとするが、後から来る突風がそれを許さない。

相手からの距離を一定に保ちながら風祭竜は移動を続けることができなかつた。

「逃げる事しか出来ないみたいだな」

「なら、これでどうだ！」

風祭竜は立ち止ると磁力の力を使い、落ちているコンクリートの塊を持ちあげるとそれを桐裂真琴に向けて投げつける。

「そんなもの」

彼女が扇を一振りするとコンクリートの塊はサイコロステーキのように切り刻まれた。

「私の抜刀風<sup>カマイタチ</sup>の前では何の役にもた立たん」

彼女は息一つ乱すことなく立ちふさがる。

対する風祭竜は能力のほとんどを彼女の攻撃を避ける事だけに使っている。

へへ

と、風祭竜は笑って見せる。

ただその笑いは余裕だとかそういう笑いではなく、何かを決めた、そんな笑いであった。

「確かに俺とお前じゃ同じレベル4でもそれなりの差があるにみたいだな。でも……このままじゃ終われないよな」

と、風祭竜は下に落ちてある小石を拾い、そしてそれを手の平に浮かせる。

「俺の能力つてのはこうやって磁力浮上の力で物を浮かせる事が主

なんだ。持ちあげる上限は、まあ500?つて感じだろ?。それに自分を浮かせて移動速度を上げる事ができる。でもな

磁力の力で辺りにある小石や小さなコンクリートなどが風祭竜の周りに集まつて来る。

「俺が疾風迅雷シュー・ティンクスターと呼ばれてるのはただ単に速いってだけじゃない」

それは見る見るうちにサッカーのボールを想わせるように形作られていく。それは綺麗な円ではなく、一つ一つの形を失うことなく集まっている。

「ここの技は俺にとって力が大きすぎて一口に一発が限界でな、これでダメならお前の勝ちだ」

「ならば見せてみろ、お前の全力を」

何かを感じ取つたように桐裂真琴は扇を開き構えを取つた。

「いくぜー!これが俺の最大の技だ!」

集められたサッカーボールほどの塊を空高く投げると、自分もそれの後を追つように磁力を使って舞いあがる。

体を反転させ、その塊田掛けて跳りだす姿はサッカーのオーバーヘッジのようだ。

流星群ロードストライプ!!

放たれた瞬間その塊はオレンジ色に輝き無数の流星のように細か

く分かれ、桐裂真琴目掛けて突き走る。

まさにショーティングスターの名にふさわしい技である。

それが地面へと激突し、大きな砂塵を巻き起こす。

直撃。

そう言つても過言ではないほど風祭竜が放つた流星群は桐裂真琴コータクライと捉えたかに見えた。

が、

「なかなかだつたな

一瞬にして巻き上がる砂塵を吹き飛ばすと、まったくの無傷と言つていいほど彼女は静かに立っていた。

(や、そんな……)

風祭竜は力尽きたようにその場に座り込んだ。

「あれの直撃をくらって無傷だなんて……」

「確かに直撃なら危なかつたかもしれないな、あの技にはそれほど威力があつた。だが、直撃ではなかつたとしたら?」

風祭竜はハツとした。

彼女の能力、それは風を操ること。風を起こす事など容易いもの

だ。

「 空気摩擦か……」

桐裂真琴は風祭竜が技を放った瞬間、衝撃波とも呼べる突風を起こし空気抵抗を増やして自分に届く前に消滅させてしまったのだ。

彼女の周りは特に凹んだ様子もなく、残った威力だけが地面へと当たり砂塵を巻き起こしたのだ。

「相性が悪かつたみたいだな。さあ、終わりだ

のだが……

「な、何！？」

桐裂真琴は扇を頭上に翳し、振り下ろそうとしている。

風祭竜は自分の負けを察してその場から動こうとしたしなかった。

彼女は扇を振り下ろさずに止まってしまった。

彼女が見つめる先には

風祭竜の姿が無かつた。

「ばかな！ 一体どこへ行つた！？」

辺りを見回すがそれらしい姿は見えない。それは高速で動くと言つたレベルではなく明らかに”消える”と言つたレベルであった。

(まさか、まだそんな能力を隠していたのか？いや、ヤツは発電能  
「スター」力者だ、そんな能力あるはずがない。じゃあどうやって（）

「いやあ、後輩がお世話になつたみたいだね」

!!

その声はどこからともなく聞こえて来た。

「誰だ！？ビームにいる！？」

ハッと桐裂真琴は後ろを振り返る。

視界のある一点が歪みそれは姿を現す。そしてその隣には風祭竜の姿も見えた。

「会長……遅いですよお」

力の無い声で風祭竜は言ひ。

「すまないね。待ち合わせ場所に誰もいなかつたものだから、戦城

せんじょうう

君に君たちの居場所を探してもらつていたんだ」

会長

その言葉に桐裂真琴は何かを思い出したようだつた。

「そうか。お前が上条学院もう一人のレベル5、万有地変の林光一トランスペリオートはやし じゅう

朗か

## ✓ s 四天柱（ニュース） ?（後書き）

### 簡単登場人物紹介

名前・戦城  
せんじょう

能力・不明。

後ほど登場します。

名前・林光一郎  
はやし こういちろう

能力・レベル5第7位、万有地変  
トランスペリエート

上条学院の生徒からは会長と呼ばれている。

## 白銀の悪（前書き）

1話1話が短いんですが、『ア承ぐださー』。

後書きに簡単な登場人物紹介します。

## 白銀の悪

「会長」

「やあ、神岡君。無事だったようだね」「

戦いを終えた神岡史貴はようやく林光一朗と合流する。

「樹里ではダメだったようだな」

神岡史貴の姿を見て桐裂真琴はそう呟く。

寧ろレベル5に対してもレベル4を1人と言つのが無謀であると言えるかもしれない。ただ自分たちの力を証明したいと思つていろいろだ、それなりの自信があつたのかもしれないが。

そして彼女は扇を閉じた。

「ああ、お前の相方なら向こうで伸びてるぞ」

神岡史貴は自分が走つて来た道を指さす。

「そりか」「

桐裂真琴は3人を一通り見る。

レベル5が2人にレベル4が1人。この状況は小学生が見たとしても桐裂真琴が不利であるのは一目了然である。

「さすがに3人相手は無理だな……今回は引かせてもらう。だが次はあの方もやって来るだろう、その時が上条学院の最後だ」

そう言つと桐裂真琴は先ほど神岡史貴が来た道を走つて行つた。

「ハアアア」

風祭竜は力尽きたようになり座り込んだ。

「随分派手にやられたみたいだな、竜」

「いやあ、ほんと危なかつたですよ。あの時会長が来てくれなかつたらどうなつていた事か……」

あの時会長が来ていなければ間違いなく桐裂真琴の刃が容赦なく襲いかかっていたであろう。

「やう言えば会長はどうやってこいが？」

と、神岡史貴は素朴な疑問を聞いてみる。

実際の所、神岡史貴はこの場所に来るためにはくつか遠回りをしてしまつていた。

つまり本来ならば会長よりも先についているはずだったのだ。

「簡単な事だよ。戦城君にお願いしてね」

ああ、と神岡史貴は手を叩く。

「千淨天眼ですね。確かに戦城明なら自分たちの位置を知る事は容易いことです」

「イーグルアイ

千淨天眼ですね。確かに戦城明なら自分たちの位置を知る事は容易いことです

神岡史貴は納得する。彼の能力ならすぐに自分たちを見つけることが出来るからだ。

「それから話して言つのはね、この学園戦争の主犯校が分かつた。」

神岡史貴と風祭竜は会長の言葉に耳を傾ける。

「どうやら、長点上機学園がこの学園戦争の原因みたいだね」

長点上機学園。

第1-8学区にある学園都市の5つの指に入る超エリート校である。

「今から上條学園に向かうよ」

突如の林光一朗の発言に戸惑つ2人。

「今からですか？ 一体まだどうして？」

それはだね、と会長はお決まりのポースを取りながら答えた。

「客人をお持て成しする為だよ」

~~~~~

常盤台中学前

「よお、おめえら。今日ここに上坂茜がいるだろ」

白銀の短髪。

白い肌。

そして全てを凍りつかせるような眼。

彼は上坂茜を探していた。

普段なら学舎の園に男子は入る事が出来ない。ただ今は夏休み一般開放中であるため男子生徒がいても何の不思議も無い。寧ろそれを利用して現れたようであった。

「し、知らないです、きょ、今日はまだ、一度もお会いしていらないんで」

1年と思われる少女はビクビクしながらそつ答えた。

その眼を見てしまったらほとんども学生がそうなってしまっただろう。

冷たく、深く、そして恐ろしそうな眼を。

「何やつてるんですか！？あなた！」

常盤台中学の上級生であるつ少女は勇敢にも彼に向かつて言葉をぶつけた。

「何だテメH？？」

彼はその鋭く、冷たい眼を彼女に向かって

「ツー

彼女は少し後退りしたが

「その子から離れなさい！」

再び彼に言葉をぶつけた。

「俺はただ、人尋ねをしてただけだぜえ？それのどこがいけねえってんだ？」

「その子が恐がっています！」

彼女は構える。

「人を見かけで判断しちゃいけないなあ」

彼は再びその眼で睨みつける。

「その眼が恐いって言つてるんです！それ以上その子に近づくんなら

彼女の手には既に炎がため込まれていた。

「打つてみろよ」

彼女は手に精一杯の力を込めて叫んだ。

「打ちますーー！」

轟！と炎は勢いよく彼に向かつて行く。

炎の大きさからして彼女は発火能力者レベル4<sup>バイロキネシス</sup>。

並みの能力者ならその炎をくらつては徒では済まないだろう。

しかし、

彼はその炎を片手でいとも簡単に消してしまった。

「なんだこの弱つちい炎は？？　蠅燭にでも火点けんのか？？」

彼女は畠然としている。

名門常盤台中学にも50人しかいないレベル4の能力を片手で防いでしまったのだ。

「やだねえ、そうやつてすぐ人に悪い奴つて決めつけて来るのつて。まあ間違つちゃいねえんだけどな。ハハッ！」

彼は高らかに笑つて見せる。

先ほどの女子生徒は足がすくんで動けずにその場に座り込んでしまっている。

「おやおや、さつきまでの威勢はどうしたのかな？？　ハハッ！」

彼は高らかに笑つて見せる。

「よう小娘、もう一回打つてみろよ？？　さつきみたいにさ、正義

「あ……あ……」「あ……あ……」  
「あ……あ……」

彼女は彼のその邪悪に満ち溢れた全てに恐れ、声を出す事も出来ない。

「俺は別に何もする気なかったのによお、攻撃しちゃって。これって正当防衛になるから向こうされても文句言へねえよな？？」

彼はゆっくりと彼女に近づいて行く。

「い、こ……こやああ

彼女は必死に逃げようとするが足が思うように動かずこの場に動けない今までいた。

その間にも一歩また一歩と彼は彼女にゆっくりと近づいて行く。

「悪い子にはお仕置きしないことねえ

彼は彼女に向け手を伸ばした。

「ちよっと、何やつてんのよあんた……」

その声は彼の後ろから聞こえて来た。

「か、上坂さん……」

彼女はやつ叫んだ。

「おやおや、正義のヒーロー参上つて感じだなあ」

彼はやつ言いながら振り向いた。

「私の可愛い後輩に何やつてんのよー。」

彼女の髪は怒りを現すかのように赤く染まっていた。

「おいおい、俺は何もしてねえぜ？？？」いつが先にやつて来たんじ  
やねえか

なあ？？ と彼女に振りかえる。

彼女は脅えたように田に涙を溜めていた。

「だから、アンタのやつ言う人を見下したような眼が嫌いなの！」

「お前まで人を見た目で判断するのかあ？？まあ間違つちやいねえ  
がなあ。ハハツ！」

彼は高らかに笑う。

「そう言つ笑い方もムカつくつてのーー。」

轟！ と大きな火球が彼目掛けて飛んで行く。

が、

「結構なさいさつだなあ」

彼は再びその炎を片手で防いでみせる。

「アンタにだけは絶対に負けられないの！」

「奇遇だなあ？？俺もさあ！」

2人は睨みあうように向かい合つ。

「今日こそ決着を付けようぜえ、灼熱炎帝！」コロナリオゾン

「臨む所よ、アブソリュートゼロ絶対零度！」

## 白銀の悪（後書き）

簡単登場人物紹介

せんじょう あきら

名前・戦城明  
イーグルアイ

能力・千淨天眼

詳細は不明

## 氷結能力者（ジエロキネシス） vs 発火能力者（パイロキネシス）（前書き）

4人目のレベル5登場です。

この後も続々とオリジナルの能力者は用意してありますので楽しみにしてください。

感想やアドバイスなんか頂けるとありがたいです。

## 氷結能力者（ジエロキネシス） vs 発火能力者（バイロキネシス）

手に作られる全てを貫くような凍て付く槍。

その槍を彼は上坂茜に投げつける。

対する上坂茜は手の平に火球を作り、その槍に向けてそれを放つ。

2つの能力は互いの丁度真ん中で相殺するように消滅した。

「アンタ、いつまで手を抜いてるつもりなのよー。」

上坂茜は自分の中にある闘争心などが全て表に出ているかのように燃えている。

赤い髪、そして体中からほじほじする灼熱の炎。

その姿はまさに灼熱炎帝<sup>ヒートオーラ</sup>に相応しいだろ？。

「ああん？？　何言つてんだあ？？　お前の目は節穴かあ？？」

それとは対照的に彼は白銀の髪、白い肌、そして何よりもその全てを凍らせてしまつかのような冷酷な瞳。

アフソリコートゼロ  
絶対零度

全て凍りつかせる氷結能力者の頂点に君臨する男。  
ジエロキネシス

その名は能力だけでなく彼自身の全てからその名がついたようだ

あつた。

「ただ突っ込んで来るお前とは違えんだよ、その耳搔つ穿つてよく聞いてみなあ？？ ありやいつたい何の音だあ？？」

上坂茜はスッと耳を澄ませてみる。すると確かに何か聞こえて来るのが分かる。

そう、それはまるで何かが勢いよく落ちて来るよ'づな……

「まさか……上！！」

彼女が見上げた先には、今までに自分に向けて巨大な氷河と言つてもよいくらいの氷柱が落ちて来ている所だった。

「……くつー」

上坂茜は両手を頭上に掲げるとその巨大な氷柱に向けて有りつ丈の炎をぶつけた。

「ほお、さすがは灼熱炎帝ローナリオンだあ。瞬時にあれだけの炎を作り出したあ、やつぱいじりじゃなくちゃなあ！」

彼はその冷たくて鋭い眼を彼女に向ける。

しかし彼女はそれに動じることはない。

上坂茜の眼はそれと同じくらい赤く、高く、そして熱く燃えている。

「アンタはいつも卑怯なのよー。男なら正面からぶつかって来なさい！」

ハハツ！

と、彼は高らかに笑う。

「卑怯？？ 戰術的って言つてもうこてえなあ。だが、正面から来てほしこいつでんならお望み通り正面から叩き潰してやるぜえ！！」

彼は言葉と同時に頭上に大量の氷柱を作りだし、それを上坂茜に向けて飛ばす。

上坂茜はそれを炎で防ぎながら彼との距離を詰めて行く。

「これでどうよー。」

彼との距離を縮めると上坂茜は大量の炎を彼曰掛けてぶつける。

「グアアアアアアー！」

彼はその炎の直撃に合ひ炎の中に閉じ込められ、き苦しんでいる。

「なあんてな」

！！

しかし、その炎の中に彼の姿は無く、あるのは人の形をした氷の塊であった。

「バカかあ？？ そんな炎で俺がやられると思つたのかあ？？」

彼は水蒸氣の力を利用し空高く舞い上がつていた。

「今度はお前がくらいいなあーーー。」

彼は背中を反るように両手を頭上に掲げるとそこには数えきれないほどの氷柱の姿があつた。

そして、それらは太陽の光に照らされ虹色に輝く。それはまるでダイヤモンドのように。

彼はその手を勢いよく振り下ろした。

電<sup>ダイヤモンドダスト</sup>燕<sup>イニシ</sup>氣<sup>エア</sup>彈<sup>ダスター</sup>！！

無数の氷柱が電の如く降り注ぐ。

しかしそれは上坂茜に近づくにつれて異様な動きを見せる。

「俺の電<sup>ダイヤモンドダスト</sup>燕<sup>イニシ</sup>氣<sup>エア</sup>彈<sup>ダスター</sup>は降下するにつれて燕の如く動き周り相手を四方八方から襲うぜえ？？ 果たして避けれるかなあ？？」

ほぼ360度から襲いかかつて来る氷柱を避けることは至難の業である。

しかし、そんな状態であつても上坂茜は笑っている。

そう、笑つている。

「避けられないんだつたら燃やしちゃえぱいだけの話しどしょー！」

腕を胸の前でクロスさせ体を縮こめると彼女の体はオレンジ色に輝きだし、そして全てを放出すように両手を横に開いた。

ブロミネスヒミツト  
紅炎放射！！

轟！－！と言ひ音と共に彼女は体から熱炎を発し、その炎は大きな円を描き、全ての氷柱を飲みこんで行く。

発せられた氷柱はあるで小さな雪のよつて蒸発してしまつた。

「ハハッ！ やっぱりいつでなくひやつまんねえよなあ！」

彼は笑つてゐる。

怖い、恐ろしい。そんな言葉は彼の中に存在しない。

彼にとつて戦いとは自分自身を楽しませる、喜ばせる、やつぱつたモノでしかないのだ。

「さあ、もつと楽しもつぜえ。灼熱炎帝！」  
ローナリオン

お互に睨みあい、少しづつ間を詰め、そして互いの距離が一定の距離を超えた瞬間、2人は弾けたように走り出す。

パンパン

「そこまでです」

不意に2人の間を割るように手を叩く音と声が聞こえる。

2人はそれに気が付きお互いに足を止めた。

「は、春名さん！？」

春名はるなと呼ばれる常盤台の制服を着た生徒は、肩まである少し青味掛かった髪を靡かせ物柔らかな雰囲気を出しつつ、2人をその包み込むような瞳で見つめていた。

「ほお、こいつあまた偉いヤツが現れたもんだなあ？？」

彼は鋭い眼で彼女を睨みつけるが、彼女はさらりとそれをかわすように二口りと微笑む。

「天雲児翔てんうんじ しょうさん。どうか今日の所は引いて頂けませんか？上坂さんもいいですね？」

猶も彼女は笑顔を崩すことなく2人に問いかける。

「何言つてやがんだあ？？今からがいいとこじやねえかあ

「春名さん、こいつは後輩に手を出さうとしたのよ？？それを許せつて言つの！？」

2人に引く氣はなかつた。

それぞれの理由はあるが何と言つても一番の理由は

2人は火と氷。

対照する2つの能力だから」を負ける事が出来ない。その気持ち  
が一番強いようだ。

「邪魔すんじゃねえよ

春名と呼ばれる生徒は小さくため息をつき、そして天雲児翔を見つめると、静かに、そして深く言葉を発した。

”平伏しなさい”

「グハツ！」

その言葉と同時に天雲児翔は地面へと叩きつけられた。

地面にめり込むよう、そして、自分の意思ではなくそれは強制に近いものであった。

「チッ……相変わらず……ややこしい……能力だなあ」

天雲児翔は地面を這いつのように立ち上がりながら呟いた。

「今日はもう引いて頂けますね？」

彼女は笑顔のまま訊ねる。しかし、その奥には何かとてつもなく恐ろしいものを感じてしまう、そんな笑顔であった。

「分かったよ、引けばいいんだろお？？ 引けば」

そう言つと、天雲児翔は逆の方角へと歩いて行く。

「ちよつとまだ」

「上坂さん、あなたもいいかげんにしないと」

彼女が見つめると上坂茜は大人しく黙り込んだ。

「上坂さん、あなたが彼を敵対意識しているのは分かりますが、今はそんな事を言つて居る余裕はありません」

そして彼女はゆっくつと歩き出す。

「これから上条学院に向かいます」

「な、何で上条学院なんかに行かなくちゃいけないの？？」

上坂茜は納得のいかない表情である。それもそのはず、上条学院には原点帰還がいるからだ。

何かしら彼にちよつかいを出して来ただけにあつて少し物恥かしいようだ。

「林光一朗さんからのお願いなんです。大切なお話があると」

## 氷結能力者（ジエロキネシス） vs 発火能力者（パイロキネシス）（後書き）

### 簡単登場人物紹介

名前・天雲児翔  
てんうんじ しょう

能力・レベル5第4位、  
アブソリュートゼロ  
絶対零度。

氷結能力者  
ジエロキネシス  
の頂点。

## 会議室にて（前書き）

文章つていうのは難しいですね。何かありましたら感想お願いします。

相変わらず一話が短いです。

## 会議室にて

「一応自己紹介からしておこうかな？僕が林光一朗だ」

上条学院に一角にある会議室に林光一朗と神岡史貴達は集まつていた。

そして林光一朗が見る先には常盤台中学の制服を来た生徒の姿が見える。

つい数時間前に林光一朗の連絡を受け2人は上条学院へと訪れていた。

「お会いできて光榮です。林光一朗さん。私は春名星花はるな せいかと申します」

「アンタが上条学院の万有地トランスペリエート変ね。私は上坂茜はるな せいかよ」

見た目もそうだが、この挨拶一つでこの2人の人柄の違いが分かるであろう。

「戦城君を通してそちらの常盤台所属のジャッジメントにも連絡が行つたと思うんだけど、その子達はまだみたいだね。じゃあ、神岡君。君たちも自己紹介しておこうか」

時間があるから仕方が無く、と言つた感じに聞こえなくもなかつたが、初対面（上坂茜は顔見知り）と言つ事で自己紹介をする。

「そうですね。ええっと俺の名前は

「

「神岡史貴さん……ですよね？」

初対面だと思っていた相手に自分の名前を言われてしまったので驚き、言葉に詰まってしまった。

「あ、ああそうだけど。どうして俺の名前を？」

不思議に思い彼女に訊ねてみる。

「何度かお会いした事ありますし、それに……その……」

彼女は微妙に体を揺らし手を前でモジモジさせながら答える。その不自然な間、そして顔を赤らめるその表情の変化を彼女は見逃さなかつた。

「春名さん？あなたまさか、か」「

”お黙りなさい”

「んん～んなんん～ん」「

確信を突こうと発した言葉を全て言いつことなく上坂茜は口を封じられたしまつた。

それでも彼女は何か言葉を発しているようだが、何を言っているのか全く理解できなかつた。

「『じめん、初対面だと思ってたんだけど会つた事あつたんだね』

「いえ、私が一方的に見たことがあつただけでその……」

彼女は下を向き赤らめた頬がぱれないようにしているのだが、それが逆に沈黙を生んでしまい何とも言えない空気が流れた。

そしてその少し気まずい空気を察してか風祭竜は自己紹介を始めた。

「あ、俺は風祭竜つていいます。第177支部所属のジャッジメントで一応神岡さんの舎弟つてことになります」

「そ、そうだつたんですか！？」

「ただの先輩と後輩だ」

「そんなへ、酷いですよ～神岡さん」

神岡史貴はせりつと言つてのけたが、風祭竜の発言によつてせりつか気まずい空気を脱出出来たことに感謝していた。

「……まあ、盛り上がつてゐる所で何なんだけど」

林光一朗はせつと指をさして言つた。

「その手づつにかしてあげた方がいいんじゃないかな？」

その指の先を見てみると、未だに言葉を発することができずにもがいている上坂茜の姿があつた。

~~~~~

それからしばらくして廊下を勢いよく走つて来る音が聞こえて来た。

「すみません！遅くなりました～」

勢いよくドアを開け入つて来た少女は両手を膝につき、袖で汗を拭う。

私のチャームポイントはこの大きなリボンです！と言わんばかりのその小さな体には合わぬ大きさリボンが上下している。

「遅いわよ<sup>あまね</sup>雨音<sup>ゆい</sup>唯一<sup>ゆい</sup>！どれだけ待たせるの！？」

「すみませ～ん、上坂さ～ん」

今にも泣き出しそうなか弱い声で彼女は謝っている。

「九条静香<sup>くじょう しづか</sup>は一緒じゃなかつたの？」

「九条さんなら後ろにひって……あれ？？」

後ろを振り向いたその先には誰の姿も無く、彼女はあたふたしている。

すると、

「きやつ」

不意にドアの近くに飾つてあつた何かしらの写真立てが上から落ちてきた。

そしてその写真立てが落ちて来た事を確認するかのように彼女はゆっくりと部屋へと入つて來た。

「九条さん何してたんですか？急にいなくなつてしまつてびっくりしましたよ～」

「……………危ないから」

と、彼女は先ほど落<sup>ハシメテ</sup>下してきた写真立てを指さす。

「未来予知能力？」

神岡史貴は彼女の方を向き質問するが

「……………」

質問の答えが返つて来ることもなくただ見つめて来るだけの彼女に神岡史貴はどうして良いか分からぬ状態であった。

「先行感覚<sup>ブリマムニーク</sup>と言つ能力です。未来予知ではなく、数秒先を感じ取る力のようです。心配しないで下さい、彼女は極端に無口なだけですから」

彼女の代わりに春名星花が説明をする。

「静ちゃんどうして私には教えてくれなかつたんですか～もうひょつとで直撃でしたよ～」

「…………… 言つた」

「聞こえなかつたですよ～」

「…………… 言つた」

「聞こえなかつたら言つた事にならんんですよ～」

「…………… 言つた」

「 そろそろ本題に入つてもいいかな？」

言つたの一点張りの九条静香に対し聞こえなかつたの一点張りの雨音唯。

そんな2人の争いを見るに見かねた林光一朗は2人の間に割つて入るように質問する。

「す、すみませえ～ん」

大きなリボンを弾ませるように深々と謝る雨音唯。もちろん九条静香はと黙つて、無言のままペロリと頭を下げただけであった。

「首に集まつもらつたのは外でもない、学園戦争の件についてだ」

そう言つて林光一朗は説明を始める。

「皆も知つてゐると思うけど、既に上条学院の神岡君が霧ヶ丘女子学院の風力使い（ヒアロマスター）に襲われて、常盤台中学の上坂君

も長点上機学園の絶対零度<sup>アブソリュートゼロ</sup>と一戦を交えている。今回は無事で済んだけど次は相手も全力で来るだろう話し合いで済むような相手でもない

つまり

「要するにひびき上條学院と常盤台中学が手を組んで打って出よう」と言つてゐる

## 会議室にて（後書き）

### 簡単登場人物紹介

名前・春名星花  
はるな せいか

能力・まだ不明

どうやら神岡史貴に好意があるもよう。

名前・雨音唯  
あまね ゆい

能力・まだ不明

大きなリボンが特徴。身長は低い方。

名前・九条静香  
くじょう しづか

能力・レベル3、先行感覚。  
数秒先を感知する能力。未来予知のようにはつきりと見える訳では無く、危ない気がする、と言った程度である。

終始無言で発言があつたとしてもほとんど主語がない。

## 上場連合（前書き）

アクセス3000突破と言う事で、本当にありがとうございます。  
お気に入り登録者は全然ですが、その辺は自分の実力不足と実感しています。

これからも少しでも楽しくて頂けるように頑張りたいと思います。

「でも霧ヶ丘女学院と同じ上機学園の西方を攻めるとなると骨が折れますね」

「そりよね～アンタ同じレベル4に完膚無きまことにやられそつになつたつて話だもんねえ」

両腕を胸の前で組み、難しそうな顔で答える風祭竜に対して、上坂茜は皮肉たつぱりと言つた感じで風祭竜を見る。

「あ、あれは……まあ……そうだけど、つ、次は負けねえ！」

「一体その自信などこれから来るのよ」

全くの根拠のない風祭竜の自信に上坂茜は呆れた表情で首を傾げている。

「で、余裕。どうせいつから仕掛けるつもりなの？」

それがあまりにも自然過ぎてそのまま流してしまった。だが、さすがにそう言い訳にはいかずとつぶやく。「…

「何でお前が会長って呼んでるんだ？」

林光一朗の事を会長と呼ぶのは上条学院の生徒だけであつて他校の生徒がその名で呼ぶ事はまず無かつた。

「いいじゃない別に。うちの方が手っ取り早いのよ。でも、どうするつもりなの？」

神岡史貴の質問をサクッと流し、彼女は質問を続ける。

実際に年上に對して敬語一つ使わないと言つのはおかしな事であるが、彼女の性格上そんな事を言つたとしてもそれなりに簡単に流されてしまつだらう。

「向こうと回じよひな手を使おうと迷つてゐるんだ」

「ええっと、回じよひな手つて言つて」

風祭竜は頭に『』を浮かべて云ふ。

「相手のコーダー格、つまりレベル5をやつし切らなければいけないんだよ。」

「つまり、相手のレベル5をやつしきてしまつたりと学校の士氣を失くしてしまおうとしたのですね」

「その通りだよ春名くん。だた大切な事は学校全体を巻き込まない事だね」

「これは特に重要です。やつにたげに林光一朗は念を押す。

「僕たちの目的はあくまでこの学園戦争を終わらせる」といつて、彼らのよつて強力を示す「じやなー」

「要するに、それ以外の低能力者や強能力者を巻き込んでしまっては向こうと何も変わらないってことですね」

「うん」と林光一朗は頷く。

「よし。会長、僕は霧ヶ丘女学院に行かせて下せー」

リベンジ、そしてアイスの恨み、そう言った事の為に風祭竜は志願したと言つても良いだろう。

しかし

「悪いんだけど、今回は僕、神岡君、春名さん、上坂さん。この4人でやろうと思つてゐるんだ」

「え、じゃあ僕たちは何をするんですか?」

「残つたメンバーを見て分からぬいかな?」

そう言われて風祭竜は残つたメンバーを確認するよつに見渡す。

残つたメンバーをは風祭竜、雨音唯、九条静香。

このメンバーを見て思いつくモノ、それは

「……ジャッジメントですね」

彼ら3人は第177支部所属のジャッジメントである。

「ハーバード～ジャッジメントとして行動するハーバードですね～」

「ハーバードだとね。18学区の一の舞にならなによつて最善を取  
くしてほしくんだ」

「やつはつになるとなり……仕方ないです。じゃあ名前だけでも決め  
ていいですか?」

「ほぼ全員の頭に?マークを付ける事が出来るくらい、だれもがそ  
の意味を理解出来ていなかつた。

「だからチーム名ですよチーム名」

その言葉に何となくではあるが、言いたい事が分かつて来たのだが

「何の為にそんなの付けな」といけないのよ」

発言をしたのは上坂茜であるが、思ひ事は當てじである。

「だからこの学園都市でこれだけのメンバーが揃う事なんて一度と  
ないですよね?」

そう言われてこちらもそれぞれメンバーを見渡す。

錚々たるメンバー

上条学院のレベル5

第7位、万有地変トランスピリエートの林光一郎。

第3位、原点帰還アトミッククルーツの神岡史貴。

常盤台中学のレベル5

第5位、灼熱炎帝コロナリオンの上坂茜。

そして

第2位、強制執行エクセクトヴォイスの春名星花。

学園都市に7名しかいないレベル5の内4人がここに集まっている。

「分かったわ。で、どんな名前なの？」

「上坂連合」

.....

あまりの捻りの無さに畠中とすの上坂茜。

「何？そのセンスの無い名前はー？それに読み方なんて上條そのま  
まじゃないのよー。」

「まあいいんじゃないかな」

その発言に神岡史貴はギロツと上坂茜に睨まれる。

「別に駄乗の訳でもないんだし、春名さんはどうかな？」

「私は神岡さんが良いくて仰るなり……」

「春名わざとまで…じゃあ余韻はどうなの？」

「まあ別に僕はあまり氣にしていないんだけど、結束を高めるってことでもいつ言ったか前を付けてもいいんじゃないかな?」

最早みんな「いやまでも」言われてしまつてしま論をするのが出来なかつた。

「……分かつたわ、じゃあそれにしましょ」

「じゃあ上常連合つてことで」

今ここに上常連合が発足された。

「それじゃあ、上常連合の作戦についてだな？」

と林光一朗は早速上常連合の名前を使つてこいる。

「僕たちはまず霧ヶ丘女学院に乗り込む」

「て事は、一人のレベル5相手にこつちは4人で戦つてこと?」

上坂茜は不思議そうに訊ねる。

霧ヶ丘女学院にはレベル5が1人。その1人に對してレベル5が4人も行く必要があるのか?と言つのが上坂茜の意見のようだ。

「彼女の周りには四天柱<sup>ニコース</sup>と呼ばれる4人の風力使い（エアロマスター）レベル4がいるからね。それを考へるとみんなで行かざるを得ない」

霧ヶ丘女学院四天柱。

「そう言つ事なら仕方ないわね。で、作戦開始の田時はどうするの?」

「作戦決行は明日の午前9時。その時刻に僕たち上常連合は霧ヶ丘女学院に乗り込む」

「それまでに相手から仕掛けて来たらどうするのよ?」

「それについては大丈夫だと思つよ。今朝仕掛けて来て同じ日にもう一度つて事はまず無いだろ？」

それに、と林光一朗はお決まりのポーズと取つて言ひ。

「何かあれば戦城君から連絡が来るよつにしてある。だから僕たちが今すべきことは明日に向けて準備すること。休養も大切だからね」

「じゃあ自分たちは同時に177支部に集まってジャッジメントとしての任務に当たりたいと思います」

「そうしてもうえるとありがたいよ」

そうしてしばらくした後、作戦会議は終了し解散となる。

~~~~~

「…………で、神岡さんなぜひつすんですか？」

帰り道、風祭竜は不意にそんな事を訊ねてみる。

「どうして何をだ？」

「いやあ、春名星花と上坂茜どっちにするのかな～なんて思つただけです」「はあー…?」

「言つてこる意味が分からぬ。そんな表情で神岡史貴は風祭竜を見つめる。

「春名星花は見つけて分かつたと思つますが、わざと神岡さんのこと好いてますよ」

「なつ…………」

自分でも何となくではあるが今日数時間一緒に居ただけでそんな気がしなくもないと感じてはいたが、改めて他人から言わると何とも照れくさいことである。

ただ上坂茜に関しては全くそんな気配が無かつたため、なぜ彼女の名前が出て来たか分からぬ状態であった。

思い起こして見たとしても出て来るのは、ただ単に追いかけ回されたことだけである。

「何で上坂まで出て来るんだ？」

チツチツつと風祭竜は人指し指を立てて横に振る。

「いいですか、あれはきっと俗に言われる、ツンデレ、てヤツです。いつも神岡さんを追い回しているのもきっと好きって言ひ気持ちは現し方だと思うんですよ」

はあ、とため息をついて神岡史貴は答える。

「あれはただ単に俺が気に入らないだけだろ？ って言うかそんな事考へてる暇があるならさつさと帰つて会長に言われたように寝ろ」

(ほんと、鈍感な人だな)

「待つて下さるよお

そう言いながらさうと歩いてしまつ神岡史貴を風祭竜は  
追いかけて行く。

まだ夏の暖かい風が吹く町を歩いて行く2人。

明日は霧ヶ丘女学院との対決である。

## 上場連合（後書き）

いよいよ残りのレベル5の能力も明らかになって来ます。

## 風の支配者（前書き）

いつもありがとうございます。

ポイントはなかなか増えませんが、これから増えるように頑張って行きたいと思います。

いよいよ霧ヶ丘女学院との対決です。

何かありましたら感想いただけるとうれしいです。

## 風の支配者

朝、夏の日差しが照りつける中、彼らは第7学区の外れにある古びた建物の前にいた。

古びた建物は昔何かの工場だったのか、大きなクレーンやスクラップになつた器械の数々が風化している。

「本当にこんな所にいるの？」

その工場を前にして上坂茜は心配そうに訊ねる。

「戦城君の情報は一度たりとも外れた事がないんだ。彼らはここにいる」

昨日結成された上常連合のコーダーとも言える存在の林光一朗はそう答える。

上坂茜が心配になるのも無理はない。彼女はつこいつまで霧ヶ丘女学院のある第18学区に行くと思っていたのだ。

しかし言われるがままに来てみればこの古い工場。こんな場所に相手がいるのかどうか不安になるのは仕方のない事だろう。

「つまり相手も最小の人数で仕掛けて来るつもりだったのでしょうか？」

「それは分からぬけど、ただ一つ言える事はここに霧ヶ丘女学院のレベル5と四天柱と呼ばれる風力使い（エアロマスター）がいると言つ事だね」

そう言って林光一朗はゆっくりと敷地内に入つて行く。

建物は大きな敷居に囲まれており、大きなトビラの前に広場がある。

その広場の真ん中辺りに差し掛かつた時、不意に林光一朗は足を止めた。

「どうやらお出迎えのようだね」

林光一朗は見つめる先には霧ヶ丘女学院の制服を纏つた生徒3人の姿が見えた。

「何やら気配がしたと思つて来てみれば、まさか上条学院と常盤台中学が手を組んでいようとはな」

長い髪を揺らし桐裂真琴は言った。

「おかしいな、四天柱<sup>シヨウス</sup>は確か4人じゃなかつたのかい？」

そう、霧ヶ丘女子学院にはレベル5とそれに仕える4人の風力使い（エアロマスター）がいる。

しかし現に今日の前にいるのは3人、一人足りないので。

「ああ、樹里の事か」

そう彼女は言った。

樹里とは先日神岡史貴が戦つた相手の名前である。

「彼女は戦線離脱だ。どうやら原点<sup>アトミッククルーツ</sup>帰還から受けた傷が完治しないようなのでな」

確かにあれだけの腹部の骨折はそう簡単には治らないだろう。

「神岡君、ここは僕と春名君で引き受けよう。君と上坂君は先に行きなさい」

スッと林光一朗は手を横に出した。

「でも会長、相手は3人ですよ。JJJは全員で戦つた方がいいんじゃないですか？」

「これでも僕らは学園都市に7人しかいないレベル5。心配は無用だ。なに、すぐに追いついてみせるぞ」

会長がそこまで言つなら、と神岡史貴と上坂茜はその場を2人に任せて走つて建物の中へと入ろうとする。

「やつはせせん」

桐裂真琴は扇を手に取りそれを広げる。

「邪魔なのよお……」

それよりも速く上坂茜は手から炎を出し彼らを囲つとうに空中へ炎の壁を作つた。

「今の内に行くわよー！」

「ああ」

2人は建物まで走り大きなドアの前に到着する。  
そしてその大きなドアを開け建物の中に入つていった。

そのドアが閉ると同時に強い突風が林光一朗と春名星花を襲う。  
2人は手を額の前に持つていきそれを防いだ。

「瞬時にこれだけの炎を作り出すとは、さすがレベル5と言つたと  
ころか」

空高く燃え上がつていた炎はその突風によつて次第に弱まり、中  
から3人の姿が見えた。

「2人になつてしまつましたけど、どうします？ ジャンケンでも  
します？」

縁がかつた髪にメガネをかけた彼女は言つた。

「アホやなあ、そんなんやつてたら樹里と同じ田に遭つてまつで。  
ここは3人で一氣に行くべきやう」

制服の裾を胸元で結び、大胆にも臍を露出した彼女は関西弁で答

えた。

「その通りだ風音。小麦の言う通りここは3人で行くべきだ」

「そうでしたわね、相手はレベル5。油断なんてできませんわね」

そう言うと3人は攻める態勢を取り始める。

「それでは参らう。私は四天柱ニコースが1人、北風抜刀桐裂真琴ソニツクブーム」

「同じく南風封陣の月見風音つきみ かぎねですわ」

「同じく西風造形の荒井小麦あらい こむぎや」

そして3人は勢いよく走りだす。

「四天柱ニコース参る！」  
「四天柱ニコース行きますわ！」  
「四天柱ニコース行くぜえ！」

先ほどドアを開け中に入つた2人。そこは大きな倉庫の様であつた。

窓ガラスはほとんどがひび割れており、天井も所々穴が空いている。強風でも吹いたらそれこそ飛んで行ってしまいそうなほど。

そんな場所をしばらく歩いていると大きな踊り場が見えてきた。

窓ガラスは全て無くなり、フレームだけが綺麗に残っている。  
そしてその踊り場の手すりにもたれ掛かるようにして彼女はいた。

「良い風じゃ」

彼女はガラスの無くなつた窓から入つてくる風を全身に受け止めているようであつた。

「この場所は風通しが良くて良い気持ちじゃのう、そう思わんか?」

肩までかかる漆黒の髪を靡かせ、そう詫ねてくる。もちろん神岡史貴と上坂茜に対してもう一つ。

「アンタが霧ヶ丘女学院のレベル5ねー セットと降りて来なさいよー。」

上坂茜は吠えるように叫び。

「うるせー小娘じゃの、見た所常盤台中学の者のようじやが、年上に対しては敬語と言つモノを使ひものじやべ」

確かにその通り。

と、神岡史貴は彼女の言葉に思わず納得してしまった。

「下りて来ないんだつたら 」

上坂茜は右手に直径1メートルほど炎の球を作り

「 無理やり下りしてあげるわよー。」

それを彼女に向けて投げた。

その火球は彼女目掛けて一直線に飛んでいく。

避けなければ直撃。

そんな状況になつても彼女は眉一つ動かそつとしなかつた。

轟！　とその火球は彼女に直撃する。

その炎は彼女<sup>じ</sup>と辺りの手すりや壁をも燃やしてしまつようであつたが

「ほつ、お主<sup>コロナリオ</sup>が灼熱炎帝<sup>じや</sup>じゃな」

と彼女に当たつた火球は風に流されるように消えてしまい、そしてそこには先ほどから全く態勢を変えることない彼女の姿があつた。

「炎の熱量、質、共に素晴らしいものじや」

彼女の周りを見てみると、彼女から30?ほど離れた所の手すりは融けて曲り、下の壁にもしつかりを焦げた跡が残つてゐる。

しかし彼女から30?以内の場所は全く変わることなく原形を留めていた。

「これならどうよー」

上坂茜は巨大な炎の槍を作り出すとそれを相手目掛けて投げつけ  
る。

しかし

その炎の槍は彼女の田の前で消滅してしまった。  
それもまるで見えない何かに当たつて消えたかの様に。

「妾の風流障壁ウインドフレーカーにその様なモノは無意味じや」

と彼女は言つ。

「じゃが、先ほども申した様にお主の炎はなかなかじや」

「別にアンタに褒められても全ん然うれしくないつてのー」

上坂茜は怒りを全開にしメラメラ燃えている。  
隣に居れば熱いの一言だ。

「お主は妾に降りて来て欲しんじやつたの?」

そう叫ついで彼女は踊り場から何の躊躇とも無く飛び降りる。

そして着地する直前に地面から砂埃が舞つと、彼女は音すり鳴らないほどゆっくりと地面に立った。

「ほれ、降りて来てやつただ。次は何をすれば良いくじや？」

「次？ そんなの決まつてゐるじゃない」

上坂茜は自分の体が燃えるほど熱を発しながら呟えた。

「私たちと勝負よーーー。」

つつと彼女を笑顔を作つて答える。

「良かねつ。相手になつてやねんわ」

## 風の支配者（後書き）

### 簡単、四天柱の紹介

いすれも風力使い（エアロマスター）のレベル4

名前・桐裂真琴

ソニックブーム

能力・北風抜刀。抜刀風を得意とする。

黒髪の長髪でいつも扇を持ち歩いている。

名前・月見風音

ハートフルスト

能力・南風封陣

緑掛かつた髪のメガネっ子。

名前・安藤樹里

ソニックエクスバンド

能力・東風掌握。空気を触つたり圧縮させる。

短めのポニーtail。飴が大好物。

名前・荒井小麦

ゲイルアート

能力・西風造形

制服の裾を胸元で結んでいる。しゃべり方は関西弁。

お気づきかもしだせませんが四天柱は東西南北の4つの風を表してます。名称も能力から付けてありますので大体は予想できるかと。読み方の「ユースもそれぞの頭文字を取つてつけてあります。もともとはアネモイだったのですが、ある理由で変えさせて頂きました。

もちろんアネモイにも名前の由来も意味もありました。  
その理由も後々分かつて来ると思います。

▼ s 四天柱（ニュース） ?（前書き）

ユニーク1000人突破いたしました。ありがとうございます。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

いよいよ6人目登場です。

▼ s 四天柱（一コース） ?

大きな砂埃が舞い上がる中に2人の姿はあった。

彼らの視界は砂埃に遮られ、ほとんど何も見えない状態である。

そんな彼らに無数の刃が襲いかかって来ると同時に吹きつける突風が埃を払い飛ばす。

「どうやら上条学院の生徒は逃げる事が好きな様だな」

晴れた視界の先には身構えるように立つ3人の姿がある。

「逃げてばかりでは話にならんぞ」

そう言つて桐裂真琴は扇を振るい風の刃を林光一朗を田掛けて飛ばして来る。

それを回転するように林光一朗は避ける。

「これでもくらいなあ！」

荒井小麦は風で両手に槍を作り出すとそれを林光一朗に投げる。風を突き破るようになんで飛んで来る槍はアートと呼ぶに相応しいほど綺麗に切り抜かれた槍のようで、そして切れ味は本物を凌駕するほど研ぎ澄まされている。

西風造形の彼女だからこそ出来る、風の如く磨き抜かれた槍と言えるだろ？。

しかし林光一朗はそれを避ける。

大きな動作では無く、小さく最小限の動きだけでその槍をかわす。

「これでどうですの」

さらに月見風音は風の渦を作り林光一朗に放つ。

彼女の能力は風の渦を作りそれを利用することによつて攻撃もでき、相手をその渦に閉じ込める事も出来る。そしてそれを利用して自分を守る防御壁を作る事も可能だ。

しかし、彼女が放つたそれもやはり避ける。

「ちっ、すばしつこいヤツだ」

四天柱の攻撃を尽く避け続ける林光一朗。

しかし、その額には一滴の汗すら見えなかつた。

「風祭君ほどではないけど僕も動きには自信があつてね」

と林光一朗は微笑んでみせる。

「なら、これならどうかな?」

3人は集まり同時に技を放つ。

荒井小麦が投げた風の槍を囲むように桐裂真琴は抜刀風放つ。カマイタチ そしてそれらを覆うようにして月見風音の風の渦が放たれる。 それらは相乗効果によつてスピードを上げ林光一朗を襲う。

しかし

それをも林光一朗は紙一重の所で避けてみせた。

「今のは多少危なかつたよ」

それでも林光一朗は表情を変える事なく彼女らの前に立ちふさが

る。

「どうやら本当に避けるのがつまこよつだな、しかしつまでそれが持つかな？」

そして再び彼女たちは先ほどと同じ態勢を取り攻撃を仕掛けようとする。

「もう良いだら」

不意に林光一朗はそんな事を言い出した。

何を言っている？

そんな感じで四天柱の彼女たちは林光一朗を見ていた。

「君たちの実力は大いに分かつた。さすがはレベル4」

だけど、

そう言つと林光一朗はメガネを外し胸ポケットへとそれをしまつ。

「所詮はそのレベルと並ぶことだよ」

明らかに雰囲気が変わった、それだけは確かである。しかしながら何かを仕掛けてくる、そう言った気配は感じなかつた。

「何が言いたい？お前は先ほどから避けるのに精一杯だったではないか」

そう、林光一朗は最初から避けることしかしていないのだが、それを精一杯だったと捉えるのは間違っているかもしれない。

「そうだね、僕はさつきから君たちの攻撃を避ける事しかしていない。でも考えてみてはどうつかな？」

それは難しいことではない、むしろ簡単なことだ。  
今までの林光一朗を見ていれば一目瞭然の事。

「君たちは”能力を使っていない”僕に対して一度たりとも攻撃を当てていないんだよ？」

その言葉の意味を理解するのに時間など必要なかつた。

今まで林光一朗は身体能力だけで3人のレベル4の攻撃を避けて

いたのだ。

つまり、もう良じだらう、と言つのは

「様子見も」今までこじみつ

やう言つ意味であった。

「今まで避ける事しかしなかつたのは私たちの力を測るためにだつた  
と言いたいんだな?」

「やう言つになるとこなるね」

彼はきつぱりと言つた。

相手にしてみればこれほど屈辱的なことはないだらう。  
何せ目の前の男は自分たちの攻撃を汗一つ流すことなく避けながら力を測っていたのだ。

それも能力を使うことなく。

「そろそろ行くとしようかな、ねえ春名君」

「……わ、今まで完全に忘れていましたよね？？」

少し落ち込み気味のトーンで春名星花は呟いた。

本来ならば3対2の場はずがいつの間にかそこは3対1の場になつてしまっていた。

「忘れていた訳ではない。この場にいるレベル5の存在を忘れるほど私たちはレベル5を甘くは見ておらん」

それはまるで彼女を慰めているように聞こえた。

しかしそれは違う。彼女はただ理由を述べようとただけに過ぎない。

「アンタには1.5メートルほど距離を取つていれば問題ないって言う情報やからなあ、その距離を保ちつつこの男と戦つてたつちゅう訳や」

どんな能力にも弱点と言われるモノがある、それはレベル5第2位であつたとしても例外ではない。

彼女の場合は約1.5m、それがボーダーラインなのだ。

「なるほど、それは良い事を聞きました。ではその距離を失くしてしまえば春名君は思う存分能力を使えると言つ事ですね」

林光一朗はお決まりのポーズを取りながら春名星花へと近づいて行く。

そして彼女に近づくと林光一朗は春名星花の肩を軽く掴む。

(何を……まさか！？)

林光一朗は軽く微笑む。

「ああ、行こうか春名君

抜刀風！！

桐裂真琴はそれに気が付き瞬時に抜刀風を放つがそれは手遅れで  
あつた。

既に彼らの姿はそこに無かつた。

桐裂真琴は必死に辺りを見回すがそんな事をしても無駄なことくらい分かっている。

「ちつ、みんな散り」

”止まりなさい”

「くつ……」

3人は金縛りにあつたようにその場から動けなくなつてしまつた。足を動かそうとしても、腕を動かそうとしてもそれらは反抗期の様に言う事を聞かない。

「見えない相手に距離を保つことは難しいからね」

と林光一朗と春名星花は3人の前に突如として姿を現した。

「こゝ、これがレベル5の力……」

唯一動く口を使って何とか桐裂真琴は言葉を発した。

「悪いけど先を急ぐんでお昼寝の時間だ」

林光一朗は一人ずつ後頭部と首の境目辺りを下から突き上げるよう叩き絶させていった。

「会長は何かやられていた方なんですか？」

あまりにも慣れた手つきでそれを行う林光一朗を見て春名星花は訊ねてみた。

「僕の能力は春名君の様に相手に何かしらの影響を与えるモノでもないし、上坂君の様に炎を生みだしたりするモノじゃないからね、もしもの時の為に自分自身を鍛えていた、と言つ訳だよ」

そして林光一朗は建物を指さす。

今の中では神岡史貴と上坂茜が戦っているであろう。

すぐに行へと言つたからには少しでも早く行かなければならぬ。

そう言つて2人は建物へと向かつのであった。

のだが、

!!

突如今から向かうはずの建物の屋根が下から叩きだされるよつてして砕けながら飛んで行った。

そして下から突き上げるよつに大きな竜巻とも言えよつな風が建物の中から空高く舞い上がつてゐるのが見えた。

「急いだ方が良さそうだね」

はい。つと春名星花も領き建物を目指して走り始める。

そして、林光一朗と春名星花が建物のドアに近づいた時ドアから勢いよく転がるよつに2人が飛び出して來た。

「アンタ！ 何で私の時みたいに、バシュって感じにやんないのよ！」

「バカ言つな！ あんなに一杯物が飛んできて俺の能力が使えるか

！」

その飛び出してきた2人は尻餅をついたまま何か言い争っている様子で、林光一朗と春名星花に全く気が付いていない様であつたが、ふと前を向いた所で神岡史貴は2人に気が付いた。

「やあ、神岡君と上坂君」

と林光一朗は何気ないあいさつをしてみるが、神岡史貴は慌てた様子で答える。

「会長！――先ずこの建物から離れて下さい。この中じゃ相手に有利過ぎます！」

と言つて建物から離れようとする。

瞬間にドアの向こうから竜巻の様な風が押し寄せて来た。

突然襲いかかって来たそれに一同は驚くが、4人はそれを左右に分かれるようにかわし、そして中から来るそれに身構える。

「外も良い風じゃ」

建物から出て来た彼女はまるで大自然に来てその空氣思いつきり吸う様に大きく息を吸うとゆつくりと息を吐く。

そして彼女は腰に片手を当て、片足に体重を乗せた姿勢で4人を見渡している。

「レベル5が4人も居るつとは、これはちと計算違いじゃの。四天柱には少しばかり荷が重すぎたと言つ訳じゃな」

「アンタ、外に出たからには容赦しないわよー。」

上坂茜はそんな彼女に向かつて吠えている。

「お主はさつきからいふるさいヤツじゃの。ちと黙つては居れぬのか？」

それに対しても更に食つて掛かりそうな勢いの上坂茜を神岡史貴は一生懸命宥めている。

「お主ら2人にはどうやら四天柱が世話になつたようじゃの？」

その言葉は林光一朗と春名星花に向けられたモノだった。

「君が霧ヶ丘女学院の刀場亞紀だね」

「如何にも、妾は霧ヶ丘女学院のレベル5、  
超神旋風<sup>デヴィルストーム</sup>の刀場亞紀じ  
や」

## 序列の差？（前書き）

今日は自分で何書いてるか分かりませんでした……」了承下さい。

## 序列の差?

「4対1。それも悪くないのお」

彼女はそんな状況でも表情を曇らせることがなく4人を見渡している。

「何が4対1よ、アンタなんて私一人で十分よ

「お主とはもう先ほど中でやったであろうが」

「あんなのアンタが中の物を四方八方から飛ばしてただけじゃない！」

やれやれ

と刀場亜紀は手を横に広げて首を傾げている。

「良かう、今一度相手をしてやるつぞ」

「そんなデカイ態度取れるのも今の内よー」

上坂茜は勢いよく走りだすと頭上に数十個の火球を作り出す。

一つ一つの大きさは直径20?ほどだが各々が摂氏1000度の炎。触れれば火傷程度では済まない代物である。

もちろん触れればの話。

上坂茜が放つたそれを刀場亜紀はその場を動く事無く突風を起しがき消してしまつ。

「お主も懲りんヤツじゃの、そんな炎では妾は倒せぬぞ」

「アンタだつてもう物が無いんだから何も出来ないんでしょー!」

「ホントにそう思うのか」

ギクリ、ヒ。その彼女の手に上坂茜は少し氣押された。

「妾よりもレベルが下の四天柱＝ロースでさえ風の刃を操り、風の渦を巻き起こし、風を造形させ、風に触れる事ができるのじやぞ?妾がそれよりも劣るはずがなかろつ」

彼女は手を軽く上げるとそれを手刀の様に振り下ろす。

ト ラジディーゲイル  
悲劇乃抜刀！

彼女が放つた一振りは上坂茜には当たらずにを上を通り過ぎ、敷地内にあつた建物へと向かって行つた。

「何よ、ど二粗つ」

しかしその刃はあるう事かその5階建ての建物を一刀両断の如く貫き、大きな音を立てて建物の上部は崩れ落ちて行つた。

「ワザと外したと言つておこつかのあ。」

そう言つて彼女は上坂茜を見る。

上坂茜はそんな彼女を見て冷汗以上の何かが頬を伝つて行つた気がしたが、それらを全て取り払うように真っ赤に燃えた。

何よりも

「ワザと外してやつた」

その言葉に怒りを覚え、そしてその怒りを全て爆発させていた。

「外した事 後悔させてやるわー！」

上坂茜は右人差し指を頭上に掲げた。

「私はねえ、どっちかと言うとバカでかい炎を作つてぶつ放す方が好きなの」

「そう言いながら彼女の指先には10mを超す巨大な火球が完成していました。

「だつてそつちの方が気持ちいいじゃない。でも 」

その炎は次第に圧縮される様に入差し指に集まって行き、それは1cmほどの光の玉になった。

「それをここまで圧縮すればどうなると思う？ その威力は数倍に膨れ上がりプラズマを帯びて速度は音速以上になるの」

彼女は左手を手首に添えて刀場亜紀に向けて構え、そして彼女はトリガーを引くようにそれを放った。

ロナレーザー  
光球熱弾！

上坂茜が放つた光の球は砂埃を巻き起こしたかと思つと瞬時にし  
て刀場亜紀に命中し、轟音と共に大きな火柱となつて彼女を飲みこ  
んだ。

光の球が走つた後は空氣や地面、全てを焼いてしまつたよつて黒  
く焦げ煙を上げている。

「これでどうよ」

彼女はその炎を見つめている。  
自分の最高の技をヒットさせ、灼熱の炎の如く燃え盛るその火炎  
の中で大丈夫なはずがない。

彼女は竜巻の様に渦を巻き舞い上がつてゐる炎を見て、そう確信  
を……

竜巻？

彼女はふと考えた。

自分の炎は確かに火柱を立てる事はあるがあんなにも綺麗な渦を  
巻くはずがない。

そして彼女が再びその炎に田をやつた時、

「う、嘘でしょう……」

その竜巻のよひに燃え上がっていた炎はいつも間にか本物の竜巻になっていた。

「そんな技があったとは、少々お主の事をなめ過ぎていたのかも知れんのよ」

刀場亜紀はその竜巻の中から出て來た。

しかし無傷と言ひ訳では無く、制服は燃え所々肌が露出している。

トライデイースチーム  
悲劇乃爆流！

姿を現すや否や彼女は手に風の渦を発生させ上坂茜に向けてそれを放つ。

「……ツー」

上坂茜は瞬時に目の前に炎の盾を作り出しジリジリと後退しながらその風の渦を防ぐ。

しかし炎の盾は少しづつ削られるように小さくなり、その炎が消えてしまつのは時間の問題であつた。

「満足したか？」

ハッと上坂茜は後ろを振り向く。

「……何よあんた……邪魔しに来たの？」

「もう意地を張るのは止める、実力の差は十分に分かつただろ？」

そして神岡史貴はその風の渦に触れる。するとその渦は風船をしぶませる様に消えてしまった。

「それに上坂、お前一人ではアソーチに勝てない。それに俺たちはそんな事をしに来たんじゃない。こいつを止めに来たんだろ」

歯を強く噛みしめる音が聞こえた。

そう、最初に戦つた時点で薄々気が付いていたのかかもしれない。自分一人では勝てないことくらい。

そしてやらなければならぬ事くらい分かっている。

でも認めたくなかつた、認める訳にはいかなかつた。

「何で？　どうして？　私はレベル5第5位の灼熱炎帝よ！　何で第6位のアッシュに負けないといけないの！」

評価が自分より下の相手に負ける事は自分のプライドが許せなかつた。

「そんな事決まっておひつ。妾よりお主の方が弱いと言つ」とじゅうや

「そんなのありえない！　序列は私の方が　」

「ならば聞こいつ。序列と言つものは一体誰が決めたのじゃ？」

「そ、それは……」

「ならば聞こいつ、お主はその序列に満足しておるのか？　妾は實に不愉快じや。現にこいつして戦つてみれば一目瞭然であるう？　レベル5のお主等なら分かるはずじや、能力者なら自分の実力が知りたいと」

「だからこな事をしたと言つのか？」

「そりじゃ、妾も機会を窺つておつたのじゃ。妾の実力を見せつけ  
る為に、霧ヶ丘女子学院の実力を見せつける為に」

無意識の内に拳を強く握りしめていた。

「お前は学校の為とか言つてるが実際はそんな事一切思っちゃいね  
え！ 本当に思つているならこんなバカげた学園戦争なんかに便乗  
しねえハズだ！ それこそ自分の為だけを考えているバカやろ？」

だからこそ、許せなかつた。

自分の為、そんなモノの為に関係の無いモノまで巻き込んだ彼女  
が。

「俺らが更生してやるよ、その頭ん中」

## 序列の差？（後書き）

### 簡単登場人物紹介

名前・刀場亜紀

能力・レベル5第6位、

超神旋風<sup>デヴァイルストーム</sup>。

風力使い（エアロマスター）の

頂点。

自分の事を妾と呼ぶ。

展開速すぎの会話ばかり、

自分の実力不足です。もっと色々な人の小説を読んで勉強せねば

## 上巻の一聲（繪畫集）

またまた何書こらるか分からなくなりがちでしたが……

それでもいにしへ方ばかりの「見聞」になつて下さる、

## 上場の一撃

無数に飛び交う巨大な風の刃。

林光一朗はそれを一つ一つ確実に避けて行く。

上坂茜は自分の炎の盾を使用して辛うじてそれを防ぐのがやつと  
である。

神岡史貴は春名星花を守るようにしてその刃を防いでいた。

四天柱の時には汗一つ流さなかつた林光一朗ですら薄らりと汗を浮  
かべて来ている。

つまり刀場亜紀は四天柱の3人を同時に相手するよりも強いと言  
うことになる。

何よりも4人にとって相性が悪すぎる相手なのだ。

「風は素晴らしいと思わんか?」

風の刃が止み、刀場亜紀は語りかけるように4人に對してそんな  
言葉を投げかけて来る。

「炎を消し、氷を碎き、大地を削り、そして大空を支配する。これほど素晴らしい能力はないじゃろう？」

一步一歩と彼女は近づいて来る。

力の差を見せつけるようにその足取りは軽く、態度を威風堂々としている。

「春名さん、会長の所に行つていってくれないか？」

不意にそんな事を神岡史樹は言つた。

「どうしてですか？」

「俺に考えがあるんだ。だからもしものために会長とスタンバイして欲しかんだ」

「分かりました」

そして春名星花は林光一朗の所へ向かおうとするが

「何をしようとも無駄じやー」

それを阻止するかのように刀場亞紀は風の渦を春名星花に向かって放つが、神岡史樹は瞬時に春名星花の前に立ち手で触れそれをかき消す。

「 上坂！ アイツにとにかく何かぶつ放せ！」

神岡史樹は少し離れた場所にいる上坂茜に目掛けて叫んだ。

「 何かつて何よー？」

「 何でもいい！ 公園の時のヤツみたいなんでいいからー！」

上坂茜は言われるがままに公園を丸焼きにした時のように巨大な火球を作り出すと、それを刀場亞紀目掛けて叩きつけた。

「 これでいいんでしょー！」

轟！と言ひ音と共に10mはあるう火球が刀場亞紀を襲う。しかし、刀場亞紀は避けようとせずに炎に飲み込まれた。

そしてその間に神岡史樹は上坂茜の所へ廻りついていた。

「でかした、あれでいい」

「一体何なの？」

上坂茜は状況を理解出来ずに困惑している。  
今まで尽く防がれてきた炎をいまさら撃つた所で何も変わることはない。

「いいか良くな聞けよ」「

「そんなモノは無意味じゃと分からんのか」

風の壁で炎を防いだ刀場亜紀はもうろん火傷一つ負つ」となく立っていた。

「 その時間は俺が稼ぐ、いいな?」

そして再び神岡史樹は刀場亜紀の前に立ちふさがる。

「今さら何をした所で無駄じゃ

「それはどうかな？」

不気味な笑みを浮かべる神岡史樹に刀場亞紀は歩み寄るのを止める。

「原点帰還の能力を持つてすれば妾の能力を防ぐ事は容易か？」  
じやが、防ぐだけでは妾に勝つ事は不可能じや」

「やつてみるか？」

「フフ、面白い」

トランジショナル  
悲劇乃抜刀！

四方八方から襲いかかって来る風の刃を避けながら神岡史樹は機会を窺う。

何を言われようがとにかく今は自分がやるべき事をやる。  
その」としか神岡史樹の頭には無かった。

「そんな攻撃じや、能力を使つまでも無いぞ」

誰もが分かり切った様な挑発。

しかし彼女の性格を少し把握した上でこれが刀場亞紀を誘惑する一番の手だと神岡史樹は考えていた。

「妾を挑発しておるのか？」

そして言葉を挑発だと分かり切った上で刀場亞紀は軽く笑って答えた。

「良かわう。アトミックルーツ原点帰還の力、ここで試してやうひづや」

突如として彼女の周りを大きな竜巻が覆う。

その竜巻は砂埃を上げ、天まで聳え立つ塔の如く空高く舞い上がっていた。

「竜巻と言つモノは時には鉄筋コンクリート構造や鉄骨構造の建物をも一瞬で崩壊させ、大型の車なども空中に巻き上げてしまうのじや。」

そう言つて彼女が手を開き構えるとその竜巻は彼女の目の前に小さくなつて集まつて行く。

いや、『小さくなる』では無く、それは圧縮と言つた方がいいだ  
ら。

そしてその竜巻は彼女の前で小さな球になった。

しかし、その球の中では先ほどまであった竜巻が螺旋を描くよ  
うに圧縮され、押し込められているように渦を巻いていた。

「それだけの威力のモノをここまで圧縮すればどうなるじゃ  
らうな？」

そして彼女はそれを神岡史樹に放った。

トライデイー エンド  
終焉乃大嵐！

勢いよく放たれたそれを神岡史樹は両手で受け止める。

神岡史樹に当たった後も球の後ろには大きな螺旋が生まれ、全て  
の風を飲みこむように進んでいた。

「クッ」

回転と共に吹きつける風、そして巻き上がる砂埃。  
ジリジリを後ろに後退しながらも何とかそれを防いでいる神岡史  
樹だったが、あまりの威力に抑える事がやつとであった。

「抑えるのがやつとのよつじやなー。」

大きな風の向こうで彼女は軽く笑っていた。  
その風の威力を上げるかのように彼女は手に力を込める。

へへ

そんな中神岡史樹も笑っている。

「何がおかしいのじやー。」

抑えるのがやつとの状態で神岡史樹が笑う理由、それは彼女を挑  
発出来た時点で流れはこちらにあつたからだ。

「まだ分からねえか？ お前がこの大技を放った時点でお前の負け  
はほぼ決定してるんだ！」

「何じやと？」

「上坂！ 今だ！！」

声の先にいる上坂茜の指先には既に光の球が完成していた。その球は先ほど放たれたモノよりも数倍大きく、その威力は想像を絶するものであった。

神岡史樹のやるべき事の一つ、それは時間稼ぎ。

これの為に神岡史樹は刀場亜紀を挑発し、自分だけに技が向けられるようにしたのだ。

「今度こそおこれで終わりよおおおーー！」

上坂茜から放たれた光の球はオレンジ色に輝き、周りの空気を燃やし尽すかの様に一直線に刀場亜紀に向かって行った。

そしてそれは彼女に直撃するかと思われたが……

「クツー！ こんなモノオオオ！」

轟ーーと彼女の目の前でその光の球は大きな音を立てると同時に爆発し炎を巻き起こした。

決めの一撃。

それほどの力を注ぎこんだ一撃。

しかし刀場亜紀は寸前の所で神岡史樹への攻撃を止め、巨大な風の盾を作り出しそれで光の球を防いだのだった。

(どうじゃ、これで妾の勝ち )

しかし彼女には見えた。

その炎の横から走つて来る神岡史樹の姿を。

彼は自分に向けて拳を振り上げ向かつて来る。

見えている。

見えている。だが体が動かない。

防ごうにも体が言ひ事を聞かない。

その動きはスローモーションの様に見え、そして、その拳は刀場亞紀の頬に突き刺さった。

刀場亞紀はそのまま人形の様に後ろへ飛んで、数メートル地面を転がった所で止まった。

「どうやら僕たちの出番は無かったようだね」

その様子をみて林光一朗と春名星花も姿を現した。

「な、何故じや……何故動かなかつたのじや……妾の体に何をしたのじや……」

神岡史樹はゆっくりと彼女に近づく。

「俺達を何もしない、お前の体が勝手に動かなくなつただけだ」

そして、神岡史樹はゆっくりと話始める。

「お前は全てが力任せなんだ、だから簡単な事にも気付かない。お

前はあんな大技を放つた直後に自分の体がいつも通り動くと思ったのか？」

人間大きな動作の後には必ずと言つていいほどスキと言われるモノが発生する。

「それにお前は直後に上坂の炎も最大の盾で防いだ。こんな大きな技を連續で出せばいくらレベル5であろうと関係ない、体は無意識に硬直しちまうんだよ」

刀場亜紀は愕然とした。

力こそ全て、そう考えていた彼女にとつてその説明から受けたダメージは大きかった。

「どうか……妾はそんな単純な事で負けてしまったのじゃな……覚悟は出来てあるぞ、さつさと殺るのじゃ」

そう言って彼女は何かを覚悟したように目を瞑る。

「お前は何を言つてるんだ？　何で負けたからつてそんな事しなくちゃなんねえんだ？」

神岡史樹は呆れた顔で答えた。

「お主、妾をバカにする氣か！？」

「バカにしちゃいない、ただ俺らはお前を止めに来ただけだ。このバカげた学園戦争を止めさせる為にな」

「ならお主は自分の力を証明したくはないのか？ 妾を倒せばそれだけでお主の力を証明できようぞ」

「そんなのには興味がない」

神岡史樹はあつれりと言ひてのける。  
しかし、刀場亜紀はそんな神岡史樹の考えを理解出来ていよいよ  
うであった。

「お前がどうしても自分の力を証明したいんだつたら、俺がいつでも相手になってやる。今度は1対1だ、他の学生を巻き込まないようにならいつでも勝負してやる」

刀場亜紀の疑問はまだ解けない。

「何故お主はそこまで他の学生の事を考えておるのじゃ？ 自分は

「どうでもいいのか？」

「自分はどうでもいいなんて思つひやしない」

「なりゆいしてじや？」

「なりゆいしてじや？」

刀場亜紀は不思議そうな顔で訊ねて来る。

そんな彼女に対しても微笑みながら答えた。

「俺達レベル5ってのは学園都市に7人しかいない、言わば学園都市のトップだ。つまり綺麗な言い方すれば俺達レベル5は他の学生の見本にやらなきやいけない存在だと思つんだ。だからこそ、俺たちはレベル5が引き起こしたこの学園戦争を止めに来たんだ」

学園最強の能力者。誰もが目標とするレベル5。だからこそ自分たちは正しく在らなければならぬ。神岡史樹はそう考えていた。

「お前はアイシラの見本になつてやんなややいけねえんだ」

そう神岡史樹が指さす方向には、先ほどの戦いで気絶せられたいた四天柱の姿あつた。

彼らは体を引すりながらもゆっくりとこちらに近づいて来たいた。

「貴様いら、よくも刀場様を……許せん…」

「もう良いのじゃ」

体に鞭を入れ、勢いよく飛びかかつて来る四天柱であつたが刀場  
亜紀の声で踏み止まる。

「しかし刀場様、」こいつらは

「やつ良こと言つておる」

やつらは刀場亜紀は神岡史樹の方を向いた。

「四天柱は」れほど姿を慕つてくれておつたのじやな

「そうだ」

刀場亜紀はゆつぐと上半身を起こし片足を立て、その上に腕を  
乗せしばらくの間考え込むと、フウとため息をつき、

「四天柱よ、済まなかつたの。びいやうりの負けのよひじや」

彼女たちに頭を下げて詫びた。  
それは今この瞬間のことだけではなく、今までのこと全てに対する謝罪のように見えた。

「刀場様どうか頭を上げて下さー」

「私たちはどうまでも刀場様について行きますわ」

「（ここには）ねえけど樹里のヤツもきっとそう思てるはずや」

そんな彼女を四天柱は囲むように集まってくる。

「お主ら……」

その様子を周りで見ていた4人もホッと胸を撫で下ろした。

「史貴と申したかの？」

刀場亜紀は神岡史樹に訊ねた。

「妾はこれから変わって行けるのかのお？」

その質問に対しても神岡史樹は優しく答えた。

「それはお前たち次第だ」

「……そりじゃの」

刀場亜紀はそうゆつくり呟いた。

その表情は先ほどまでと違い、なにか納得した、自分の中で何か開けた、そんな表情であった。

まだ高く上がる太陽は容赦なく突きつけている中、上常連合対霧ヶ丘女学院の対決は上常連合の勝ちで締めくくる事になる。

倉庫の屋根は吹き飛び、敷地内の建物はほぼ全てが崩壊している。これらが今回の戦いの凄まじさを物語っているようであった。

そんな建物を背に誰もがよつやく一つが終了した、と一息入れようとしていた時

それは鳴つた。

「会長、お電話みたいですよ」

林光一朗の携帯機器が鳴つたのだ。

林光一朗は宛先人を見て少し表情を変えてその電話に出た。

その電話は非常に短いモノであつたが、林光一朗の表情はその短い時間の間で徐々に厳しいモノになっていた。

通話が終了し険しい表情の林光一朗をその場にいた皆が心配そうに見ていた。

「みんな聞いてほしい、戦城君からの連絡だが――」

その言葉に皆の緊張が走る。

林光一朗の表情からも深刻な事態である事は見て取れるが、神岡史樹は悪い予想だけは当たらぬでほしいと願つていた。

しかし、そつと書いた時に限って悪い予想が当たってしまつものである。

そして林光一朗が発した言葉「それまたに悪い予想であった。」

「第177支部との連絡が途絶えたそうだ」

## 上場の一撃（後書き）

“やつやつとも余裕無くなつたりやこまかよね……”

描写がトキめかれるんですよね……

練習あるのみですね、頑張ります。

感想とか頂けるのうれしいです。

## 呻ひの懸（前書き）

こつもあつがとひりやることます。

お氣に入りも少しずつではありますがあつて増えてきております。うれしい限りです。

これからもよろしくお願いします。

## 再びの悪

「連絡が途絶えたつて……」

神岡史樹は愕然としている。

「言葉の通りだよ。……どうやら襲撃されたようだね」

4人は一斉に彼女らに目をやった。

「それは私たち霧ヶ丘女学院ではありません。今日この第7学区には私たち4人以外霧ヶ丘女学院の生徒はいませんから」

「だがお前たちは第1~8学区のジャッジメント支部を壊滅させたと  
言つていただろう」

その言葉に、ああ、と彼女は何かを思い出したように答えた。

「それは私たちの説明不足のようだ。正確に言えば私たち四天柱が  
手を出す前に壊滅されていたと言つべきだったな。」

つまりは第1-8学区のジャッジメント支部は霧ヶ丘女学院に壊滅させられたのではなく別の何かによって壊滅させられたと言う事。

もちろんそんな事をするのは考えられる上で一つしかない。

今回の第1-7-7支部の件も間違いなくその仕業であろう。

「長嶺上機学園め！」

~~~~~

ジャッジメント第1-7-7支部

「九条さん、お茶でもいかがですか？」

大きなリボンを揺らしトレイにお茶を1つ、それも真ん中には置かず何故か端に置きながら器用にバランスを保っている。

見ている方からすれば危ないにもほどがあるが、それが彼女に特技であるかのように絶妙なバランス感覚である。

「……………いい

パソコンと睨めっこを続け、相変わらず主語が見つからない言葉を返して来る九条静香であつたが、少しテンションの高い雨音唯と常に無口な九条静香。この2人はそれで均衡を保っているかのように仲良しであった。

「雨音唯ちゃん、じゃあ俺にそれくれないかな?」

「風祭さーん、仕事して下せこよー。せつきからそれ見てるだけじゃないですか~」

机に置かれた携帯機器をただ眺めているだけの風祭竜であつたが、「これも大事な仕事だ」と言つて腕を組み何回か頷く。

「いつ会長や戦城さんから連絡が来るか分からぬからな、一時もここにつから離れる訳にはいかない」

風祭竜が言う事は一理あつた。

今この時間、上常連合は霧ヶ丘文学院と戦つてゐる所であつた。だからこそいつ連絡が来ても行けるスタンバイを取つてゐる事が自分の仕事である。

風祭竜の中には60%ほどその考えがあつた。もちろん残りの40%は俗に言つサボリと呼ばれるモノに近かつたが……。

頭の後ろに手を組んで立ち上がり何氣なしに風祭竜は呟く。

「神岡さん達大丈夫かなー、俺が行つてればこいつ、ドカンと

と風祭竜が部屋の窓に向けて打つ振りをした瞬間

ガシャン！－と部屋の窓ガラスが音立てて崩れ落ちていった。

「風祭さん！－何やつてんですか～！」

その仕草を見ていた雨音唯は犯人を風祭竜であろうと問いただす。

「俺じゃない！－ただ打つ真似をしただけだぞ！－」

明らかに風祭竜が打つ真似をした瞬間にガラスが割れた。なら風祭竜がそれをやつたと考えるのが妥当であるが、実際は違つた。

なら　誰が？？

そんな思考の中、九条静香が呟いた。

「……………危険！」

彼女の先行感覚の能力が何かを感じ取った。

いつもは無口で無表情な彼女が今回ばかりはその表情を強張らせていた。

「……………外に…………逃げる」

!!

普段主語を使わない彼女が主語を使ったとなるとただ事ではない。そう判断した風祭竜は全員に聞こえるように叫んだ。

「みんな！ 外へ出る……」

その声と同時にその場にいた数名は外へと逃げ出して行く。  
そして次の瞬間

窓から大量の氷の刃が襲いかかって来た。

その刃は部屋にあるモノを容赦なく襲い破壊する。

ただ、九条静香の能力のお陰で怪我人無く全員が外へと避難することができた。

しかし状況が変わる事は無い。

「なんだあ？？ みんなでお出かけでもすんのかあ？？」

全てを見下したようなその尖った声。そして全てを凍りつかせる  
ような眼。

その眼で睨まれたモノは足を凍らされたように動けなくなると言  
う。

そして実際にも逃げ出す事に成功した数名の内、何名かはその場  
を動けないでいた。

「アブソリュートゼロ  
絶対零度！」

クックック

彼は何か面白可笑しく歯を見せて笑う。しかし、その笑いなそん

な生易しいモノでは無かった。

「ジャッジメントの壁あん？？　お腹寝の時間ですよーー？」

「みんな逃げ　ーー。」

アイスブリッジ  
氷河障壁

逃げようとした道を大きな氷の壁が遮る。

高さは10m近くはあるその壁に行く手を阻まれてしまった。

「こんな壁！」

とジャッジメントの一人が自分の手に炎を作り出すとそれを氷の壁に掛けて投げつける。

その炎は勢いよく燃え氷を溶かしたように見えたが、ほんの数セ

ンチの窪みが出来ただけであった。

「そんなレベル3か4の炎」ときで俺の氷を解かせると思ったのか  
あ？？」

田の前には聳え立つ氷の壁、振り向けばレベル5。

「こんな危機的状況の中を選ぶ答えなど無かつた。

答えはたつた一つしかない。

「ジャッジメントなめんなよ。」雨音、行くぞー。」

「はい。」

こんな状況だからこそ攻める、それが危機を脱出する近道。そう言わんばかりに2人は掛け声と同時に走り出す。

相手はレベル5。生半端な攻撃では全く受け付けない。相手は明らかにこちらを見下していた。

しかし、逆にそれを利用する価値はある。

そして相手との距離がある程度になると急に立ち止り、雨音はその場に立つたまま何やら集中し始めた。

それを確認するかのように風祭竜は雨音と距離を取り、あわて

ことが彼女目掛けて拳を振り上げ勢いよく加速し始めた。

「何だ何だ？？仲間割れか？？」

しかし2人の表情は密かに笑っていた。

風祭竜はグングン彼女に接近し、そして彼女目掛けて拳を突き出した。

「今だ！」

オフジエティクト  
物物交換！

次の瞬間、風祭竜が突き出した拳は天雲児翔の頬に突き刺さつていた。

磁力浮上で加速された威力と風祭竜から放たれた拳の威力をともに受けた天雲児翔は、大きく体を横に回転させながら数十メートル飛んでいき壁に突き刺さった。

そして、雨音唯はその天雲児翔に入れ替わったように先ほどまで彼のいた場所に立っていた。

「やつましたね～

その天雲児翔の姿を見て雨音唯は風祭竜のもとへと近づいて行く。彼女の中ではこれぞと言つてよいほどの感触を掴んでいた。

しかし、一方の風祭竜は険しい表情を崩さない。そして彼の手からは赤い血が地面へと滴り落ちていた。

「風祭さん… その手はどうしたんですか～！？」

風祭竜の右手には夥しいほどの小さな氷の刃が突き刺さっていた。

「クッ……」

風祭竜は表情を歪める。

手の痛みに対して表情を変えた訳では無い。

その手応えに疑問を抱いていたのだ。

当たる瞬間までは確実に相手を捉えたと思っていた。

オブジェクト  
物物交換による移動攻撃。

雨音唯の能力。それは自分自身と半径50m以内のモノを入れ替える能力。

重量などの制限があるが、50m以内のモノならば全てのモノを自分と入れ替える事が出来る。

一瞬にして場所を入れ替えられて瞬時に対応出来る人間などいるのだろうか？

そう疑問視するしかなかつた。

なぜなら、拳が当たった瞬間それは明らかに氷の感触であつたからだ。

「やつぱりそう簡単にはいかないみたいだな……」

先ほど天雲児翔が激突した場所。

その立ち込める砂埃が晴れ見えて来たものは、天雲児翔本人では無く

人の形をした氷の塊であつた。

「惜しかつたなあ？？ ジャッジメント」

見上げた壁の上には天雲児翔の姿があつた。

どうやら場所を入れ替える直前に自分を模つた氷と入れ替わつていたようで、それを殴つた為に拳に氷が刺さつっていたのだ。

唯一勝てるチャンスと踏んで決死にしかけた攻撃をこうもあつさり退けられてしまい、こちらに最早勝ち目は無いと考えていた。

しかし次の彼の行動は意外なモノだった。

「どうやらもう終わりみてえだな

と彼は不意に片方の氷の壁を消滅させた。

一体何を考えているのか分からなかつた。このままこの閉じ込められた場所で戦えばこちらの負けは明らかである。

それをわざわざ解くなんてこちらに僅かながら勝機を「えるモノ

……

しかしその崩れた氷の先を見てその考えは捨てる事にする。

そこには1人の男が立っていた。

黒い髪。前髪は眼を軽く隠す程度伸ばされており、その眼は何もかもを飲みこんでしまう様に暗く深い。  
清楚な顔立ちに見えるが、体の至る所から異様なオーラを放つていた。

「遊んでいるみたいだな天雲児」

遊んでいる？？

風祭竜はその言葉を聞き間違えたかと思った。

遊んでいる。

自分たちが決死を掛けて仕掛けた攻撃を受けて『遊んでいる』など信じられないモノであった。

「俺はお前のそつ所は嫌いじゃない、だが今は多少時間を急ぐ

そう言ってその男はゆっくりと足を進める。

ただ歩いているだけ

たつたそれだけの事。

しかしこまだ30mは在り、そのような距離でもとてもない圧力のよくなモノが襲いかかっていた。

「ジャッジメントの諸君、どうやら彼らの天雲兜の遊びが過ぎたみたいで、その所為で嫌な思いをさせてしまったようだな」

男は歩を止めはしない。

一步一歩その距離を縮めて来る。

表情を変える事無く異様なオーラを放つたまま。

「…………ダメ、…………」

突如、九条静香は頭を抱えるように言葉を発した。

彼女の能力で危険を感じたのであらう。

ただ、

その声は震えていた。

「…………逃げて…………逃げて！」

男は右手を横にスッと広げるとその手からは炎が生まれた。

そして彼らに向かつて静かに微笑んだ。

「せめて苦しまずに終わらせよう」

## 再びの悪（後書き）

もう少し描画を増やせないなりたいですね、  
もっと色々な表現の仕方を勉強していきたいです

## 貴きのジャッジメント（前書き）

何かサブタイトルと合っていない気もしますが……

## 貫きのジャッジメント

医者が言つには彼は悲惨な状態であったそうだ。

右手は火傷を負つており、右足は凍傷に近いモノである。さらに左足は何かに押しつぶされたように粉々に砕かれ体の至る所に鋭い何かに切られた跡が残つていた。

一言で表すなら

『残酷』

大学病院の小さな個室のベッドで横たわる彼の意識は無かつた。まるで何か良い夢でも見てているかのように静かに眠つている。

呼吸器が装着され、頭には包帯が巻かれている。

左足には大きなギブスがはめられ、取り付けられた心電図の規則的な音だけが病室に聞こえていた。

「命に別状はないよ」

医師はそう話した。

これだけのダメージを受けて無事なのは運が良かつたそうだ。

でも、と医師は続けた。

「彼が元のよつこ歩けると言つ保障はできないね」

その言葉が4人に重く申し掛けた。

右足の容体は比較的軽いものでそれほど心配ないそうなのだが、左足は骨折が酷く手術は成功したものの、『歩く』と言つた動作が出来るかどうかは分からぬそうだ。

眠つてゐる彼にはまだ知られていないことである。

もし彼が目を覚ましこの事実を聞かされた時、どう思つのだらうか？

歩けないかもしない。

そんな宣告を受ける彼に対して

「一体どんな顔をして  
一体どんな声をかければいいのだろうか？」

「クッ！」

神岡史樹は歯を食いしばり険しい表情のまま部屋を飛び出した。

「神岡さん！」

部屋を出る直前に春名星花が自分を呼ぶ声が聞こえたが、それを振り切るように走り出した。

小さい頃、病院では走つてはいけないと教わった。  
小さい頃、病院では静かにしなさいと教わった。

ただ今だけはその教えに反したかった。

勢いよく廊下を駆け、何段もの階段を駆け上がる。  
田の前に見えたトービラを勢いよく開け、飛び出す。

「ちくしょおおおおおお！」

朝の太陽がまだ登り始める空にその雄叫びは木霊した。  
屋上から見える空を漂つ雲は神岡史樹の心と反するよつとゆつへ  
りと動いている。

ぶつける所のない怒りはやがて拳に伝わり硬いコンクリートに打  
ちつけられた。

壁に打ちつけた拳からはポツリポツリと赤いモノが床に落ちて行  
く。

そんなモノは痛くも何もなかつた。

痛いのは胸の中だけだ。

眉間にしわを寄せ歯を食いしばりその目にまみれた拳を強く握り  
しめた。

「神岡君……」

林光一朗は静かにそして申し訳なさそうにその名前を呼んだ。

その言葉に神岡史樹は振り向かなかつた。握りしめた拳は未だに強く握られている。

「アイツとは 」

神岡史樹は静かに話しました。

アイツとは中学からの仲だつた。

エリート学校なんかに興味は無かつた俺はレベル5でありながら名も無い中学に入学した。

その学校にはレベル5だつた俺に近づいてくる者はおりずつと1人だつた。

別に気にしてなどいない、そんな日々が当たり前だつた。

でも2年になつたある時

『俺を舍弟にして下せー』

1人の後輩がそんな事を言い出して來た。

『うやうやしく時レベル2であつた彼はレベル5の自分に憧れを抱いてそんな事を言つて来たそうなのだが、今時舍弟なんてくだらないモノに興味がなかつた俺は、好きにすればいい、そんな事を何気なしに答えた。

そしたら次の日からまるで風のように周りをつかつく様になつた。

登下校はもちろんの事、学校の無い休日でさえ傍にいた。

もちろん初めはウザいの一言だつたのだが、話す相手がいなかつた俺にとつてアイツがいる時間はとても新鮮なものだつた。そしていつの間にかそんな日々を当たり前のようになつっていた。

周りの反応も変わりだした。

彼の影響を受けて話をする生徒も増えた。

今までならウザいと思つていただろうが、こんなのも悪くは無いと思つようになつていた。

そして1年が過ぎたある日

『神岡さん！ 僕レベル3になりました！』

まるで宝くじが当たったかのように俺の所に飛んで来た彼は喜びを爆発させていた。

レベル2とレベル3の間にあるとてもなく大きな壁があると言われており、レベル2がレベル3になる事は並大抵のことではなかった。

しかしアッシュはその大きな壁を努力で乗り越えレベル3になつて見せた。

レベル5の俺に憧れていた彼は俺を目標としそして努力を繰り返してきた結果だった。

その時初めて

レベル5はみんなの目標でなければならぬ

そう感じた瞬間だつた。

そして彼は中学3年になると同時にジャッジメントに志願し、見事に合格してみせた。

自分の力で学園都市を守る

そう心に希望を描いて。

彼は努力に努力を重ねて今の自分にたどり着いた。

なのに……

どうして……

「どうして竜があんな目に遭わないといけないんですか！！」

彼の努力全てを洪水のように流してしまった結果に神岡史樹は怒りを抑える事が出来なかつた。

「すまない……僕があんな事を頼んだ所為で　」

その言葉にいつの間にかこの怒りを林光一朗にぶつけてしまいそうな自分がいる事に気が付いた。

( 何をやつてんだ俺は )

「会長は悪くあつませんよ……悪くありません」

だがその拳は震えていた。

大切な後輩があんな田にあつてしまつたのは林光一朗の所為では無い、それは分かつてることだ。

こんな所でこの気持ちをぶつけたとしても意味がない、そんな事も分かつている。

ただ心のどこかにそんな考えとは反対の考えを持つてしまつて、いる事に腹立たしかつた。

もし、彼が一緒に来ていたら……少なくともこのよつた結果にはならなかつた。

そう思つてしまつて、いる自分がいた。

「神岡さん」

振り向いた先には所々に包帯やガーゼを当てている雨音唯と九条静香の姿があった。

彼女達の傷はそれほど深いモノはなく、切り傷や多少の火傷程度で済んだようである。

「風祭さんは第177支部のみんなを守るために1人で……1人で立ち向かつて行きました」

普段お茶目な声の彼女だが今は声が震えていた。

「私たちはただ脅えて……何もすることが出来なくて……責めるなら私たちを責めて下さい!」

彼女の目には涙が溢れていた。

その涙はその時の恐怖からなのか、何もできなかつた自分に対する悔しさの涙だつたのか、それは神岡史樹には分からなかつた。

ただ、彼女も悔しかつたに違ひない。

そしてその涙を見て自分の中の暗いモノをしまい込むと雨音唯に近づきそっと彼女の頭を優しく撫でた。

「君たちは悪くない、よく無事でいてくれた。竜は……みんなを守る為に戦つたんだな」

うん、と彼女は静かに頷いた。

「誰も悪くない……」

（ そり、第177支部のみんなも兩音唯も九条静香も会長も誰も悪くない）

彼女にではなく自分に言い聞かせるように言った。

「悪いのは……全ての元凶は……天徒皇夜だー。」

## 貫きのジャッジメント（後書き）

いよいよ学園戦争も大詰めです。

次回ついに学園都市1位、最強のレベル5の能力が明らかに！？

お楽しみに

## レベル5の戦い（前書き）

ユニーク2000突破ありがとうございます！  
こんな物語りを読んで頂いている方に感謝です。

これからもがんばります。

そしていよいよ第1位の登場です。その能力はいかに！？

## レベル5の戦い

「戦城君の情報ではここが今彼らが拠点としている場所だそうだ」

そこは列車の操車場であった。  
電車を整備したり、終電を終え一寸の仕事を終えた電車の休息の  
場所とも言えるだろう。

既に完全下校時刻を過ぎ建物の電気が消されたそこは周りに大量  
に積み上げられた貨物列車用のコンテナによつてまるで違つた空間  
のようであった。

数十本あるレールの上にはどのレールに入るのかを支持する為と  
思われる数字を書いたランプが灯つており、入口から遠く離れた奥  
には大きなシャッターの口を開けた車庫があった。

4人はコンテナに囲まれた道を歩く。  
所々にある電車は安らかに眠つているよつて動かない。もちろん  
動いてもらつては困るのだが。

そんな中その電車の屋根の上に1人の影があつた。

「おやおやっ？ 誰かと思ひきや否の間にレベル5の皆さんじゃな

いですか？？」

夜空に光る月と数々の星が彼を照らす。

アブソリュートゼロ  
絶対零度

全てを凍りつかせるようなその眼は今宵もまるで獲物を睨みつけるかのように鋭く、そして冷たかった。

「出たわね、天雲児翔！」

まるで犬が猿を見つけたかのように上坂茜は深紅の髪を揺らし、おまけに本当に燃えるかのように周りの温度を既に2度は上昇させている。

「天徒皇夜はどこにいる」

いつもは冷静な神岡史樹はその目に何か熱いモノを滾らせて天雲児翔を睨みつけている。

その熱い何かは怒り、悲しみ、憎しみ、そう言つたものが混ざり合つて出来ているようであった。

「おお怖い怖い、そんなに焦るなよな。夜はまだまだ長いんだからよお！」

彼は両手を軽く開き全ての指を不規則に動かし、ハンターが獲物を狩る瞬間を今か今かと待つてゐる様であつた。

そんな彼を目の前にまるで当たり前のよう上坂茜は一步前へ出る。

「じいじは私に任せなさい」

「これは自分の役目と言わんばかりに。

「じゃあ僕も残ろうかな」

それを見た林光一朗も一步前に出る。

「何で会長まで残るのよ」

「これが一番のグループ分けだからね、僕たちが行つた所で天徒皇夜には勝てない。彼に太刀打ちできるのは神岡君と春名君の能力だけだろう。だから自然とこうなるんだ」

ただ単に残ると言つた訳ではない。

林光一朗は敵の能力を考えた上でこの場における最高の選択をしたのだ。

「おいおい、それじゃまるで俺になら勝てるみたいな言い方じゃねえかあ？？」

何抜かしてんだ？？と言わんばかりに田つきを細くし天雲児翔は上から前に乗り込むように睨みつける。

「僕一人では勝てないかもしれないが2人なら勝てるだろう。これは強さを示す戦いじゃない、君たちを止める戦いだ」

そう言つて林光一朗はメガネを胸ポケットにしまって込む。そして戦闘態勢に入る様に田つきが変わる。

「神岡君、彼はおそらくこの奥の車庫にいるはずだ」

「春名さん」

「はい！」

2人はその場を林光一朗と上坂茜に任せ天雲児翔の前を走つて通り過ぎようとする。

が

もちろんお決まりの如くそんな事を相手が許すはずも無く

「誰が行つて良いって言つたんだあ？？」

天雲児翔は両手に氷柱を作り出し今にも2人目掛けてそれを放とうとしている。

彼の眼は完全にこちらを向いていた。  
だからこそそれには気付かない。

「一応僕もレベル5なんだけどね」

彼がその声に気が付き振り向いた時には既に林光一朗の蹴りが彼の耳元を捉えようとしていた。

「チツ」

天雲児翔は慌てて氷の盾を作ったがそれごと林光一朗は蹴り飛ばし、彼は屋根の上から10mほど飛んでいくことになった。

「会長、ここはお願ひしますよー！」

そう言つて神岡史貴と春名星花は車庫口指して走つて行った。

車庫までの1キロ程度の距離の間、春名星花はふとした疑問を聞いてみた。

「会長さんって実はものすごく強いんですね？」

実際に春名星花は四天柱との戦いで林光一朗の身体能力の高さを目の当たりにしている。

だからこそ本当はどうなのが知りたくなったのだ。

「会長は学園都市の能力者で7人しかいないレベル5の1人だけど

もしも能力なしの強さで序列が組まれたとしたら

「会長はそれでも7人の1人に入れるだらうね」

~~~~~

コンテナに勢いよくぶつかった天雲児翔は直撃瞬間、自分を氷で覆いその衝撃に耐えていた。

油断していた訳ではない。

ただ予想以上の身体能力の高さに天雲児翔は驚いていた。

林光一朗の跳躍は明らかに一般のレベルを超えていた。  
ほんの数秒目を離した隙に彼は電車の屋根まで上つて来ていたのだ、いや寧ろ跳んで来た。

「！？」

突如目の前の地面に何かが着地したように埃が舞つたので、天雲児翔は反射的に氷の盾を体全体に張り巡らせた。

そして次の瞬間それは何かの叩きつけられた様に激しく凹み、それと同時に巨大な火球が彼曰掛けて飛んで来た。

轟！－と言ひ音と共にそこは大きな炎に包まれた。

コンテナをも包み込みその炎は激しく燃えている。

「あぶねえなあ？？」

しかしその炎はその声と同時に氷に包まれ粉々に砕け散り、そしてその中からはほとんど無傷の天雲児翔が現れた。

「確かに2人は厄介だなあ？？」灼熱炎帝

電車の屋根の上から巨大な炎を放つた上坂茜はその屋根を下りて天雲児翔に近づく。

そして

「その辺にいんだろお？？」トランスペリオート

万有地変さんよお」

彼が立つ数メートル先の視界が歪みそこから林光一朗の姿が現れた。

「さすがはレベル5だよ、あの僅かな埃で僕の攻撃を予測するなんてね」

林光一朗は心から感心しているようであった。

着地の際に発生した僅かな埃、その小さな変化を見逃さずに危険が迫っている事を予測し氷の盾を張る。そして第2弾目の炎までも防いだ。

戦闘センスの高さを示す判断だった。

「アンタの能力が一番厄介なんだよなあ？？　俺はやたら炎をぶつ放す女を相手しながら透明人間まで相手しなくちゃなんねえのかよ、こりゃあ骨が折れるよなあ？？」

しかし彼は笑っている。

その状況を楽しむかのように彼は笑っている。

「透明人間扱されるなんて心外だね。僕はただ周りの風景に同化しているだけなんだけどね」

自分自身及び触れているモノを周囲と同化させる能力。故に相手からは透明になつたように見える。

「まあ、そんな事はどうでもいいけどなあ？？　さつさと続きを始めよっぜえ」

~~~~~

2人は大きな車庫の前にいた。  
中には電車が何台か止まっており、明りは月明かりが窓から差し込んでいるだけである。

そんな無人の闇の中に男はいた。

周りの闇に融け込むようにその男は座っていた。

「やあ、男女がこんな所でデートでもしているのかな？」

月の光が照らしたその男は黒い髪、そして真っ暗な瞳。その男が闇であるかのように異様なオーラを放っている。

「お前が天徒皇夜だな」

神岡史樹は仇を睨みつけるように視線を注いだ。そして既に拳は握られていた。

「お前に訊きたいことがある」

そうそれは

「何故竜にあんなことをした」

「竜？ 知らない名だね」

「お前が第177支部を襲つたときにただ一人立ち向かつてきただ男……それが風祭竜だ！」

拳は既に力の入れ過ぎで震えていた。

「ああ、彼ね。彼には酷い事をしてしまったなあ。もつと苦しみずに樂にしてあげるつもりだったのに」

もはや怒りを抑える事が出来なかつた。

その足は脳からの命令を待つよりも先に動き出した。

地面を強く蹴り、張り裂けんばかりの拳を振り上げ駆けだした。

「貴様ああーー！」

彼は右手を横に開くとそこには炎が生み出された。

「うぬせこよ、お前

生み出した炎を神岡史樹に叩きつける。

しかしそんな炎は神岡史樹には通用しない。

両手を前に出しその炎を受け止め、受け止めたその炎を完全に消滅させ

「ーー？」

しかしその間に彼は左手を横に開き、そこに稻妻の槍を作り出す

そしてそれを神岡史樹に放つた。

その稻妻の槍はまだ炎を受け止めている神岡史樹へと直撃した。

「うがあああ」

全身に数万ボルトにも及ぶ電気が流れた。  
その場に倒れた体を持ち上げようとするが体が痺れて言つ事を聞  
かない。

「神岡さん！」

慌てて春名星花は神岡史樹の元へ駆けつけた。

「どうやらその力は2つ同時に異なるモノに発動することが出来な  
いみたいだな」

春名星花は彼を力強く睨みつけると静かに深く言葉を発した。

”平伏しなさい”

しかし彼はそれに従う事無くその場に立つたままでいる。  
そしてそれとは逆に彼の周りを風が覆い、その風は刃となつて春  
名星花を襲つた。

「さやああ」

春名星花はその刃と共に後ろに数メートル飛ばされた。

ようやく立ち上がった神岡史樹は春名星花に掛け寄り彼女を支え  
て立ち上がつた。

「お前たちは何か忘れていないか？」

そして天徒皇夜はその屋根から飛び降りるとゆっくりと車庫の外  
にいる2人の近づいて来る。

その奥に映るモノ全てを飲みこんでしまう様な瞳で見つめながら、  
静かにそして高らかに言つ。

「俺は学園都市最強のレベル5だぞ」

## レベル5の戦い（後書き）

ネタばれになつるかもしけませんが

勘違いされなによつに申し上げます、

決して デュアルスキル 多重能力ではあります。

次回辺り完全に明らかになると想います。

何かあればアドバイス、感想を頂けると嬉しいです。

## 学園都市最強のレベル5（前書き）

10000P突破ありがとうございます。  
これからも大勢の方に読んで頂けるように頑張りますのでよろしく  
お願いします。

1話が長くなるとどうしても何書いてるか分からなくなってしまい  
ますね……

## 学園都市最強のレベル5

彼は笑っていた。

圧倒的不利な状況でありながら、彼はそれを楽しんでいた。

攻撃する事も相手の攻撃をギリギリで避ける事も彼にとつては楽しみの一つでしかない様に

「もう諦めたらどうだい？」

林光一朗はそんな質問を訊ねてみる。

明らかに自分達の方が強いと確信しているかの様な発言。なぜなら、林光一朗と上坂茜の攻撃を彼は避ける、防御するのどちらかしかしていなかっただ。

クックック

獲物を見つめるかの様なその鋭く冷たい眼を光らせ彼は笑っている

「何が可笑しいのよアンタ！」

上坂茜はその笑いが氣に食わない様でとにかく吠えている。  
むしろ彼女にとつてはこれが普通なのかもしない。

「俺は前にも言つたよなあ？？　ただ突っ込んで来るお前と違つ  
てよお！」

なによ　　と言いかけてふと冷静に考えてみる。

前にも言つた……

「　上！？」

と上坂茜は瞬時に上を確認する。

以前そういう場面があつた事を思い出したからだ。

しかし上坂茜の予想を裏切るよつこやこには夜空に光る星と用し  
か無かつた。

「上とは限らないよなあ？？」

次の瞬間2人の足は地面から動かなくなつた。  
それを確認するように見た2人の目には凍りついた地面に埋もれる自分の足が目に入った。

天雲児翔は逃げ回る様に見せかけて地面の下に大量の氷を作り出し攻撃するタイミングを計つていたのだ。

そして言葉を巧みに使い相手の意識を頭上へと向けさせそれを発動したのだ。

彼は単純に戦闘を好んでいるのではなく、戦闘における両者の駆け引きを楽しんでいる。

殺るか殺られるか、その境目をグルグルと往復することを彼は快樂とし、生きがいとしている様であった。

そして彼は相手の裏をかく事を得意とする。

相手がそれにハマリ啞然とする表情、苦痛に歪める表情、そういつたモノを見る事が彼にとっての楽しみでもあつた。

クツクツクツ

彼は2人を見て、様はねえ、と笑う。

電  
燕  
氣  
彈！  
ダイヤモンドダスト

言葉と同時に無数の氷柱が宙に舞う。  
全360度を全て覆い尽くすそれに2人は唾を飲み込む。  
さりに足は氷に覆われ身動きが取れない状態である。

襲い掛かる氷柱になす術もなく林光一朗は顔を隠すよつて腕を交差させそれを防ぐ準備を始めていた。

「会長！ 「ゴメン！」

轟！！ と上坂茜は地面を覆い尽くす氷に炎をぶつけた。

生半端な炎ではその氷は溶ける事知らない。

上坂茜が放った炎は全力に近いモノだった。

ゴメンの意味は自分だけ抜け出して「ゴメンではない。自分が放つ炎の大きさに対する「ゴメン」である。

つまりその炎で会長を巻き込んでしまうかもしれないほどの炎をぶつけなければこの状況を回避する事は出来ないと判断しての行動だった。

炎は激しく燃え、地面の氷を瞬く間に溶かしていく。そしてその炎は氷柱を防ぐ役割も担っていた。

「まあ、これくらいは仕方ないだろ?」

数メートル離れたコンテナの近くに林光一朗は立っていた。その服は所々が焦げて整った黒髪もチリチリになってしまっている所がある。

炎によつて地面の氷が解けた瞬間、林光一朗は自慢の身体能力で脱出をしていた。

「『メンなさい会長』

炎が消えて姿を現した上坂茜は林光一朗の方を向かずに謝る。だがその事を林光一朗はどうも言わず上坂茜と同じ方向を見つめている。

「よく防いだなあ?? 壊めてやるぜえ」

天雲児翔はコンテナの上から不気味に笑う。  
殺すつもりでやつた。だが、殺すつもりはない。そんな笑み。

瞬、と不意に林光一朗は姿を消す。

周囲に同化して距離を詰めるのが目的だ。そうすれば打撃で攻撃ができる。

「そつは問屋が卸さんぜえ」

それを見た天雲児翔は手から大量の氷を発生させ宙に散時く。しかし、それは攻撃と呼ぶにはあまりにも弱弱しく一つ一つの大きさも1?ほどで、どちらかと言えば雪のよつにフワフワとしているモノであった。

そんなモノには目もくれず林光一朗は周囲に溶け込み差を詰めて行く。

残りの距離も5mを切りそうになつた時、突然天雲児翔の鋭い眼が林光一朗の方を向いた。

(何!?)

そして天雲児翔の手から放たれた氷柱は林光一朗を日掛けて飛んで来た。

「クツー!」

林光一朗は間一髪の所でそれをかわし、そして姿を現す。

( 何故居場所が分かつた?? )

相手から絶対に見えるはずの無い万有地変<sup>トランスペリエート</sup>の能力。しかし、天雲児翔は当てずつぱうで林光一朗を捉えたのではなく、明らかに場所を確認して氷柱を発して来たのである。

つまり天雲児翔は何らかの方法で林光一朗の居場所を特定する事が出来ていたのだ。

「これが戦闘経験の差つてやつかあ??」

彼は笑っている。

先ほどまでは違い、明らかに形勢が逆転していた。

林光一朗は再度周囲に同化し距離を詰めようと計る。しかし、またもやその作戦は封じ込められてしまつ。

もはや天雲児翔は林光一朗の位置を把握していた。

(何故僕の位置が分かる！？)

「動搖を隠せないみたいだなあ？？」

林光一朗は言われた通り動搖していた。過去に一度たりとも見破られる事のなかつた万有地変トランスペリエトの能力が見切られたのだ。

天雲児翔は再び無数の氷を宙に散蒔く。コンテナの上には先ほどばらまかれたモノが雪のように積もっている。

( 雪…… )

「もうお終いならこっちから行くぜえ！」

天雲児翔は2mほどの氷柱を数十本作ると、それを2人に向かつて投げつける。  
しかしそれが林光一朗に当たる事は無い。上坂茜も炎の壁を作つてそれを防いだ。

( なるほど、そつ言つ事か )

林光一朗は3度目の正直と言わんばかりに再び周囲に同化してい

く。

「そんな事はもう無意味なんだよーーー！」

天雲児翔はその鋭い眼で何かを確認するかのように見つめる。そして確信を得た様に氷河ともいえる氷柱のある場所へ向けて叩きつけた。

空気を切り裂く様に地面へ当たった瞬間、砂埃と共に何かが宙を舞つた。

フレームの中に納められたレンズはものの無残に割れ、ガラスが砕け散る。

地面へと落ちたそれは最早”メガネ”と呼べる代物では無くなっていた。

「う、嘘……」

上坂茜は信じられないような顔をしている。

「どうやらそのメガネ以外は潰れちまつたようだなあ？？ ハツハツハツハツー！」

地面に転がるメガネは明らかに林光一朗の物である。そしてそのまま隣には未だに砂埃が舞い上がる中、巨大な氷が何かを押しつぶしている様であった。

誰が見ても一目瞭然。

こんなモノに押しつぶされて生きているモノなどいない。  
最早確認する必要もない。地面に落ちたメガネが林光一朗の最後を示しているようなモノであった。

「呆氣ねえ最後だつたなあ？？　ちつとばかしは楽しませてくれると思つたが、大した事なかつたみてえだなあ？？」

「よくも会長を……許さないんだから！――」

上坂茜は炎を纏い怒りを露わにしていた。

その炎が天高く舞い上がり火柱のように燃えださる。

「次はてめえの番だ！　灼熱炎帝！」  
コロナリオン

天雲児翔は手を上へ翳し何かを放とうとした。

そう、放とうとした。

のだが、

「勝手に人を殺さないでくれるかな？」

なつ！？

次の瞬間天雲児翔の体はコンテナの上から数メートル吹き飛ぶことになる。

体をクの字に曲げながら飛んで行つた後、地面を數十回転がりコンテナに激突して漸く止まつた。

そしてその天雲児翔がいた場所には胸ポケットにメガネの無い林光一朗の姿があつた。

「か、会長！」

「てめえ……何で生きてやがる……」

(あの氷の下敷きになつて生きてるはずがねえ)

ヨロヨロと蹴られた右わき腹を抑えフラフラになりながら立ち上がる天雲児翔。

確かに林光一朗は氷の下敷きになつたはずである。なぜなら、天雲児翔には林光一朗の位置が分かつていて。そしてそれを間違えるはずもない。

だからこそ何故林光一朗が今そこに立つているのが分からなかつた。

「君は自分が放つた氷柱の数も分からぬのかな？ 上坂君の所にいくつ行つたかは分からぬが、僕の所には9本来たね」

「それが……何だつて言つんだあ？？」

ようやく立ち上がつた天雲児翔はコンテナにもたれ掛らないと立つのもやつとの状態である。

側面からの中段蹴り。天雲児翔のわき腹に突き刺さる様に入つたそれは確実に彼の肋骨を砕いていた。

「では今何本残っているのかな？」

地面の突き刺さっているのが7本、そして転がっているモノが1本。合計8本。

つまり

「一本足りないみたいだね。さてそれは一体どこへ行ってしまったのか？」

「一本足りないのが何になる？ それよりも、なぜアイツは傷を負つていらない？」

「答えは簡単、僕が持つて行つたんだ」

「持つて行つただと？？」

未だに林光一朗が何を言いたいのか理解できない。それよりも何故あれだけの氷の下敷きになつて傷一つ無いのかが不思議で仕方がない。

「そう、つまりは君が僕だと思つて撃つたのはその氷柱だったと言う訳だ」

!!

天雲児翔はその言葉によく全てを理解した。

なぜ林光一朗が生きていたのか、そして傷一つないのか、

林光一朗は氷柱を囮に使つた。

なぜ天雲児翔が林光一朗の位置を把握することが出来たのかと言うと、それは宙に散蒔かれた小さな氷に秘密がある。

フワフワと雪の様に舞うその氷は何かに当たれば消えてしまう様な弱弱しいモノだ。つまり何も無い所で消えてしまった場合、そこには見えない何かがあると言つことだ。

同化するに行っても実体が無くなる訳ではない。

そう言つた唯一の弱点とも言つべき所を突いて来た戦術であった。

しかしその氷に気が付いた林光一朗は逆にそれを利用し天雲児翔を騙したと言つことだ。

「さあ、どうやら終わりみたいだね」

指を指す方向には右手を真っ赤な炎に包んだ上坂茜の姿があつた。

そして彼女は天雲児翔目掛けて勢いよく駆けだし炎に包まれた拳を力いっぱい振りぬく。

「クツ！」

慌てて天雲児翔はわき腹を抑えている手とは逆の右手で氷の盾を作るが、その盾はあまりにも薄すぎた。

彼女の右手が触れた瞬間その盾は力無く破壊された。

「これで終わりよーー！」

上から下へと振り下ろされた拳はそのまま天雲児翔の頬に突き刺さる。

そして彼は地面へと叩きつけられるように激突しそのまま意識を失った。

天雲児翔を見下ろすように立つ彼女の肩を林光一朗はやさしく叩く。

「行こうか、上坂君」

「行きましょう」

横たわる天雲児翔を再度振りかえり見つめ、

そう言って2人の所へと急いだ。

~~~~~

2人が辿りついた場所は異様な光景だった。

コンテナのいくつかは何か巨大な力によって押しつぶされた様に潰れ、いくつかはレーザーで切られた様にもの見事に真つ二つになっている。地面には焦げた場所や未だに炎を出して焼けている場所が彼方此方にある。

その真ん中に2人は倒れていた。

「神岡君！」  
「春名さん！」

林光一朗と上坂茜は2人の所へ駆けつける。  
その声を聞いて2人もふらつきながらも立ち上がった。

「お前たちも無駄に避けなければ苦しまずには済むものを」

ようやく立ち上がった神岡史樹と春名星花を見ながらその男はそう呟く。

「アンタ2人をこんな目に遭わせておいてどうなるか分かつてのー！」

二つものように相手に対してもうかる上坂茜であったが

「どうなるんだ？」

その眼で睨まれた瞬間言葉を失ってしまった。

ビリビリと押し寄せる得体の知れないオーラに自分の体が微妙に震えていることに上坂茜は気が付いた。

蛇に睨まれた蛙とはこいつ事を言うのである。いつもは何も考える事無く飛びかかる行く上坂茜であったが、今回ばかりは体の中の何かがそれを止めている様であった。

そんな自分に鞭を打つように手に炎を作り出す。

「いのなるのよー。」

「止めるんだー。」

林光一朗は叫ぶがその言葉が届く前に既に上坂茜の手からは炎が放たれていた。

「たわい無い炎だ」

そう言つて男はその炎を片手で防ぎそして跳ね返した。

上坂茜は跳ね返された事に驚くが炎ならかき消せると構えを取るが

え！？

返つて来たモノは炎ではなく

( 雷！？)

と次の瞬間、林光一朗が飛びこむように上坂茜を突き飛ばしその雷は林光一朗の頭を掠めるように通過した。そしてその雷は後ろの

「コンテナに直撃し辺りへと飛び散った。

「あの男にそんなモノは通用しないんだ」

埃を払う様に立ち上がる林光一朗とその言葉に戸惑いを隠せない上坂茜。そしてその2人に神岡史樹と春名星花を合わせた上常連合。

その4人のレベル5の前に立ちふさがる男は

学園都市最強と呼ばれる男、

学園都市に7人しかいないレベル5の頂点

第1位、完全制動、天徒皇夜  
オールブレイキ

## 学園都市最強のレベル5（後書き）

ついに1位の能力が判明しました。

ただこの能力には色々な意味で自信がありません……でも頑張ります。

## 完全制動（オールブレーキ）（前書き）

いつもありがとうございます。

お気入りは増えませんが、多くの皆さまに読んで頂けているみたい  
なのでうれしい限りです。

今回は色々あるかもしませんが「」と承下さい。

## 完全制動（オールブレーキ）

学園都市最強の能力者

オールブレーキ  
完全制動、天徒皇夜。

完全制動、  
天徒皇夜。

彼に攻撃を仕掛けた事は無意味に等しい。

しかし交渉なんて言葉はもっと無意味に等しい。

彼を止める為には彼に勝利する他になかった。

「勝つには攻めるしかない！」

神岡史貴の声に反応するかのように4人は4方へと散らばる。

最初に仕掛けたのは上坂茜。

誰よりも速く走り出した彼女の右手の指には炎が圧縮されており、  
その指は既に天徒皇夜に向けられていた。

（ これならどうよー）

ロナレーザー  
光球熱弾！

空気を貫く光の球は轟音と共に地面を焼き、焦がしながら天徒皇夜へ一直線に向かう。

直撃すれば爆発と共に大きな火柱が舞い上がるはずである。

しかし

それは彼を捉えた事には捉えたが爆発音も無ければ火柱が上がることもなかつた。

彼はそれを発砲スチロークが飛んで来たかのように右手一本でそれを受け止め、それと同時に炎は電気へと変わっていた。

その電気は圧縮されるように小さな球になる。

そして右手から手の平にある電気の球を左手の人差し指で軽く弾く。それはまるで額に軽くやる「テコピン」の様に軽く弾いただけ。

「返すよ」

しかし弾かれた瞬間、その電気の球は電磁砲の如くレーザーの様に轟音と共に発射される。

そしてそれは一瞬にして上坂茜へと直撃する。

「が……っは……！」

息が……

レーザーを瞬時に出した炎の盾で防いだものの、そのあまりの威力に勢いよく後方へ飛ばされた。  
コンテナへと背中から激突した衝撃でメシメシと体の中から骨が軋む嫌な音が聞こえる。  
激しく背中を強く打ちつけた為呼吸も儘ならない。

「上坂さん！」

春名星花はコンテナに打ちつけられる上坂茜の姿を見てクツと歯を噛みしめる。

そして春名星花は集中し天徒皇夜の一点を見つめる。

”止まりなさい”

深く突き刺さるような声が木靈する。

声を操り空気振動で相手の脳に直接命令を下しその言葉通りに相

手の自由を奪つたり、動かしたりする能力。

止まりなさい、と言つ春名星花の命令に天徒皇夜の動きは止まつたかのように見えた。

が

「無意味だ」

言葉と同時に突風が春名星花を襲つ。

腕をクロスさせ顔の前に持つて行き風を防ごうとするが、その突風は地面に落ちているコンテナの破片をも巻き込み春名星花の頭目掛けて飛んで来る。

!!

腕の隙間からそれを確認し慌てて体を捻るものとのコンテナの

破片は春名星花の頭を掠めて行った。

地面上に落ちる赤い血液。

避けた際に頭を切つたようで耳の傍を伝つてボツリとそれは落ちる。

しかし天徒皇夜から田を離す事は出来ない。

林光一朗は不意を突くように姿を隠し天徒皇夜の背後に回り込んでいた。

そして姿を見せると同時に、相手の顔の側面目掛けての上段蹴りを放つ。

それでも天徒皇夜は振り向く様子も無くただ立っているだけである。

そしてその振りぬかれた足が無防備の天徒皇夜の顔を捉えた瞬間

まるで自分の体重が何十倍にもなったような感覚に陥り、林光一朗は背中から地面へと叩きつけられた。それと同時に見えない何かに押しつぶされるように周りの地面が大きく凹む。

地面に叩きつけられた瞬間、内臓ごと押しつぶされた様に林光一朗は吐血する。

それでもどうにか体を反転させると足元をふらつかせながら立ち上がった。

反撃に備えて距離を取ろうと体を引きずりながら後退するが、5mほど下がった所でその足は止まり膝をついてしまった。

「ぐは……っ」

レベル5の3人の連続攻撃を受けても天徒皇夜はその場から一步も動いてはいなかつた。

動かしたのは腕のみ。

たつたそれだけでレベル5の3人を簡単にあしらつてしまつた。

「このやうあお！」

正面から走り込む神岡史貴。

相手との距離はすでに5m。あと数歩踏み込めば相手の懷に潜り込める距離である。

ただその神岡史樹が目にしたものは、両手を大きく広げ右手には稻妻の槍、左手には風の槍を構え軽やかに笑う天徒皇夜の姿だつた。

やばい

そう思つた瞬間には2つの槍は神岡史貴へと目掛けて放たれてい  
た。

その2つは交差することなく一直線に神岡史樹へと向かつ。

夥しい電流を纏う槍と風を切り裂きながら向かつて来る槍。瞬時に何かを決め込み意を決した様に風の槍を手で防ぐ。

が、それと同時に数万ボルトにも及ぶ電流が神岡史貴を襲つた。

「ぐあああ」

後方へ激しく飛ばされ、ゴロゴロと地面を転がる。

数メートルで止まる事が出来たが、体が痺れてうまく体を動かす事が出来ない。起き上がるうと着いた手も震えて力を入れる事が出来ない。

それでも震える体を懸命に持ち上げグッと前を睨みつける。

そこには表情一つ変える事のない天徒皇夜が立っていた。

「制動装置つて知ってるよな?」

制動装置

運動、移動する物体の減速、あるいは停止を行う装置。主に摩擦による運動エネルギーを熱エネルギーに変換する事で移動速度を減じる機械的ブレーキである。

そして運動部分の運動エネルギーを他のエネルギーに変換する事

が制動作用の本質である。

## 完全制動

### つまり

「俺は触れたモノのエネルギーを別のエネルギーに変換させる事が出来る。運動エネルギー、熱エネルギー、電気エネルギーなどを問わずあらゆる種類のエネルギーを別のエネルギーに変換する事ができ、その質量共に変換することが可能」

上坂茜の放つた炎は電気に変換し、春名星花の空気振動を風に変換し、林光一朗の蹴りで生まれた衝突エネルギーを位置エネルギー（重力）に変換させた。

即ちそれはこじらの攻撃が全くの無意味である事を示している。

一種のカウンターと言えるべきモノかもしれないが、そんな事はない。

ありゆるエネルギーを変換すると云つ事は、單なる摩擦

手を横に広げる動作

「これだけでの動作での空気摩擦で生まれた運動エネルギーを変換すれば電気を生みだす事も、炎を生みだす事も出来てしまつ。

「俺には理解できない。これほどの能力を前に何故自ら苦しみを選択する？」

神岡史貴はふりつぶ足に鞭を打つように立ち上がる。

「……ならお前にも訊いてやる。なぜそれだけの能力を持つていながらこんな学園戦争を引き起こした？ 学園都市最強と言われるお前がこれ以上何を望むんだ！？」

見た目はボロボロでも中身は違う。その心は折れることなく瞳に炎を宿して天徒皇夜を睨みつけていた。

「最強、ならどうして皆は俺が最強だと知ってるんだ？ 実際にみんな戦ったのか？ 違うよなあ？ 1位とか噂だけで最強、そんなんじゃつまらない、そんなんじや話にならない。皆に恐れられ近寄る事も儘ならない、それこそが最強。だから証明してやるのさ、脳に刻み込んでやるのさ、全ての能力者に俺こそが最強と叫ぶ事を噂ではなく実体験でなあ。この学園戦争はその始まりに過ぎないんだよー！」

そんな事の為に……

グッと神岡史貴の拳に力が入る。

『俺を舍弟にして下さー。』

そんな事の為に

『俺レベル3になれましたよー。』

ただ自分の最強を証明するためだけに

『こんな自分でもみんなを守つて行きたいんです』

「こんな奴の所為でアイツは……竜は……」

下を向いたまま立ち尽す神岡史貴。

「どうやら観念したみたいだな。そりやつて初めてから大人しくして  
いれば苦しみずに済んだものを。ジャッジメントのアイツと聞いてお  
前たちと言い苦痛を味わうのが好きみたいだなあ」

神岡史貴は動かない。  
何も語らない。

「どうした？ 震えて声も出ないか！？」

神岡史貴は微かに震えていた。

天徒皇夜は両手を大きく広げる。  
ビリビリと広げられた左手には夥しい電気が発せられ、右手には  
轟々と音を立てながら燃える炎の塊を生みだす。  
雷と炎を両手に天徒皇夜は笑つ。

「お前は俺が最強である事を示す生贊になれ！！」

左右から放たれた雷と炎が神岡史貴を襲う。

今の状況是最悪だ。

雷か炎のどちらかを喰らつただけで終わってしまうなくらい  
体はボロボロである。

そして原点帰還は同時に2つの能力を打ち消すことは出来ない。

アトミックルーツ

しかし、神岡史貴は両手を前に出し右手で炎を、左手で雷を、2つ同時に

消して見せた。

「なに！？ ……バカな！？」

天徒皇夜は驚いていた。

確かに先ほどまで神岡史貴は1つのモノに対してもしか自分の能力を発動することが出来ていなかつた。

しかし放たれた雷と炎は同時にかき消されてしまった。

「お前なぜ

「うぬせえよ」

神岡史貴は燃えるような眼で天徒皇夜を睨みつけた。握られた拳はギシギシと音を立てて震えている。

「そんな理由の為に……関係の無いみんなを巻き込んで……竜も……」

…

最早どくなJリを言われよつがJの田の前の男だけは許す事はない。

Jのバカげた学園戦争を終わらせるためにも

巻き込まれたみんなの為にも

そして風祭竜の為にも

Jの男だけは許してはいけない。

握られた拳から溢れんばかりの怒りを爆発せしむつに神岡史貴は

「更生してやる……ための頭ん中をよお……」

叫んだ。

## 完全制動（オールブレーク）（後書き）

やつぱり主人公ってのは何かしら強くないといけないですよね。悪  
を撃つのは主人公と相場が決まっていますし、

感想やアドバイス頂けると嬉しいです

## 絆の巻（前書き）

こつもあつがといわやこあす。

第一章完結です。ここまで読んで頂けた方本当に感謝です。

ちなみに4部に割り込み投稿しておつままでのうちも良かつたら  
読んで下さい。

キレると云つのはいつ云つ事なんだらうか?

色々な事を考えて来た。  
過去に起きた事を思い出したり、先の事を考えたり、今どうべきか。  
そんな事を常に考えていたのかもしれない。

人間はそりやつて考へることを止めたりしない。  
どんな時であつても頭のどこかで別の事を考へていたり、何かしら処理を行つてゐるに違ひない。

ただ今は違つた。

何も考へる必要がない。  
何かを考へる事が無意味だ。

田の前の男に対して何かを考えると云つた通りすら思い浮かばない。

神岡史貴の中で何かがキレた。

能力には演算能力が不可欠である。

その演算能力の高さが能力を左右することになる。

現に空間移動能力者は1-1次元絶対座標の演算が複雑なため、その時の精神状態などが大きく影響する。

人間の脳には雑念がある。それが演算の邪魔をしてしまう事が多い。

ただ、もしもその雑念など余分なモノを除去し思考を全て演算の為だけに使う事が出来れば、能力を最大限に発揮することが可能になる。

神岡史貴は何も考えない。

ただ目の前の男を倒す、

それだけを心の隅において全てを演算の為に費やす。

神岡史貴はキレていた。

睨み合う様に向かい合う2人。火花が散る様に互いを睨みつける。

その睨み合いに押し負けたように天徒皇夜は言葉を発する。

「2つの能力を同時に消すなどまぐれに決まっている！」

天徒皇夜は両手を前に出し握り拳を作ると、中に親指を挟み込み勢いよく両方を弾いた。

弾かれた際に生まれた運動エネルギーは熱エネルギー 電気エネルギーに変換され質量共に増大、圧縮され閃光のように研ぎ澄まされる。

その雷と炎を帯びた閃光は混ざり合いながら神岡史貴に向かって一直線。

地面を焦がす、燃やすを交互に繰り返しながらそれは向かっていた。

最早今の神岡史貴に避けると言つた動作は不要であった。

神岡史貴は右手を前に出し今度はそれを片手で受け止め、まるでシャボン玉を潰すようにそれを

握りつぶした

「ば、バカな……！？」

まぐれや運、そう言つた類のモノではない。  
最早まぎれも無い事実。

神岡史貴は雷と炎を同時に消す事が出来る。

( そんなハズはない、2つの能力を同時に消す事はヤツには不可能なハズ。だがどうしてヤツはいつも容易く攻撃を防ぐ…? )

フツと神岡史貴は鼻で笑う様に答える。

「演算能力つてのは頭がスッキリするといこまで向上するもんなんだな。今ならお前のどんな攻撃でも防げそうな気がするぜ」

チツと天徒皇夜は舌を鳴らす。

( そんな事はありえない、あつてはならない、俺こそが最強、それが覆ることはない! )

「多寡が2度俺の攻撃を防いだからって調子に乗るな…!」

10の炎、雷、風が混ざり合つて神岡史貴を襲う。

天徒皇夜は左右の指10本を全て弾きその際に生まれた運動エネルギーを3つの異なるエネルギーに変換し放った。

あるモノは熱を帯び、あるモノは電気を纏い、あるモノは全てを

切り裂く風となり、閃光は轟音と共に襲い掛かる。

（　今度は3つだ。2つはやられたが3つの異なる能力を防ぐ事は不可能だ！）

しかし、神岡史貴は不気味に笑う。  
そんな事関係ないと言わんばかりにまるで落ち葉を払う様にその手を横になぎ払った。

手に触れた閃光は跡形も無く消え去った。

「ありえん……そんな訳がない！」

再び両手の指を弾き10の閃光を放つ。  
今度は3つでは無い。炎、電気、風、音、光。  
5つのエネルギーに変換した攻撃。

5つの色は地面を燃やし、焦がし、巻き上げた小石を碎きそして巻き上げられた小石は跡形も残らない。

しかし、神岡史貴はそれをも埃を払つかのよつて

かき消した。

「バカな……5つの能力を同時に消すなんてありえない！」

（まさか……神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くものとでも言つのか！？）

天徒皇夜はヨロヨロと後退りをする。

「5つだ？」

神岡史貴は笑う様に言葉を発する。

「元はお前の1つの能力から作り出されたモノだろ」

それぞれ異なるエネルギーであつたとしてもそれは元々エネルギーを変換すると言つ能力から生み出されたモノ。

つまり、炎であろうが雷であろう風であろうがそれぞれのエネルギーは元は小さな他のエネルギーから変換されているモノ。

何人もの異なる能力者から放たれたモノなら話は別だが、1つの能力から生み出されたモノなら、その能力の干渉を受ける前に帰還してしまえば天徒皇夜がいくら別のエネルギーに分けて放とうがいかなるモノも打ち消す事が可能なのだ。

そのことに神岡史貴は気が付いた。

「クッ……」

天徒皇夜は歯を噛みしめる。

そう確かに天徒皇夜は多重能力者ではない。オールフレイキ完全制動の能力で別のエネルギーに変換しているに過ぎない。

つまりいくら様々なエネルギーに変換しようがそれは一つの能力として帰還されてしまう。

「どうやら俺はお前の最大の天敵だったみたいだな」

他の能力者相手なら苦戦する事も無い。

ただ神岡史貴の原点<sup>アトミックルート</sup>帰還だけは違つた。

「ふざけるな！」

怒りを爆発されるように天徒皇夜は近くにあるコンテナに手の平を叩きつける。

その瞬間コンテナは生きているかのように動き出し神岡史貴へと向かつて飛んで来た。

衝突エネルギーを運動エネルギーに変換しコンテナを飛ばす。

単純な攻撃に見えるがそうではない。

神岡史貴の原点<sup>アトミックルーツ</sup>帰還は異能の力にしか働かない。能力に関わっていないモノを帰還させる事は出来ない。

コンテナは鉄の塊。能力によつて作り出された物では無い。

つまり、これは今最も効果のある攻撃と言える。

大きな音を立ててコンテナと言つ鉄の塊がまるで弾丸のようなスピードで飛んで来る。

しかし神岡史貴は避けようとしている。

今の神岡史貴はいつもと違つ。普段出来ないような演算であつても今の神岡史貴なら難なくやり遂げる事が出来る。

足を前後に開き両手を前に突き出す。

衰える事を知らないそのコンテナは神岡史貴の手の平へとぶつかる。

本来ならばその場で試合終了が決定するハズであるが

手の平に当たつたその瞬間、コンテナはまるで電池が切れたおもちゃの様にその場に激しい音を立てて地面に落ちた。

「なつー!?

天徒皇夜は驚きを隠せない。  
炎を消される。雷を消される。そんな事は分かつていてる。  
ただまさかコンテナまでをも防ぐ事が出来るとは思っていなかつた。

あれは能力では無く単なる鉄の塊。  
碎く、破壊する、では無く動きを止めめる。

(まさかそんな事まで出来ると言つのか!?)

どうやってコンテナを止めたのか?

天徒皇夜は手の平を叩きつけた際に発生した衝突エネルギーを運動エネルギーに変えてコンテナを動かした。  
つまり、コンテナは能力によつて変換された運動エネルギーによつて動かされていた。

神岡史貴はコンテナ自体をどうしたものではなく、コンテナに触ることで能力によつて変換されていた運動エネルギーを帰還させた。

だからこそコンテナは破壊や消滅ではなくその場にただ落ちたのだ。

「もう終わりだ」

神岡史貴は右足を一步前へ出す。そして左足をひくこと天徒皇夜との距離を詰めて行く。

（ハハ……そんなハズはねえ）

一步距離は縮まる。

（……俺は最強だ）

その距離は縮まる。

（……学園都市最強だ）

拳が強く握られる。

「お前は……最強を示す生贊になればいいんだああーーー！」

力強く踏みつけた足のエネルギーを運動エネルギーに変換し移動速度をあげる。

本来、天徒皇夜の体に拳は通用しない。殴った所でそのエネルギーを変換されてしまうだけであろう。

林光一朗の場合は蹴りで生まれた衝突エネルギーを位置エネルギーに変換された。

ただ神岡史貴の拳だけは唯一天徒皇夜に通じる。

打撃で生まれたエネルギーを変換されてもその変換されたエネルギーを帰還させてしまえばその拳は天徒皇夜に届く。

そんな唯一の手段にわざわざ飛び込んで来るのは最早自我を忘れてしまっているからであろう。

握られた拳には何の躊躇も無い。

「これは」

天徒皇夜の拳に合わせるようにそれは振り抜かれる。

「みんなの分!」

右の拳が天徒皇夜の頬に突き刺さり、大きくよろけながら吐血する天徒皇夜。

「これは」

(……最強)

「　　3人の分！」

左の拳が天徒皇夜の頬に突き刺さる。

吐血しよろけながら天徒皇夜は笑っている。まるで壊れた人形の様に。

(……俺が最強)

「そして……これが」

全ての力を込めるようにその拳は握りしめられていた。

天徒皇夜の不気味な笑いが頂点に達した。血のついた歯を全て見せ叫ぶ。

「俺が最強だああああ！！！」

「竜の分だああ！！！」

瞬間。

神岡史貴の右拳が天徒皇夜の頬に激しく突き刺さった。

顔から地面に叩きつけられた天徒皇夜は、ゴロ、ゴロと回転しながら地面を転がつていった。

~~~~~

「いいんだね？」

病室のドビラを前に医師はそう訊ねた。  
開いた廊下の窓からは夏らしい日差しと暖かい風が入り込んでき

てこる。

「はい」

開けられたトビラを入り奥へ進むと、頭に包帯を巻き、天井から吊るされた左足に大きなギブスを填め、ベッドの背もたれを起こし窓の外を見つめる彼の姿があった。

「 神岡さん」

じりじり気付いた彼は頭に巻いた包帯以外はいつもと変わらぬ顔で名前を呼ぶ。ただじょとなく暗いといった印象が見受けられる。

「 終わったんですか？」

「ああ終わったよ」

会話は続かない。

どんな顔をしてどんな事を話してあげればいいか神岡史貴には分からなかつた。

無言が続く。

ただ夏の風にカーテンが揺れる音とどこからか聞こえて来る蝉の鳴き声だけが病室に響き渡っている。

ドアの近くからは上坂茜が何か助け舟を出そうとして近づいてくるが首を振る林光一朗によつて止められた。

「俺」

風祭竜は何か言葉を発した。

ただその言葉は神岡史貴が最もびっくり返せば良いか分からぬ言葉であった。

「歩けないかもしないんですね」

風祭竜は自分の左足を見つめる。

「……………ツ」

神岡史貴は言葉を発する事が出来ない。  
ただ拳を握りしめることしか出来ない。  
歯を食いしばる事しか出来ない。

「神岡さん

風祭竜の言葉に神岡史貴は耳を傾けた。

「覚えてますか？ 中学の時の事」

覚えている。

「俺、無理やり神岡さんに押し掛けで」

忘れるハズが無かつた。

「舍弟になつてずっと隣について

忘れる訳が無い。

「やつと神岡さんの背中が見え始めたと黙つたのこ

「

忘れられるモノではない。

「　また遠くなっちゃいました……」

布団が僅かに濡れていた。

隠れて見えない手はきっと震えていた。

だから

「 戻つて来い」

「こんな事をいつのまにか言つたのは酷かもしけれない。

「 舎弟は兄貴の傍にいるもんだ」

努力を押しつける事になるかもしれない。

「俺の舎弟はお前しかいない」

でも必ず乗り越えられると信じているから

「だから

「

そう信じて いるから

「歩いて戻つて来い！」

もう涙は無かつた。

それはいつもの顔。

部屋一杯にその声は響き渡つた。

「おー！」

夏の暑さはまだまだ続く。

歯車はまだ回り続けていた。

## 絆の拳（後書き）

改めて小説は難しいです。

言葉一つで描寫する、感情を表す。まだまだ勉強が必要です。

もう一つ反省点は戦闘ばかりだったと言つ所ですね。

それらを改善出来るよう頑張りますので

引き続あとある科学の原点帰還をよろしくお願ひします。

次回新章突入です。

……フウ、ようやく序章が終わつた……

## 簡単なキャラクター紹介（前書き）

第1章終了」と言つ事でこれまで登場したキャラクターの簡単な紹介をします。

## 簡単なキャラクター紹介

これまでの簡単なキャラクター紹介

上条学院 高校

名前・神岡史貴  
かみおか しき

能力・レベル5第3位、原点帰還<sup>アトミックルート</sup>、触れたモノを能力に干渉される前に帰還する

2年。黒髪のツンツン頭、イメージとしては当麻さんに近いです。  
本編の主人公

名前・林光一朗  
はやし こういちろう

能力・レベル5第7位、万有地変<sup>トランズバリエート</sup>、自分及び触れたモノを周囲と同化させる

3年。寝かされた黒髪にメガネ（実は伊達眼鏡、コンタクト使用）  
その姿から会長と呼ばれている。

名前・風祭竜  
かざまつり りょう

能力・発電能力スター<sup>エレクトロマスター</sup>、磁力を操る事を得意とする。

1年。黒髪の短髪。自称原点帰還の舎弟を名乗り、疾風迅雷<sup>ショーティングスター</sup>の異名で知られる。

名前・戦城明  
せんじょう あきら  
イーグルアイ

能力・千淨天眼  
2年。未だに一度も姿を見せる事の無い謎の人物。皆とは面識があ

るようだが普段どこにいるのかは不明。林光一朗とはよく連絡を取つてゐるようだ。

## 常盤台中学

名前・上坂茜

かみさかあかね

能力・レベル5第5位、灼熱炎帝<sup>コロナリオ</sup>、発火能力者<sup>パイロキネシス</sup>の頂点。

3年。肩まである赤髪の女の子、イメージは美琴炎バージョン。神岡史貴にやたら突っかかるが校内での人望は厚い。

名前・春名星花

はるなせいか

能力・レベル5第2位、強制執行<sup>エクゼクトヴァイス</sup>、声を使い空気振動で相手の脳に直接命令を下す。ただ範囲は15mと短い。

3年。肩まである青味掛かった髪に物柔らかな雰囲気の女の子。実は神岡史貴に好意を抱いている。普段は優しい声をしているが能力を発動する時は鋭い声に変わる。

名前・雨音唯

あまねゆい

オブジェデイクト  
テレポーター

能力・物体交換<sup>オブジェデイクト</sup>、空間移動能力レベル3、自分自身と半径50m以内の物を入れ替える能力。自分のみを移動させることができない。

2年。比較的小さめの体に似合わない大きなリボンを装着。普段言葉のどこかに「を入れる癖がある。九条静香と仲良しコンビ

名前・九条静香

くじょうしづか

ブリマリーード

能力・先行感覚、数秒先の感覚を予知する能力。第6感みたいなもの、能力はレベル3。

2年。終始無言の女の子、発言したとしても主語がないので分かりづらい。雨音唯とは仲良しコンビ。

## 霧ヶ丘女学院 高校

名前・**刀場亞紀**

能力・レベル5第6位、超神旋風<sup>デバイルストーム</sup>、風力使い（エアロマスター）の頂点。

3年。肩までかかる漆黒の黒髪の女の子。自分の事を妾と呼ぶ。学園戦争に便乗し自分の力を計ろうとしたが自分の能力の力に溺れ神岡史貴（上常連合）に敗れる。

名前・**桐裂真琴**

能力・北風抜刀<sup>ノーフィングブーム</sup>、風力使い（エアロマスター）レベル4、抜刀風を得意とする。

2年。刀場亞紀に仕える四天柱<sup>ニユース</sup>の1人。膝まである黒髪の女の子で常に扇を持ち歩いている。

名前・**月見風音**

能力・南風封陣<sup>ハードブラスト</sup>、風力使い（エアロマスター）レベル4、風の渦を作りだす。

2年。刀場亞紀に仕える四天柱<sup>ニユース</sup>の1人。緑掛かつた髪にメガネをかけた女の子。どちらかと言えば頭脳派タイプ

名前・**安藤樹里**

能力・東風掌握<sup>ソニックエクスパンド</sup>、風力使い（エアロマスター）レベル4、空気に触

れる事ができる。掴む、圧縮することも可能。

2年。刀場亜紀に仕える四天柱の1人。短めのボーネールの女の子。飴が好きで常に銜えている。

名前・荒井小麦

能力・西風造形、風力使い（エアロマスター）レベル4、風を具現化させる能力。槍、刀、色々なモノに造形することが可能。2年。刀場亜紀に仕える四天柱の1人。制服の裾を胸元で結び大胆に臍を見せる女の子。口調は関西弁。

長点上機学園 高校

名前・天徒黑夜

能力・レベル5第1位、完全制動、触れたモノのエネルギーを別のエネルギーに変換する能力。その際質量共に変換が可能。

3年。前髪で少し目が隠れるほどの長さの黒髪。噂や序列だけの最強ではなく誰もが恐れる最強になるため学園戦争を引き起こしたが、神岡史貴に敗れる。

名前・天雲児翔

能力・レベル5第4位、絶対零度、氷結能力者の頂点。

2年。冷酷、残虐で戦う事を生きがいとする。灼熱炎帝とは対極する能力者としてかなりの敵対意識を持っている。性格に似合わないほど戦略家

## 簡単なキャラクター紹介（後書き）

いよいよ2章がスタートいたします。

沢山アクセス頂いているみたいなんで評価お気に入り等が少しでも  
増えて行けるように頑張りたいと思います。

## 第2章 現実殺し編 怪我の功名（前書き）

いつもとある科学の原点帰還を読んで頂きありがとうございます。

第2章 現実殺し編 突入です。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

## 第2章 現実殺し編 怪我の功名

9月11日

夏休みも終わり新学期が始まつて1週間以上が経過。学園戦争の被害は最小限に抑えられた様で学生たちはいつもと変わりない学校生活を送っているようだ。第18学区は多少大変だったようだが、休日の今日も街中では以前と変わらぬ風景が見てとれる。

そんな街中を1人悠然と歩く神岡史貴。  
かみおか しき

手には何やら袋をぶら下げどこかへ向かっている模様であった。

9月だと言つて30度を超える暑さを記録する学園都市。20年から30年ほど科学が先を行くため、辺りにはドラム式掃除ロボットや警備ロボットがあり、神岡史貴の横を通過して行く。最早能力開発とか以前にその科学の力を最大限に利用してこの暑さをどうにかしてほしいものである。

そしてその暑さから身を守る為に建物の陰を通りっていたのが何かの縁なのだろうか、何の変哲もない店から出て来た人と軽く体がぶつかる。

「ああすいません って」

目線の先には学園都市でも選りすぐりのHリート校、常盤台中学

の制服を来た赤髪の女の子。

「なんだメラメラか

「メラメラ言つなあ！」

「あああこんな暑い中炎とか簡便してくれ！」

徒でさえ暑い中せらりと体温温度を高めよつと今にも体中から炎を撒き散らしそうな常盤台中学の上坂茜かみさかあかねを落ち着かせよつと宥める。

その性格や口調からは決してお嬢様と呼ぼうとは思はない。男性の憧れであるお嬢様学校の生徒がこんなモノでいいのかと質問したくなる。理想のお嬢様を想像し憧れを抱いている男子生徒の諸君には彼女にだけは出会いませんよつとお祈りでもしておこひ。

そんな彼女に対して、その後ろにはこそ本当のお嬢様と言えるような物優しい雰囲気の女の子が影を潜めるよつて立つてゐる。

「ああ、春名も一緒だつたのか

「お久しづりです神岡さん……」

「ポつ何て急に顔を少し赤められてはどう対応して良いのか分からぬ。

顔に出やすいと言つたか分かりやすいと言つたか、こちらとしてはうれしい事なんだろうがそう言つた経験の少ない神岡史貴にとつては少しありにくらい存在でもある。

オホンッとワザとらしい上坂茜の咳に気が付き春名星花は慌てた様子で視線を逸らす。

「で、アンタこんな所で何してんのよ？ どつか出かけんの？」

在り来たりな質問ではある。

まあ、こんな休日の正午を過ぎた時間それもこんなに暑い中1人で街を歩いているなんて、余程の暇人で散歩が趣味であるのか、あるいは特別な用事があるかである。

もちろん神岡史貴は後者である。

手に提げる荷物を軽く持ち上げ指をさし単調に答えた。

「見舞いだ」

~~~~~

第7学区のとある病院。

入口のドアが開くとそこはエアコン最大出力と言わんばかりの天国と言う空間であった。

要するにとても涼しいと言つこと。

受付の待合椅子に座っている人達がゾロゾロとこちらに視線を向けている。

常盤台中学の制服を纏つたお嬢様が2人も居ればそうなつてしまふのも当然ではある。春名星花は正真正銘のお嬢様であるが上坂茜は少し疑問に思う部分があるが……

まあ他人から見ればお嬢様なのかもしない。清楚な顔立ちと常盤台中学の制服、中身をしらない人間ならその姿はお嬢様に見えるだろう。ただ性格を知るモノは決して彼女をお嬢様とは呼ばないだろう。

静かな廊下には病院独特の何かの薬品の匂いだつたり消毒の匂いだつたりそう言った類のモノが混ざり合つたモノが満ちている。

そう言つた匂いは嫌いではなかつたが、あまり長時間この空間にいるとまるで自分が病人であるかのような錯覚に陥りそうであつた。

そんな廊下の端にある一室。部屋番号は520。ネームプレートには風祭竜かざまつり らよと書いてある。

神岡史貴はいつものようにノックしドアを開けて中に入る。

「お～い竜、頼まれてた物持つて　」

……

「ちょっと何止まつてんのよ邪魔でし　」

……

「どうかされたんですね　」

……

3人はそこから次にどう行動すればよいか考えた。  
まずは田の前の光景を整理する。

ベッドの上には風祭竜が1人。そして近くに女の子が1人。  
綺麗に剥かれたリンゴを食べさせている。  
そこまでは良い。

ただ

あらう事が九条静香くじょう しづかは口移しでそのリンゴを食べさせていた。  
あ～ん、とそのリンゴを風祭竜がかじった瞬間を3人は目撃して  
しまった。

2人もリンゴをかじった瞬間から時が止まつたかのようになん人を見つめている。もちろん3人の時間もしばらく止まつっていた。

神岡史貴は手に上げた荷物の高さを変える事無く180度向きを  
変えるとそのままドアへ向かつて歩き出そうと

「ちよつと待つて下さい、神岡さん」

風祭竜に呼び止められた。

リンゴはと言つとまだ九条静香が銜えたままだ。

「……お前らそんな関係だったのか？」

呆れた表情も織り交ぜて風祭竜に訊ねる。

「いやあ……まあ……その……色々あります……」

少し目線を逸らしながら頭の後ろを手で搔きながら答える風祭竜。

「…………竜…………大胆」

目を横に逸らし両手を頬に当てその頬を赤らめながら九条静香は咳いた。

「お前まさか、もつそんなことまで……」

「違います誤解です！　まだそんなことは一度も……って九条も誤解を招く事を言つなー！」

と大声を発した後に風祭竜は異変に気が付く。

そう、ここは病院の個室。外なんかと違いエアコンの完備で室内温度は快適な温度に保たれているハズであるが、ここは明らかに暑い。何かが燃えるように。

ハツと振り向く先には……

ワナワナと握り拳を作り体中から熱を発している上坂茜の姿があ

つた。

「ア・ン・タ・ねえ」

これはマズイ、と思つたが最早ビリする事も出来ないと風祭竜は悟つた。

「可愛い後輩に……何手出してんのよおーー!」

燃える拳は容赦なく風祭竜に襲い掛かった。

「ホント呆れた、怪我に紛れてまさか静香に手を出すなんて」

椅子に座り足と腕を組み本当に呆れた表情で上坂茜言つた。

風祭竜はと言つと、頬を2倍以上に腫れた状態でベッドに横たわつていた。布団の所々に焦げたような跡が残つているが、これだけで済んだ事が奇跡に近いであろう。

その隣で九条静香は淡々とまたもリングゴを剥いていた。

「上坂、お前リンクゴなんて剥けないんじゃない?」

ふとそんな事を何気に思つた神岡史貴は上坂茜に訊ねてみた。

「フン、なめないでよ。と九条静香から果物ナイフとリングゴを借りる。

そして慣れたような素振りで皮を剥き始めるのだが、皮は途中で切れるは形はガタガタになるが、と決して上手と言えるモノでは無かつた。

「どうよ、と出来あがつたリングゴを見せて来るが皮と一緒に2割ほどの実がそぎ落とされており、丸いハズのリングゴは角々していた。

「まあ……20点でとこだな

味が変わらぬ訳でもないのでその少しこわのリングゴを口に放り込む。

あつそつだ、と神岡史貴は床に置かれた荷物を取りだす。

「竜、頼まれてた物だ」

「ああ、ありがとうございます」

と風祭竜は荷物を受け取る。

中身はと言うと、

「運動できそうな服を片つ端から詰め込んだんだが、そんなもんでも  
良かったか?」

半袖、短パン、タンクトップ、トレーニングウェアなど様々は衣  
類。

「はい、リハビリもキツくなつて来ると想つのでこれくらいあつた  
方がいいです」

と言いながらその荷物を何の違和感も無く九条静香は棚にしまい  
込む。

(……様になつてる)

「…………時間」

と九条静香は時計を指さし風祭竜に告げる。

「これからリハビリなんですかと行つてきますね」

九条静香は無言のまま松葉杖を風祭竜に渡す。

先ほどの荷物の中から上下の着替えを出すと九条静香がそれを手に持ち部屋をでる。

「それじゃ、頑張れよ」

「はい、また来て下さいね」

「2人の邪魔しちゃ悪いからな」

「神岡さんが来てくれたら励みになりますから」

それじゃ、と松葉杖を使いこなし風祭竜は部屋を後にする。  
本人のいなくなつた部屋に長居も出来ないので3人もすぐに病院  
をでる。

医者が言つには尋常じゃないほどの回復力を見せて いる様だ。

元々運動神経が良い事と発展した科学、そして何よりも彼が努力家であるからこそそんな事が起きるのであらう。

「お元気そうでしたね」

帰り道春名星花はそう呟く。

そんな横をドラム式掃除ロボットが地面に落ちていてそれを拾いながら通過して行く。

道の真ん中に設置されている風力発電の3枚のプロペラが夏の暑い風を受けゆっくりと回っていた。

「ああ、アイツは元気が取り柄だからな。それに九条も付いてるみたいだし」

笑い混じりに神岡史貴はそう答える。

九条静香は以外であつたが彼女の存在も心の支えになつていてるのである。

「あ～あ、まさか静香に先を越されるなんて思わなかつたわ

上坂茜はそんな事をボソッと呟いた。

別に誰かに向けて発せられた言葉ではないだらうが、ため息混じりのその発言は何かと氣になつた。

「何だ？ お前も竜が好きだったのか？」

「……」「あ、違つわよ、そつぬつ意味で言つたんじゃなくて、それに私は

上坂茜は顔を赤らめながら田線を外しチラッと神岡史貴を見る。ただ、ん？と首を傾げる神岡史貴の頭の上には『？』が付いている。

「えええい、もうこい！ 春名さん！ 帰るわよ！」

照れ隠しをする様にドカドカを歩き上坂茜は帰つて行く。待つて下さいよお、と上坂茜の後を追う春名星花は振り向いて神岡史貴に一礼すると後を追う様に小走りで駆けていく。 アイツなによもう、などと愚痴を零しながら歩く姿はやはりお嬢様とは呼べるものでは無かつた。

そんな後姿眺めフウと軽くため息をつき神岡史貴は空を見上げる。

既に太陽は傾きかけて夕日が建物の間から見え隠れしており、街行く人達の数も減つて来ている。

残暑の厳しい9月11日。

建物の隙間から吹く風に当たりながら神岡史貴は帰宅して行く。

歯車は止まる事を知らない。

## 第2章 現実殺し編 怪我の功名（後書き）

日常を取り入れて行くのが目標です。

新キャラ等も登場させていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

お気に入り11件ありますといいます。

## 回つ始ぬ歯車（繪書も）

いつもありがとうございます。

ユニーク3000人突破しました。本当に感謝です。

これからもとある科学の原点帰還をよろしくお願いします。

## 回り始める歯車

「ハアハアハアハア」

深く速い呼吸音が辺りに響く。  
汗が頬を伝つて地面に落ちる。  
べつりとくつついたTシャツ、派手に決めたジーンズは最早重り  
でしかなかつた。

学園都市の並び立つビルの間、上からは微かに月の光が差し込んで  
きている。

そんな裏路地を駆けながら男は振り向く。その先には誰もいない。  
だが男は走る。

乾ききつた喉に有りもしない唾を必死に飲み込む。

男は今どうして自分が走っているのかを考える。

数時間前、連れのダチといつものように夜の街に出かけた。いつ  
もの場所で仲間と戯れ、飯を食い、その辺でダラダラ話す、そこま  
ではいつも通りだ。

だが今どうしてこうして走っている?  
何が違つた?

裏路地には使わなくなつた自転車や横倒しにやつてこむビール瓶

からは何やら液体が流れ出ている。そんなモノに足を取られようが  
引っかけようがそんな事はお構いなしに走る。

男は考える。いつ食い違つたのか。

そう、あれは仲間と解散しダチと一緒に何気なしにブリーフラ夜の  
街を歩いていた時だ。

すれ違うヤツらは皆関わるまいと道を開けて来る。  
酒も入っていたし暗くてよく分からなかつたが、そんな中ダチの  
肩が何かにぶつかつた。

ぶつかつた後どうなつた？　どうなつたんだ？？　ぶつかつ  
た後アイツは……

カラん、と瓶の転がる音がどこからか聞こえて来る。

ハッ！？

男は立ち止り振り返る。

何かが近づいて来る足音。

それは暗闇の向こうから数十メートル先から聞こえて来る。

男は後退る。その何かは既に男の数十メートル先まで来ていた。

「ひいいい」

男は逃げる。

風を切り裂く様に全力で逃げる。

足が縛れようが何かに当たろうが止まる訳にはいかない。

（ダメだ捕まつたりしたら……したら……アイツみたいに）

足音は止まない。暗闇の向こうで何かは確実に距離を詰めて来て  
いる。

あつと男は立ち止る。

僅かに月が照らすその場所は

「い、行き止まつ……」

目の前には10階建であろう建物、周囲も囲われそこはまるで閉じ込められた檻のようであった。

ビルの隙間から隙向ける風の音、ビードからか聞こえて来る車の音、  
そして

何かが近づいて来る足音。

しかし恐怖のあまり男は振り向く事ができない。

次第にその音は男に近づきをして……その音は男のすぐ後ろで止まつた。

心臓の音だけが男の耳に届いていた。  
最早体を動かす事さえできない。

再度有りもしない睡を命一杯飲みこむと決死の思いで振り返る

と同時に

がしつとその何かは男の頭を掴んだ。  
人間の手。それは人間の手で間違ひ無かつた。

そしてその手の隙間から見える顔が薄く笑つた瞬間、男は意識を失つた。

~~~~~

授業を終えた神岡史貴は残暑厳しい9月の夕日を背に浴び帰宅してこの最中であった。神岡史貴の周りには相変わらず仕事熱心なドラム式掃除が飽きる事も無くせつせと地面に落ちてこむ「://」を回収するために走り回っている。

風力発電用のプロペラもこの生ぬるに風を一身に浴びて滞りなく回り続けていた。

そしてこの暑さは変わらない。

もう夕方だと重いのに歩くたびに体の至る所から汗が浮き出て来る。

最早このプロペラを使って昼間は暑さ対策として巨大扇風機にして使えばよいのではないかと思つてしまつ。

8月も終わり9月中旬にもなろうと重い汗まで夏真っ盛りと言わんばかりの暑さである。

地球温暖化なんて言葉は最近聞かなくなつていてが、実はまだどんどんと温暖化は進んでいるのではないかと疑いたくなる。

堪らず道端にポンとある自販機にて冷たい飲み物を買ってみるもの、冷たいと感じるのは飲んでいる最中だけであつて再び歩き始めてしまつと飲む前と全く変わらない状況である。

だからこそ、そんな暑さを紛らわそつと普段行く事の無いゲームセンターに入ったのがこれまた何かの縁だったのだろう。

何気に入ったゲームセンターで目に入つて来たモノは、とてつもなく真剣な眼差しでクレーンゲームと睨めっこをしてこる常盤台中

学の制服を着たお嬢様？　の姿であった。

じーと瞬きすらしていかのようガラス越しのぬいぐるみに視線を向けている。どうやら相当集中しているようで後ろに神岡史貴が近づいてもその存在に全く気が付いていない様子であった。

そして彼女意を決したように素早く100円を取りだすと流れるような手さばきでそれを機械に投入する。

まずは壱のボタン、横移動をさせる為のボタンを押しグラグラと揺れながら移動するクレーンを見つめ、見定めるようそのボタンを離す。そして弐のボタン、縦移動の為のボタンを押しそして目を光らせるよう見つめているぬいぐるみの上に来た瞬間にそのボタンを離した。

クレーンはそのぬいぐるみに一直線に降りて行く。

そしてそのクレーンは狐のぬいぐるみをがっしり掴んだ。

ゆうくつとぬいぐるみを掴んだままそのクレーンは出口へと進んでいく。

しかし残念な事に出口を目前にしてその狐のぬいぐるみはクレーンから下へと落下してしまった。

「ぐうう。またダメかああ」

と2歩ほど後退りした所でその体は神岡史貴に当たった。  
その衝撃で仄かない匂いがふわりと神岡史貴の鼻を襲つ。

「あ、『メンなさ　つて何でアンタが『』にこるのよ…。」

予想通り常盤台中学の制服を着た赤い髪の女の子、上坂茜は神岡史貴の存在に気が付くと最早化学反応の様に吠えて来た。

しかし、本当によく出合つモノだと感心したくなる。いくら同じ第7学区に学校があるとは言え、同じまで毎回のように出合つゝとはそう無いであろう。

運命の赤い糸、と言ひモノが存在するがもしもこれがその類なら上坂茜の炎によつて焼き切られているだらう。

「お前、JR常盤台中学のお嬢様がこんなゲームセンターで何やつてんだよ」

「嫌味にしか聞こえないわね」

訊いてみる必要も無かつたが一様訊ねてみた。

実際こんなゲームセンターで常盤台中学の制服を着ていたら異世界から迷い込んできた住民の様に浮いて見える。

「その狐がそんなに欲しいのか？」

「な、何言つてるのよ…？　私がコンタなんて欲しい訳ないじゃない！　狐よ狐、厚揚げとか食べるのよ？　たまたま通りかかって目に入ったからやってみただけに決まつてるでしょ」

と上坂茜は全力否定するが「」のぬいぐるみの名前を知っている時点でその否定は怪しいものだ。増して先ほどの集中力、執着心を見ていれば欲しい事くらい誰にだって分かるであらう。それを認めない所が上坂茜らしいと言えばらしいのであるが、

それにたまたまゲームセンターに入る事なんてあるのだろうか？などと考えたが、あつと思ひだす。

自分もまた暑さ凌ぎに立ち寄ったにすぎない。

( 僕もたまたまだよな )

そんな事を思つている間にも直視はしていないが上坂茜の視線はチラチラとその狐のぬいぐるみに向けられている。

「取つてやうか？」

ビクッと上坂茜はその言葉に反応した。

上坂茜の部屋がぬいぐるみで一杯と言つイメージはなかなか出来ないが、あまりにも欲しそうな目をしていたのでそんな言葉を掛けみてた。

「べ、別にいらっしゃいわよ」「んなぬ」とぐるみ

「あつや、じやあこー」

「

と叫みたした瞬間、ちよつと苦笑ながること、と袖を掴まれる。

「まあ、じりじりせりあひだらうひこわよ

素直に欲しきつて言えまーいのに、何で思つがそんな事を口に出したりでもしたらこの街のゲームセンターを一つ潰しかねないので心の中にしまつておく事にする。

「で、どれがいいんだ?」

んつと彼女はそれを見ずに視線を逸らしたまま恥ずかしそうに指す

が、

「て、あんなでっかいヤツ取んのか!?」

上坂茜が指さす先にはクレーンの中の支配者と言わんばかりにど

つしりと座つゝむー三はあらう狐のぬいぐるみがあつた。

「わ、悪い？？ 取るつて言つたんだから責任もつて取りなさいよ」

分かつた分かつた、と機械に100円を投入し始めるもののその狐はビクともしなかつた。

「ちよつと… もつと向ひに向ひ」 「もつとじつに決まって  
るだろ…」 「全然ダメじゃないのよ！ やつぱりこつちつて言つて  
るでしょ…」 「ええいうるせい… だつたらお前がやればいいだろ  
！」 「アンタがやるつて言つたんでしょ！ 責任もつてやりなさい  
！」

なんて奮闘する事30分……

「た、倒れた！ 倒れたわよ！ ちよつと店員さん… これ倒れた  
わよ…」

と言つ事で、何とかその巨大ぬいぐるみを獲得する事に成功した  
のであつた。

帰り道、その巨大な狐のぬいぐるみを抱きかかえるように持つて  
いる上坂茜は少々歩きづらそうであつたが鼻歌交じりで何かご機嫌

のようであった。

「そんなにその狐が好きなのか？」

「べ、別に好きなんかじゃないわよ、大きいのにしたのも取るんだ  
つたら一番大きいヤツを取った方がお得だしそれに……」

「それに？？」

（……アンタが取ってくれたから）

最後の言葉はあまりにも小さ過ぎて神岡史貴には聞き取る事が出来なかつた。

「ええ？ 何てえ？」

と聞き返すが、上坂茜は次第に頬を赤らめて

「な、何でもないわよー。」

とその巨大なぬいぐるみで神岡史貴の背中をドンと叩く。

思つた以上の衝撃にぐはつと前のめりになる神岡史貴の横をスタ  
スタと上坂茜は歩いて行つてしまつ。

「おい！ せつかく取つたモノ大切にしろよ！」

「うるさいわね、もう私だからどうせいつもこでしょ」

つたく、と神岡史貴は頭を片手で搔きながら上坂茜を追いかける。

「おい待てよ！」

その2人を追う様に夕口は既に地平線の彼方へ消えようとしている。

学園都市に再び夜が訪れようとしていた。

## 回つ始める歯車（後書き）

今回も日常になつましたが、少しずつ物語り徐々に進んでいきます。

アドバイスや感想があればよろしくお願いします。

都合説（前書き）

お気に入り15件ありがとうございました。  
これからもよろしくお願いします。

「九条さん、指示お願いしますね」

夕方の学園都市の街中を走りながら彼女は身長に似合わぬ大きなリボンを揺らし耳に装着された通信用マイクに向かって声を発する。右腕には盾のマークが入った腕章を靡かせて彼女は走る。

「……………了解」

マイクの向こう側でカタカタと端末の画面を見ながら九条静香は静かに呟いた。

そして普段では絶対に聞く事が出来ないであらう口調で彼女は喋りだす。

「ターゲット西に向かつて逃走中、逃走経路分析……予測、及び最善のルートを算出……完了。10m前方を左折」

ラジヤーと彼女は前方10mを左折し裏路地へと入つて行く。入り組んだ裏路地であつたがそんな事は問題ない。

「前方2つ目を左折……さらに50m先を右折……100m直進した後右折」

彼女は淡々とその指示に従つて裏路地を走るのみ。幾度となくある放置されたゴミを小さな体を最大限に活かし避ける、そしてある時は体に似合わぬジャンプ力でその障害物を飛び越える。

「ターゲット遭遇まで残り30秒、前方裏路地を抜けた場所、右にて犯人と遭遇」

裏路地を抜け夕暮れの光が射す人通りのない道に出た雨音唯は右を振り向く。10m先、この暑い中季節外れのニット帽を被り、大きな手荷物を持つて男は走つて来る。その男は彼女を発見するなり立ち止つた。

「ジャッジメント風紀委員ですよ。大人しくした方が身の為です」

彼女はジャッジメント風紀委員を示す腕章を相手に突きつけながら言つた。

ジャッジメント風紀委員。学園都市内の能力者の学生たちによって構成される学園都市の治安維持機関。

原則として校内を管轄とし、それぞれの部署によつて管轄の範囲が決められておりその中で起きた能力者による犯罪から無能力者による事件など様々な仕事を任される。

今日もその第177支部所属の雨音唯は目の前のATM強盗の男

を捉えるべく向かい合っている所である。

「何が<sup>ジャッジメント</sup>風紀委員だ、ただのガキじゃねえか」

その男は彼女を見て笑う様に言つ。

身長150cmにも満たないその小さな体に子供を思わせるような大きなりボン。見た目は確かに子供である。

余裕だと言わんばかりにその男は何の警戒もする事無く彼女へと近づいて行く。

男は見下ろす。その20?は有りうる身長差に男は何の危機感も持つていなかつた。

へへ、と男はその荷物を地面へと置き、拳を鳴らしながら笑う。自分の勝利を確信するかのように笑う。

そしてその拳を振り上げ

「お子様は帰つてお昼寝でもしてな!」

容赦なくその拳を振り下ろした。

ゴン、と鈍い音が辺りに響き渡る。

それは人に当たつた音では無くもつと硬い、そつまるでドラム式掃除ロボットの様な機械に当たつた様な音。

そしてその瞬間辺りには男の悲鳴が響き渡る。

右手を左手で抑えて叫ぶ男の前には、最新の科学技術によつてローティングされたドラム式警備ロボットの姿があつた。そのボディには多少凹んだ様な後が見受けられる。

警告、警告。打撃による物理的ダメージを感知。周囲の

なんて言葉を発しながらその辺をグルグルと回つている。男が殴つたのは彼女ではなくこの警備ロボットであつた。そして肝心の彼女はと言つと、

「小さいからってバカにしちゃいけないだよ～」

その場所から10㍍ほど離れたベンチに腰を掛けっていた。ひょこっと椅子から立ち上るとゆつくりと男に近づいて行く。そして見上げる様に叫つ。

「もう観念しますか～？」

しかし男は観念するどころか、ふざけるなあ、と叫びながら今度は左手を振り下ろして来る。

ただ再び男の前にはドラム式警備ロボットが現れ、その硬いボディを力一杯殴つてしまふことになる。

警告、警告。打撃による物理的ダメージを再度感知。

甲高い警報音が辺り一面に鳴り響いた。

男は膝を着き痛めた両手を見つめる。  
まだ動く、そう確認した男はポケットから何かを取りだした。

拳銃。

その引き金を引けば人1人の命を奪う事など容易い兵器。  
そんなモノをこの男は平氣で目の前の少女に向ける。

「よつやく追いついたよつだな」

カツツと男の背後に地面を叩く靴の音と女性の声。

「待たせてすまない、雨音」

クールビューティーを想わせるその容姿にセミロングヘア。そ  
の髪を左手で搔き上げ彼女は立っていた。

「何だ貴様は！？」

男は振り向き言葉を投げつける。

とは言つものの、こんな場所に好んで来る人間はいない。人通りの少ない道、さらには鳴り響く警備口ボットの警報音。そんな場所に来る者など決まつていてる。

「私が？ 私はこの9月より風紀委員第177支部に配属となつた  
春日井美希と言つ者だ。」

と腕章を見せる。

チツ、やはり風紀委員か、と男は呟く。

「大人しくしろ、と言つても素直に聞く訳もないか」

彼女はそう言つとカツカツと音を鳴らし男に近づいて行く。力チャ、とその銃口は彼女に向けられた。

「これ以上近づいたら撃つぞ」

しかし彼女は止まらない。その手に握られているモノが一瞬にして人をただの肉の塊へと変えてしまう兵器である事を知らないかのように平然と彼女は歩く事を止めない。

その姿に逆に男の方が恐怖を抱き始めていた。こんなモノを田の前にして何一つ構える、避ける、そう言つた行動を起こしそうと言つ素振りも見せない彼女に男は脅えているようである。

「撃てばいいや」

その言葉に男は耳を疑う。

引き金を引いた瞬間、人間を肉の塊へと変えてしまうモノを前にしてなぜそんな言葉を発することができる？

男は考える。

「 貴様も能力者か。はは、能力者は皆いいつだ。スキスマウト無能力者を見下しゃがつて」

距離は10mを切っていた。

速度を一定に彼女は男との距離を詰めていく。

男は銃を握る手に力を入れる。

そしてその引き金を引いた。

弾丸は小さな炸裂音と共に彼女の心臓に向かつて飛んでいき

しかしその弾丸は彼女の体をなぞるように避けて彼女を通過し後ろの街灯へと突き刺さった。

距離は5mを切った。

男は有りつ丈の弾丸をすべて発射したがその弾丸は1発たりとも彼女を捉えることはなかった。

弾の切れた銃を投げ捨て男は叫び声と共に拳を振るう。

男は内心分かっていた。銃が効かない相手に拳なんてモノは役に立たない事くらい、こんな軽い拳が彼女を捉える事は出来ない。そんな事は分かつていた。

しかし考えるよりも先に体が動いてしまった。

恐怖のあまり体が思考と逆の動きをしてしまったのかもしない。

男が放った拳は予想通り彼女を捉える事はなかった。まるで油の引いた地面を滑るかのようにその拳は彼女をすり抜け

その勢いを利用し春田井美希は男の腕を取り地面へ抑え込んだ。

「言つておくがお前らを見下してはいけない。風紀委員の中にも無能力者（レベル〇）は何人もいる。お前が無能力を理由に逃げているだけだ。」

「くつ」

男は何も言い返すことなく施錠をかけられ到着した車へと乗せられる。

男は何も言わない。

逃げているだけ、その言葉が男の頭の中をぐるぐると回っていた。

~~~~~

「雨音、さつきの事件の書類はここでいいのか？」

数枚の書類を片手に大きな棚の前で指をさし春日井美希は雨音唯に問いかけていた。

「そこで大丈夫ですよ~」

相変わらずトレイの上に不安定な場所にコップが並びそれを完璧なバランス感覚で保つてお茶を配つている。

「はい、春日井さんもお疲れ様でした」

彼女が席に着くと同時に雨音唯は彼女の机にお茶を置く。

机の傍には未だ片付けられていない段ボールが数個見られる。

ジャッジメント  
風紀委員第177支部。 風祭竜、雨音唯、九条静香の3人が所属している。

そしてこの9月よりこの第177支部に所属となつたのが、第7学区の高校に通う春日井美希。元々他の支部で風紀委員ジャッジメントを行つていたので異動と言つ形でこの支部にやつて来た。

「何を見てるんですか？」

端末と見らめっこをしている九条静香に雨音唯は話しかける。  
その画面には

学園都市における都市伝説

「九条ちゃんのに興味あつたんですか？」

「…………暇つぶし」

と九条静香は単調に答える。  
なにに、と春日井美希も混ざり画面を覗き込む。

ギャンブルで一度も負けた事がない男

夜な夜な学園都市の公園を焼き尽くす炎の悪魔  
出合ひと最後?? 魂を抜かれる謎の生物

「どれも変なモノばかりですね~」

などと雑談をしてみると

「上坂茜も、上坂茜も~」

と部屋のドアが開かれる。その先には上坂茜の姿があつた。

「上坂茜も、上坂茜も~」

皆が集まつてこら姿を見て上坂茜もその端末に近づく。

「何見てんの? 何々? 学園都市における都市伝説、へえこんな  
のに興味あるんだ」

と上坂茜も田を通す。

ギャンブルで一度も負けた事のない男

(そんなのイカサマしてるだけでしょ)

夜な夜な学園都市の公園を焼き尽くす炎の悪魔

.....

「誰が悪魔じやああーーー」

ぢやぶ台をひっくり返しそうな勢いで叫ぶ上坂茜。

「ど、どひしたんですかーー？」

「い、いや何でも無いのよ、ええと何々？　出合つたら最後、魂を抜かれる謎の生物？　こんな胡散臭いモノ本当にある訳がないじゃない」

と手を軽く広げて呆れた表情で答える。

そう都市伝説なんて所詮噂よ、う・わ・さ。夜な夜な学園都市の公園を焼き尽くす炎の悪魔だつて噂よ  
なんて自分に言い聞かせる上坂茜であつた。

そしてポンッと何かを思い出したように上坂茜は手を叩く。

「そういえば下で春名さんが待つてるのよ。貴方たちまだ仕事あるの? 無かつたら一緒に帰ろうと思つて寄つたんだけど」

「そう上坂茜は兩音唯と九条静香に訊ねる。

どうやら2人も今日は帰るようつであつたので一緒に帰る事になつた。

「春日井さんももう帰られますか~?」

「そうだな私も帰るといつ」

それじゃ、と2人は荷物を持ってドアへ向かい、失礼しまーす、なんて声をかけて部屋を出て行く。

2人の後を追いかけるように春日井美希は机にある荷物を手に取り部屋を出ようとすると、荷物を取ると同時に一枚の資料が机から落ちた。

それを徐に拾い、机に戻す。

その際に資料をチラシと見たがそのまま部屋を後にする春日井美希。

その資料には、こうつ書かれてあつた。

『学園都市内で発生する原因不明の意識不明者についての報告書』

都市伝説（後書き）

新たなキャラ登場しました。

日常の描[写]つていうのは難しいですね。

頑張ります。

## 現れた何か（前書き）

時間を掛けた割には駄文な気がします。まだまだですね……  
よひやく最新話です。

## 現れた何か

「これどう思いますか～？」

雨音唯の声を聞いていると真剣な話も真剣出ないよつて聞こえてしまいそうなのだが、実は真剣な話をしているのだ。

「そうだな、やはり何らかの事件として調査してみてもいいのかも  
しないな」

「…………事件」

### ジャッジメント 風紀委員第177支部

棚には整理整頓された資料が内容の頭文字順にファイリングされている。部屋の所々には花や植物が置かれてあり、室温管理は抜群の仕事部屋である。

そんな中央に設置された長方形の机を囲むように3人は難しい顔をしていた。

「こんなにちは、って難しそうな顔してどうしたの？」

まるで自分は風紀委員です。と言わんばかりに何の違和感もなく上坂茜は部屋に入つて来た。それとは対照的にその後ろを申し訳な

ジャッジメント

それなりな表情で春名星花が続いて入って来る。

「ああ、上坂に春名か。一応ここは風紀委員以外立ち入り禁止なんだが、まあ良いだろ?」

と春田井美希は机の上にある資料に目を戻す。

それを覗き込むように上坂茜と春名星花も資料を見る。

「学園都市における意識不明者の報告数?」

「ここ最近病院に運ばれる意識不明者が増えていてな、この第7学区だけでも既に50人が意識不明で病院に運ばれている」

50人。年間では無くこの9月になつてからの人数である。

「それは何かの病気が流行つているつて事ですか?」

「そう言ひ訳では無いみたいだ」

「じゃあ何が原因で?」

しかし春日井美希は首を横に振る。

原因不明。

学園都市の科学を持つとしても原因を突き止める事には至っていないと言つ。

「学園都市全体で224人の学生全てが裏路地や人目に付かない場所で発見されている。つまり病気では無く、事件として見た方がいいだろう。それに意識不明に陥っているが誰一人意識を回復した者はいないそうだ。いや、正確には99%だな」

99%?

と言つ事は、

「たった1人だけ意識が回復したらしい」

なら話は簡単、事件であるならその学生に話を聞けば何かしらの情報を得る事が出来るのでは？

そう思った上坂茜は訊ねてみるが、  
しかしそれは出来ないと言つ。  
資料によれば、

「その学生は意識は回復したが、人形みたいだそうだ」

人形。

動けない、意思がない、ただ目を開いているだけ。

心がない。

「まるで心を抜き取られた様に」

!?

その言葉に反応するかのよひに上坂茜はすぐに端末を前に向き合つた。

キーを素早く入力し、何かに取りつかれた様に画面へ集中する。力チ、とある場所をクリックした所でよひやく上坂茜は止まった。

これ、と上坂茜が指さす画面に映つてあるのは

学園都市の都市伝説

出会いつと最後、魂を抜かれる謎の生物

「これ何か関係無いかな?」

確かに、とその場にいた全員が頷いた。

都市伝説など作り話が多いが、中には思いもよらぬ情報が紛れ込

んでいる場合もある。ましてここには科学の最先端学園都市。ネットの情報も甘くは見れないと言つ事だ。

「静香、お願ひ」

コク、と頷いた九条静香は席に着くなりその都市伝説についての情報を洗い浚い調べ始めた。

流れる様な指使い、無数にある情報から確信の一つを探し出すよううに端末の画面は動き続けている。

数分の間無言の状態が続いた。全員が画面に食いつく様に睨みつけている。

スッと九条静香の指が止まった。  
力チ、とマウスのクリックする。  
そこに出で來たのは

書庫パンク

学園都市の総合データベースであり、基本的に生徒や能力など学園都市に関わる情報の全てが登録されている場所である。

徐にキーを叩き画面を進める九条静香。

とある病院の診察結果

9月12日、1名の意識不明者の意識が回復。ただそれを回復と

呼ぶかどつかには疑問が残る。偶然による体のみの覚醒と呼ぶべきであろう。様々な検査の結果、演算能力がゼロである事が判明。学生の能力段階は異能力者（レベル2）でありながら無能力者（レベル0）である事が確認された。今後の

レベル2からレベル0へのシフトダウン。

能力の高さとは演算能力の高さである。

意識を失つた為に演算能力が無くなつたのか、それとも……

九条静香は徐に画面を切り替え別のサイトを表示する。  
何やら掲示板の様なサイト

21：学園都市で起きてる通り魔事件の被害者は全員意識不明らしいぞ

- 22：被害者全員が能力者なんだろ？
- 23：噂では1人意識回復したって
- 24：そいつ能力失つてるって話だぞ
- 25：能力者の仕業？
- 26：そんな能力者は書庫バングにいない
- 27：のぞいたのか
- 28：登録されてないだけかもよ

「これってBBS？ 単なる書き込みでしょ」

しかし興味深い事はこの先に書かれてある事であった。

102…被害者は外傷ほとんど無いんでしょ？

103…まさか被害者は魂を抜かれた？

104…それ都市伝説のだろ？

105…じゃあ破壊された？

106…何を？

107…パーソナルリアリティを

108…そんな事出来んのか？

109…出来ないだろ

110…でもそれなら能力を失う事も説明がつくかもね

111…ホントに破壊されちゃったの？

112…俺元々レベル0だから大丈夫だな

113…俺レベル1だけど…大丈夫だよね

114…破壊されちゃうかもね

115…夜の外出控えないと…

116…自分の現実を破壊される

117…現実破壊？

118…いや。これは寧ろ

「現実……殺し？」

全員は息を飲んだ。

これは単なる掲示板での会話に過ぎない。根拠も無ければ証拠も

根拠も無ければ証拠も

無い。

何しろ田撃者がゼロなのだ。

その犯人から逃れた者はいない。  
つまり目撃者は全て意識不明者だ。被害者以外はそれが一体何なのか分からぬ。

ただ可能性として有り得るのは

「この学園都市に能力を破壊するかもしない何かがいるって事なのか?」

データーからは狙われているのは能力者ばかりである。しかしそれ以外の学生が狙われないと言ひ可能性は無いと言ひ訳ではない。

「これは我々だけでは手に負えない事件なかもしないな……」

「それならまた私たちの出番かもしれませんね

春名星花はそんな事を口にした。

しかし彼女以外は何の事が分かっていない。

それでも彼女は荷物を持って部屋を出ようとする。

「ちよつと毒をかきこ？？　どこに行くの？」

彼女は答えた。

「上条学院ですよ」

~~~~~

「つまり能力者ばかりが意識不明になる事件が多発していると言つ  
訳だね」

上条学院のとある会議室。

会議室と言つてもただ単に机が長方形に並べられているだけの言

わば話し合いなどをする様な場所である。

林光一朗は机に両肘をつき窓から差し込む日差しが眼鏡を光らせ  
ている。

まさに会長の名に相応しい。

部屋には既に神岡史貴ともう一人男子生徒が連絡を受けて集まつ

ていた。

「 そう言つ訳よ。で、そつちの人は初めてなんだけど誰なの？」

相変わらず年上に対して言葉に気を付けると言つた事をしない上坂茜であつたが最早そんな事を気にしている者はいなかつた。

肩まである黒髪に異様に長い前髪は鼻の上まで覆いかぶさり目は相手側からは見えない。どこか物暗そうな見た目からは、お前友達少ないだろ！ と言われていそうだ。

「 君たちは会うのが初めてだね、彼が戦城明君だ」

「 ..... 戰城です」

と女子軍団は一斉に九条静香を見た。

似てる

言わば男性版九条静香と言えるだろ？

「 実は既に僕たちもその情報は得ていてね、君たちに協力をお願いしようと思つていたんだ。所でそちらの女性は何方かな？」

「私は春日井美希。<sup>ジャッジメント</sup>この9月より風紀委員第177支部に所属する事になった者だ」

戦城君、の言葉で戦城明は携帯用端末のキーを素早く入力していく。

スッと林光一朗の前に出された画面には書庫<sup>パンク</sup>に登録されているデータが表示されていた。

フムフムと画面と睨めつ<sup>こ</sup>する林光一朗。

「新たにレベル4が協力してくれるとなると心強いね」

ありがとう、と端末を退けた林光一朗は、さて、と徐に真剣な表情へ変わっていく。

「今回の事件は少々難しい。まず相手の特定が出来ていないと言う事、次に相手は能力を破壊する可能性があると言う事。現実殺し、すでにネット中ではそう呼ばれているみたいだね。さらに被害者全員が夜に襲われていると言う事から調査をするのであれば日が暮れてからになるね」

「それに範囲も絞った方がいいわね。学生の多い第5学区、第7学区、第18学区この3つがいいんじゃない」

……何よ、と周りを見渡す上坂茜。

周りはまともな事を言つた上坂茜に少し驚いた様子であった。

「ただ3つに絞つたとしても人数がもう少し欲しい所だね。戦城君には残つてもらわないといけないし、九条君と雨音君にも残つて戦城君の手伝いをしてもらいたい」

ええ～、と雨音唯は残念そうな顔をする。どうやら行く気満々だつたようだ。

何故2人が必要かと言つと、戦城明の能力、千淨天眼<sup>イーグルアイ</sup>は能力者の微弱に発しているAIM拡散力場を察知する言わばレーダーみたいなモノである。一度に10人ほどの居場所を把握する事が出来るが能力発動中はその場から動く事が出来ない。

「戦城君には場所の把握、九条君と雨音君には僕たちへの連絡役をやつてもらいたい訳だ」

神岡史貴、林光一朗は、上坂茜、春名星花、春日井美希、5人で3学区を割るには最低でも後1人は欲しい所であるが、風祭竜は参加する事が出来ない。

どうにか後1人……  
と、考えようとしている

「どうやら人手不足の様じやの

窓側から聞こえた声に全員が振り向く。  
肩まである黒い髪を風に靡かせ窓に腰を掛け腕を組みながらそう  
呟いた。

「刀場亞紀！」  
とばあき

彼女はスッと窓から降りると徐に歩き出す。  
かつて敵対した相手に皆は構えを取る。

そんな事をお構い無しに彼女はゆっくりと神岡史貴に近づき大きく手を広げ

「会いたかったぞ史貴殿」

がばつと神岡史貴の胸に飛び込んだ。

「ええええええーー？」

状況の理解できない神岡史貴は顔を真っ赤にしあたふたしている。  
見た事が無い彼女の上目使いで思考停止に追い込まれると同時に  
押しつけられる豊満な塊が一層神岡史貴の思考を停止へと向かわせ

た。

「あ、アンタ何してんのよーー。」

上坂茜は全身に炎を滾らせて獣の様に吠える。おまけに瞳まで燃えているようであった。

間違いなく室内温度が3度は上昇したであろう。

「何じゃまたひるとい小娘が吠えておる様じやな」

「誰が小娘なのよー。」

神岡史貴から離れた刀場亜紀と上坂茜は睨み合ひ。既に刀場亜紀の手のひらには風の渦が出来ており、上坂茜も何時でも飛びかかる様な状態である。

「お、おー2人とも止めろって」

と仲介に入る神岡史貴であつたが  
アンタが悪いんでしょ！ と上坂茜に怒鳴られる始末。  
ただ刀場亜紀の反応は……

「すまなかつた史貴殿」

その素直ぶりに上坂茜は驚いていた。仲介に入つた神岡史貴もこれほど素直に聞いてくれるとは思つていなかつた。

「で、アンタは何しに来た訳!？」

「妾は史貴殿に会いに來たのじや。あの時以来妾の心は史貴殿の物じや」

と神岡史貴の腕に抱きつぶ。

な!?

「何が史貴殿の物じや、よ。いいから離れなさい!」

メラメラと火花の散らすように燃える上坂茜の横で春名星花は顔を赤らめ頬をブツと少し膨らませている。

この4人の世界から放り出されている5人は声を揃えるように呟いた。

修羅場だな

~~~~~

事情を説明した神岡史貴によつて急遽参加した刀場亞紀は神岡史貴と共に第18学区を。

班分けに文句を言しながらも第7学区を上坂茜と春名星花が捜査する事になり

そしてこの第5学区をあたる事になつた林光一朗と春田井美希は彼女の意見により別々に行動をしていた。

林光一朗は行動と共にする事を提案したが彼女は一刻も早く犯人を見つける為に別々の案を出した。

林光一朗がそれを承知したのは彼女が風紀委員であると同時に、ベル4の能力者であつた事が大きい。

また戦城明のレーターにより場所把握が出来てゐる事と、もし犯人を発見した場合は応戦せずに応援を待つと言う約束付きだ。

春日井美希はあえて人通りの無い道を選んでいた。

情報によると7割の被害者が裏路地で襲われたと言う事から裏路地が一番犯人との遭遇が高いと踏んだからだ。

時刻は午後の8時20分。

街灯がほとんど無い裏路地。壁際にはいらなくなつた自転車や何

かの電化製品、ビールのケースなどが置かれてありほぼ「」捨て場状態であった。

街の音はほとんど聞こえなくなり、どうやら相当奥まで来てしまつたようだ。

集合時間は9時00分。そろそろ戻ろうと振り向いた

その20mほど先

黒いコートに身を包んだ何かが立っていた。

顔を覆い隠す様にフードを被っている為それが男性なのか女性なのかそれとも別の何かなのかは分からぬ。

ただ一つ言える事は

コイツが犯人に違いない

ピリとポケットにあるスイッチを押す。

霧上常連合？ 本部（戦城家）への救援信号。犯人との遭遇を合図する為の物である。

戦城明の能力により把握した場所を九条静香と雨音唯が5人へと連絡する。

スッと田の前の何かがコートの中から鉄パイプを取り出した。手に取つたそれはグニヤグニヤと見る見るうちに形を変えて1本の刀になつた。

(鉄を変形させる能力者?)

その刀を振るい勢いよく駆けだし近づいて来る。

(外傷ゼロって話じゃなかつたのか? 応戦しない約束だつたがこれなら……)

降りかかつてくる刀を避けよつともせずに春日井美希は構える。左腕目掛けて振り下ろされたその刀が彼女に触れた瞬間まるで油でも塗つてあるかのようにスルリと肌を滑り刀は地面へと刺さつた。

態勢と崩した相手にそのまま左手で裏拳を背中に叩きこむ。ようつと寄れながら相手は3歩ほど歩き立ち止る。振り向く際に顔を隠してあつたフードが揺れる。その隙間から僅かに見えた表情からは

男?

そんな雰囲気を感じた。

「無駄だそんなモノ私に通用しない」

オーバースライド  
表面滑走

あらゆる物理攻撃を受け流す彼女の能力の前では刀、弾丸、そう言つた物は一切通用しない。しかし受け流せる物は物理のみである為、炎、電撃といったモノを受け流す事は出来ない。

一瞬鼻で笑つた様な声が聞こえた。

その男は何かを察したようにコートの中に持つていたもう一本の鉄パイプを投げ捨てる。

同時に男の動きが止まる。

それはほんの1秒か2秒、短い時間であった。何かが出来る時間でも無い、考える様な時間でも無い。

が、次の瞬間

バチン、と男の指から火花が散つた。

**現れた何か（後書き）**

事件の幕開けですかね？

色々と考えてはありますので次回が気になる方はお待ちください。

## 敗れ去る超能力者（前書き）

久しぶりの投稿になります。

お気に入りが20件になりました。本当にありがとうございます。

## 敗れ去る超能力者

男の指から発せられているモノ明らかに電気である。

春日井美希は驚き戸惑う。先ほどまで男は確実に鉄を操る能力の類であつた事は間違いない。しかし目の前の男は指からバチバチと火花が散っている。

それはありえない光景だ。

能力は1人につき1つまでと決まっている。

多重能力！？

「お前は何者だ？」

しかし男は何も言わない。

ただ軽く上げた右手の指から電気を発しているだけ。

まるで感覚を確かめる様に数秒ごとに火花を散らしている。

その右手を先ほど投げた鉄パイプに向けて翳すと右手と鉄パイプは電気で繋がれて、いらなくなつたモノを放り投げる様にそれを春日井美希へと投げつけた。

パイプは回転するように春日井美希へと向かうがそのスピードはそれほど速くない。弧を描く様に投げられた鉄パイプは春日井美希まで届く事無く目の前で失速し地面へと落下しそうになるが、

「な！？」

パイプが春日井美希の視界から消えた瞬間、そのパイプの死角から突然と男が距離を詰めていた。

無造作に投げられた鉄パイプは攻撃が目的では無く死角に潜り込んで近づく為のモノであった。

彼女は咄嗟に横へと体を回転させ回避を試みる。それが単なる打撃であれば避ける必要も無い。<sup>オーバースライド</sup>表面滑走で流せばいいだけの話しがある。しかし現在男の右手の中にあるモノは電気の塊。

それは手の平に収まるほど小さなモノだ。

簡単に言えば人工スタンガンと言えるかもしれない。

一〇万ボルト。

これだけあれば人を数秒から一分間動きを封じてしまう。  
長年の風紀委員<sup>シャッジメント</sup>で多くの無能能力者<sup>スキルアウト</sup>を相手にしてきた春日井美希はその右手を見た瞬間、それが無能能力者<sup>スキルアウト</sup>が保持しているスタンガンと同じ目的である事を予測した。  
即ち相手の動きを封じる事。

その右手に触れてしまつとスタンガンを喰らつた様に体の自由を封じられるだろう。そう判断した春日井美希は瞬時に回避を始めた。案の定男の右手は空を切る事となる。

咄嗟の判断による回避に成功した春日井美希はすぐに立ち上がり男との距離を取りながら構える。

男は首だけ振り返りユラつと倒れるように方向を変えて再びそのままを彼女に向けて突きつける様に前に出す。

既に構えを取っていた春日井美希はそれを体を反転させるだけの動作で避け反撃しようと拳を握るが、男は右手を避けられた反動を使つて振り子の様に重心を移動させて左手を突き出す。  
その手も電気を帶びていた。

今度は後ろへ大きくバックステップを取る様な形でそれを避ける

春日井美希。

(今のは少し危なかつた)

男との距離は五メートルも無い。

春日井美希の拳を握る手からジワリと汗が滲み出る。

重心を落とし構えを取る春日井美希とは対照的に男は表面を向くと無防備で立ちつくしている。

またも数秒男の動きが止まる。

その瞬間、春日井美希は行動を起こしていた。

五メートルの距離ならば僅か数歩で間合いを詰める事が出来る。

男が何を考えているのか分からぬが無防備の瞬間を無駄にする事も無い。

男との距離をゼロにまで縮めた春日井美希は足払いをする様に男の態勢を崩す。まるで人形の様に抵抗すらしない男はいとも簡単に壁に押し付けられた。

一連の流れの様に拘束用の手錠で壁にある配水管の様なパイプに男の左手を固定する。

力チ、と言づ音と共に男を確保した。

「何とかって感じね」

フウ、と自然に息が漏れる。

最後は案外呆気ないモノだった。男は抵抗すらしなかった。

諦めた、と言える様な感じではなかつたが、

「とりあえず報告ね」

と彼女はポケットに入っている携帯端末を取り出し画面を見た所で、

異変に気が付いた。

壁に拘束されているハズの男の姿が無かつた。

僅か数秒。携帯端末を取りだす一瞬田を離した間に男は田の前からいなくなっていた。

「な！？」

慌てて辺りを確認するために振り向こうとしたのだが、

瞬間

バチ、と言づ音と共に全身を電気が走り抜けた。

「が……ッ！」

首だけをどうにか後ろに振り向かせた彼女の目に映ったのは、フードの下から歯をむき出しにして笑う男の顔だった。

背中からスタンガンをぶち込まれた様に春日井美希はそんまま表面から地面へとつづ伏せに倒れ込んだ。

（どう……やつて手錠から……）

意識の朦朧とする中、どうにか立ち上がりつつ腕に力をいれるが体はビクともしなかった。

顔だけを動かし見上げると、

男は春日井美希の正面に立ちその場にしゃがみこむ。

壁にはパイプに繋がれたままの手錠がそのままぶら下がっている。手錠を壊したのではなくすり抜けたように手錠は輪を作つたままだつた。

（まさか……テレポ　　）

春日井美希が思考を終える前に男はフードの下から嘲笑う様に歯をむき出しにして、そつと彼女の頭に触れる。

瞬間、

春日井美希の視界は真っ暗となり、ガク、と力が抜けた様に冷たい地面へと向かつて降下し、そのまま動かなくなつた。深い眠りにつく様に。

男は笑っている。

フードに隠れた顔は全てをさらす事は無かったが、見える口元からは絶えずむき出しの歯が見えていた。

ふ、と男の顔から笑みが消えた。

振り返る先の暗闇から聞こえて来るその足音は徐々に近づいて「どうやら間に合わなかつたようだね……」

整えられた黒髪に眼鏡姿。

少し息を切らした林光一朗の姿がそこにあつた。

林光一朗は目線を下に向ける。

そこにはまるで眠るように地面に横たわる春日井美希の姿が見えた。

「君が噂通り魔さんの様だね」

男は何を語らない。

ただフードの下から見える口元は再び笑う。

まるで次の獲物を見つけたハンターの様に薄気味悪い笑みを見せる。

ジリ、と林光一朗は足をずらし両足を開いて重心を落とす。

「どうやら言葉はいらないようだね、なら」

スッと林光一朗は姿を消す。

トランスペリナー  
万有地変

周辺と同化する事によつて姿を隠す能力。

辺りには地面を蹴る足音だけが微かに響く。

林光一朗は一気に男との距離を詰める。

しかし男は何も構えない。ただ突つ立つてゐるだけ。

そしてその男が  
瞬！と視界から消えた。

林光一朗は立ち止り左右を確認するがそこに男の姿はない。  
だとすると

後ろを振り返ると一〇メートルほど先にその男は立っていた。

(空間移動能力者か……それにこちらの居場所が分かつているのか  
テレポータ  
？)

しかし、その男は何かを探している様にキヨロキヨロと辺りを見回している。  
つまりは「」ちらの位置は把握していないと言つ事。

姿を隠せても足音までは消す事は出来ない。その男はただ単に僅かな足音から近づいて来る林光一朗を感じし移動しただけ。  
その男はやがて何かを発見したようにニヤリと薄気味悪く笑う。  
数秒男の動きが止まり

男はその右手から渦を巻く様に炎を生み出された。

( 何！？ )

その男は歯をむき出しにして笑うと、その炎を投げつけた。

(多重能力！？ それにやはり「」ちらの位置が  
しかしそれは林光一朗へ放たれたモノにしては照準がズれている  
様に感じた。そしてその軌道の先には……

「しまつ」

林光一朗の数メートル横には地面に眠るように氣を失う春日井美希がいた。

その男が炎を放つ前に見せた表情には、獲物を誘き出す為の良い事を思いついた、そんな意味が込められていたのだ。

林光一朗の位置が分からぬのなら誘き出せば良いだけの話。

「 クッ！」

林光一朗は咄嗟に駆けだす。

その炎はまるで計算尽された様なスピードで春日井美希へと向かっていた。走ればギリギリで間に合いそうな何とも嫌らしいスピードで。

その炎は春日井美希へ直撃する前に何かに当たつて小さな爆発を起こした。

言ひまでも無い。林光一朗に当たつたのだ。

「 が、は……っ！！」

その炎は全てを燃やし尽すあの灼熱炎コロナリオ帝の様な威力があつた訳ではない。炎の大きさから見てもレベル2かレベル3と言つた程度だろう。

しかしいくら威力が低いと言つても炎は炎だ。その塊が体に直撃すれば徒では済まないだろう。

姿を現した林光一朗の背中は服が焦げて丸い円を模つて、その背中は火傷を負つていた。

ズキズキと痛む背中に歯を食いしばりながら、林光一朗はホツとしていた。

目の前の春日井美希に炎は届く事は無く、地面に倒れている。意識が無い事に変わりは無いのだが、炎を食い止める事が出来て彼女

は炎に晒される事は無かつた。

カツ、と言づ足音。

ホツとしたのもつかの間。振り向く先には、見つけた、と言わんばかりに歯を見せて笑う男の姿があつた。

見つかつたならまた姿を隠せば良いだけの話しだが実際はそんなに簡単なモノではない。

トランスペリエー

万有地変の能力は名の通り有らゆる地（風景）に変化（同化）する能力であるが、それは消える訳ではない。

動くたびに周りの風景は変化する訳であつてそれらを全て計算しながら動き、尚且つ周りに同化しなければならない。その為には複雑な演算が必要なのだ。

余分な雜念、激痛、焦燥、混乱、そう言つたモノは演算能力を大幅に減少させる。

一步進む。これだけの動作でも完全に相手から姿が見えない様にするためには自分の位置、周りの風景、座標、有らゆる物質などを把握し常にコンマ刻みで能力を発動する必要がある。

しかし背中に火傷を負つてしまつた今、能力を封じられてしまつたを言つても過言ではない。

林光一朗が自分を鍛える理由は傷を負わない、激しい運動でも演算に支障がない、そう言つた事も目的に含まれていた。

林光一朗は勢いよく走りだす。

もはや鍛えられた肉体のみが武器となる。

一〇メートルあつた距離を一瞬にして詰める。

男はやはり何もしない。ただ立っているだけ。

また空間移動か？  
テレポート

しかし振り抜かれた中段蹴りは男の腹部を直撃した。

のだが、それはまるで油でも引いているかの様にスルリと表面を滑り空を切る事になる。

勢いを殺せずに相手に背を向ける事になってしまった林光一朗。男はその背中の火傷部分にまるで林光一朗を真似るかの様に足を振り抜き蹴りを放つ。

避けられないと悟った林光一朗は前方に飛びように蹴りの勢いを殺す。

前方に受け身を取る形で飛んだ林光一朗は何とか直撃を免れたが、背中の痛みは増すばかりであった。

（あの能力は間違いないく）

瞬間、男の姿が消えた。  
テレポート

「また空間移動」

そして間もなくして「ゴン」と言づ音と共に上空から豪雨の様な水が降つて来た。

男は建物の屋上にある貯水タンクを破裂させた。そして再び何事もなかったかのように林光一朗の前に現れた。

降り注ぐ水は辺り一面を覆い、地面は林光一朗の周りそして一〇メートル後ろの春日井美希の所まで及んでいる。

「「「クッククック」」」

初めて声が聞こえた。

しかしその声は男の声でもあって女の声でもあってそしてどちら

でも無い様な声。

断定が出来ない。

そのいくつもの声が重なりあつた様な声は

「 「 「 おやすみ」 」 」

そう発した瞬間、男の両手から放たれた電撃が濡れる地面を走り、

「 が あ あ あ 」

林光一朗の全身を駆け巡った。

(この男の狙いはこの僕の )

倒れる際に林光一朗が目にしたモノは、嘲笑うかの様な歯をむき出した笑みと、毛細血管が全て浮き出たように真っ赤な眼。

男はまだ意識の朦朧とする林光一朗に近づきしゃがみこむ。そして頭に右手を添えると

「 「 「 まずは一人目」 」 」

その声を聞いた林光一朗は意識を失い、深い眠りについて行つた。

## 敗れ去る超能力者（後書き）

久々の投稿になりますて申し訳ありません。  
現在とある魔術の天の住人も連載しております、そちらに集中し  
すぎました。

宣伝になりますが、ぜひそちらも一度どうぞ。

今回は展開が早くなつてしましました。

もう少し詳しく書ければよかつたのですが、

こんな簡単に負けてもいいのか！？と思いましてが、こんな戦い  
しか思いつきませんでした。力不足。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3215n/>

---

とある科学の原点帰還(アトミックルーツ)

2010年12月7日14時02分発行